通俗物語

附 新文藝開場

奇小説

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年十二月三十日印刷 昭和五年一月一日發行
「運動場」第五年一月號第四十編

第六年一月号

賀正

梅薫る
電氣旅館の
料理城

一月元旦

木の香新しい百疊敷大廣間
藝術的優美な舞臺裝置

新年御宴會
結婚披露宴

名代割烹 電氣

電話 戎
自 1334
至 1337

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を

芝居茶屋
食事
道頓堀

喜久屋食堂

月味愛すべきに品
天ぷら吉料理
まき鯛日本料理

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

道頓堀

昭和五年一月號　第五年第四十輯

◇表紙（菅原傳授手習鑑・寺子屋）……大塚克三畫

口繪

◆中座初春興行◇「南部坂」鴈治郎の大石内藏之助◇「菅原傳授手習鑑」寺子屋、仁左衛門の松王丸と福助の千代◇鴈治郎の源藏と魁車の戸浪◇「箙の梅」千代之助改め我當の梶原源太景季と襲名口上委◇「南部坂」延若の清水一角と「菅原傳授手習鑑」寺子屋、市藏の春藤玄蕃◇「戀飛脚大和往來」新口村、鴈治郎の忠兵衛◇仁左衛門の孫右衛門◆浪花座初春興行「慶安太平記」堀端、延若の丸橋忠彌◇「鎌倉三代記」右團次の佐々木高綱と扇雀の時姫、「三人片輪」長三郎の鷺太郎助◇新裝成れる文樂座グラヒック◇ダグラス夫妻の歡迎宴紀念撮影◆角座初春興行新聲劇「貝殼一平」中田の仲間一平と辻野の澤井轉◇南座竣工紀念吉例顔見世グラヒック

◇扉（干支に因みて）……（一）

新年の辭……白井松次郎（二）

御挨拶……福井福三郎（二六）

◆近松情調の過去・現在……高須芳次郎（四）

◆新建築と古藝術と……鬼太郎（七）

◆文樂を訪ねて……安部豐（八）

◇「寺小屋」の一考察……森ほのほ（二八）

◇寺小屋覺え書……高谷伸（三〇）

◇誰が私をそうさせたのか……椿八千代（四三）

▽昭和四年の道頓堀と芝居……高橋舟齋（四九）

▽馬の脚について……菅原寛（五四）

◇文樂座新築に際して……加藤亨（五六）

◇差當つての注文……八木善一（五九）

◇文樂の「箸」……中井浩水（六一）

◆新文樂の竣成と思ひ出るまゝ……竹本土佐太夫（四五）

中座

名馬……（一一）

菅原傳授手習鑑……（一三）

南部坂……（一七）

箙の梅……（二〇）

戀飛脚大和往來……（二三）

浪花座

鎌倉三代記……（三二）

春日局……（三六）

慶安太平記……（四〇）

角座

貝殼一平……（五二）

文樂のお話……（六九）

◇初春の大阪劇壇……（五六）

◇午歳の俳優……（五九）

◇昭和四年の劇壇清算……（五八）

△挿繪カット……田中滿彦

△編輯後記……松本泰三（八〇）

お芝居の幕間と
お歸りにはお揃で
食慾をそゝる秋のお献立が
お待ち申してゐます
梅園
お芝居でのお食堂にて……
お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……
中座食堂
本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

會旗優勝旗
劇場幕幔
緞帳
梅原商店
神戸市
楠町西門
電話元町一六一五番

謹賀新年

・松竹土地建物興業株式會社・

大阪市南區久左衛門町八

取締役社長　白井松次郎
取締役副社長　大谷竹次郎
專務取締役　白井信太郎
常務取締役　多田福太郎
同　福井福三郎
同　岡清三郎
取締役　前川佐市郎
同　横江萬治郎
同　城戸四郎
同　豐島寅吉
監査役　井上重正
同　白川朋吉
同　金澤利助
同　立花良介
同　堤友次郎

謹賀新年

松竹技藝部

顧問　白井松次郎
委員長　中村鴈治郎
評議員　中村福助
　　嵐巖笑
委員　市川市藏
　　市川右團次
　　片岡我童
　　中村魁車
　　實川延若

松竹幕内部

田村友之助
大川市太郎
高橋元太郎
阪東辰造

「道頓堀」編輯部

鳥江銕也
松本泰三

大石内蔵之助……中村鴈治郎

東西名優方の御推奨

好評嘖々！

最新科學化粧料　チタニウム原料

專賣特許

愛王水白粉（あいおうみづおしろい）

（内務省衛生試驗所無鉛證明）

六十錢　一圓

百貨店藥店化粧品店に有り

價正

愛王固煉白粧　七十五錢
愛王粉白粉　六十錢
愛王化粧下　三十錢
愛王バニシングクリーム　三十五錢
愛王　六十五錢

送料二圓以上無料二圓以下十二錢

本舗

大阪市東區瓦町三丁目　愛王堂

振替大阪七〇一六四番
電話本局三二九二番

謹賀新年

たゝ出れ賣てっ立日

散歩にいやなあぶら汚
お忘れあるな

ナキス
紙取らぶあ

各地の化粧品店石鹸店に於て販賣いたして居ります。
尙道頓堀の各座の賣店にても常備いたして居ります。

お買求めの際はスキナと御指定を乞ふ。

大阪 スキナ屋
謹製

當る庚午歳
中座初春興行
中幕
「菅原傳授手習鑑」
寺小屋の場

(上) 松王丸……片岡仁左衛門
(下) 女房千代……中村福助

大阪日新聞

夕刊王として永き歴史を有するもの、一度手にせば其日の世情は髣髴として眼前に展開す、一度讀むだら忘られぬとの定評ある所以

講讀料　一ヶ月　金五十五錢
廣告料　一　行　金　一　圓

關西日報

何事があつても直ちに問題の核心に突入つて事件の眞相を報ずること掌を指す如く情理整然常に讀者を誤らざるは本紙の一特色

講讀料　一ヶ月　金五十錢
廣告料　一　行　金　一　圓

ピトロライト工事請負業

大阪ピトロライト工事合資會社

大阪市浪速區櫻川町一丁目一〇五四
電話櫻川(64)二二一四番

東京出張所　東京市日本橋區本材木町一丁目二三
電話日本橋(24)〇九六九番

電燈照明器具製作
並ニ電氣一般工事請負

みよし組電氣工業所

大阪市東區味原町九十九番地
電話南(一〇三七)五二二九番
振替大阪二八八二二番

支店　東京・神戸・福岡

株式會社　城口研究所大阪支店

大阪市北區曾根崎中一丁目五七
(市電梅田新道北入)
電話北(二一一一)九五六番

大阪市北區南森町

合名會社　西孫南店建築金物部

電話北二八五〇番
大阪市南區順慶町二丁目
(一九六・一九七番)
直輸出入部
電話船場(三〇二九)番

武部源藏……中村鳳治郎

當る庚午歳中座初春興行
中幕「菅原傳授手習鑑」寺子屋

女房戸浪……中村魁車

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いかちよろしい！
寫眞機は
リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ
（カタログ進呈）

大阪市南區長堀橋筋一丁目
小西六大阪支店
電話南（三二九八）三二九三番
本店　東京　本町二丁目

初まゐり

出世・開運・厄除に
やはた　石清水八幡宮
男山ケーブル
厄除大祭・十五日より十九日迄

伏見　桃山御陵
乃木神社
停留場前よりバスの便あり

商賣繁昌の御祈願
ふしみ　いなり神社
藝事上達・福徳の願に
正月五日は大山祭

初ごら　京都鞍馬寺
鞍馬電車正月三日終夜運轉
御寶札・魔除の虎・開運御守授與

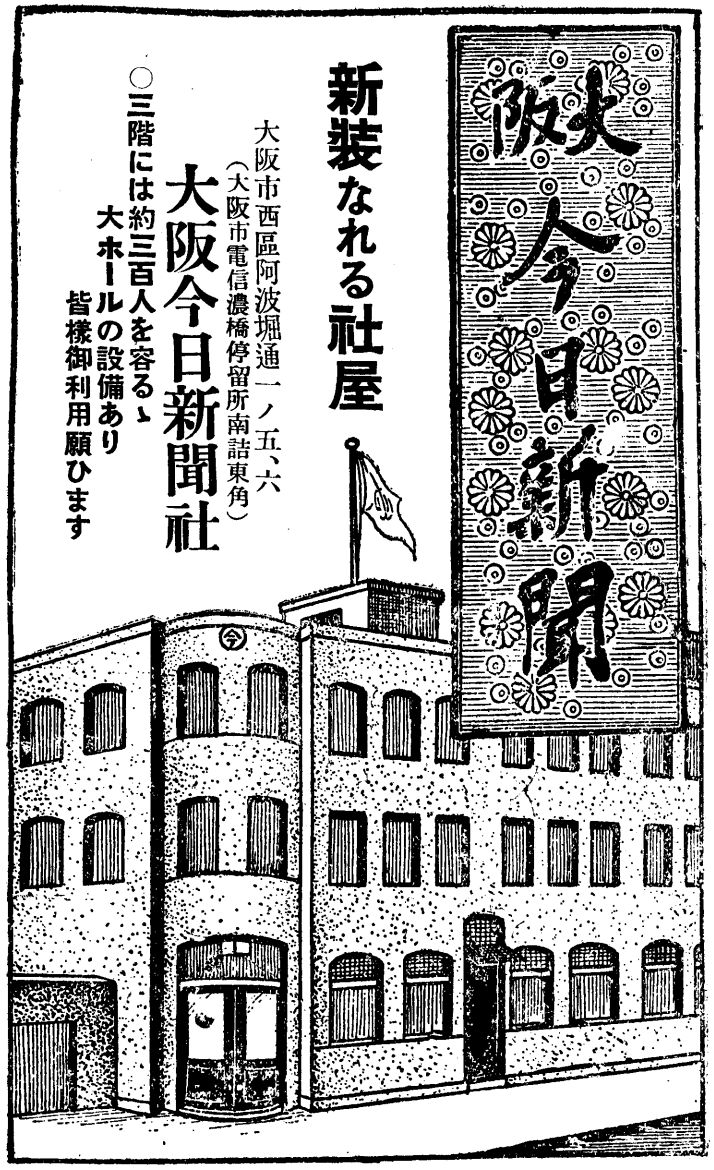
（上呈書内案）

京都ゆき急行
京阪電車

襲名披露狂言
岡本綺堂作「箙の梅」
箙に挿した梅の枝「東夷も風流を存じてゐるわ……」
梶原源太景季……片岡我當

當る庚午歳中座初春興行

襲名披露の口上を述べる
千代之助改め
片岡我當


大阪今日新聞
新裝なれる社屋
大阪市西區阿波堀通一ノ五、六
（大阪市電信濃橋停留所南詰東角）
大阪今日新聞社
○三階には約三百人を容るゝ
大ホールの設備あり
皆様御利用願ひます

大阪で
一番明るい
新聞
關西中央新聞

米・檜

挽材ノ御用ナラ專門ノ

佐藤材木店へ

多少ニ不拘御用命ヲ乞フ

諸建築造作

一度御取引ヲ願ヘバ御期待ニ添フ事ト確信シマス

大阪市西區阿波堀通五丁目
電話長新町一〇九一番

防水工事其他一般

アスファルト工事

浪速建材株式會社

大阪市北區中ノ島五丁目六五
電話土佐堀六〇六八

營業課目

シャッター
サッシュ
ドア
製造販賣

日本鋼製建具株式會社

大阪支店

本店　東京市麹町區丸ノ内ビルヂング八八四
電話丸ノ内三六二七番

支店　大阪市西淀川區傳法町南二丁目
電話土佐堀五九二〇番

東京工場　神奈川縣川崎市大師河原
電話川崎九七三番

大阪工場　大阪市西淀川區傳法町南二丁目
電話土佐堀五九二〇番

床補裝工事

リグノイト

其他諸建築用材料

南滿工業株式會社大阪出張所

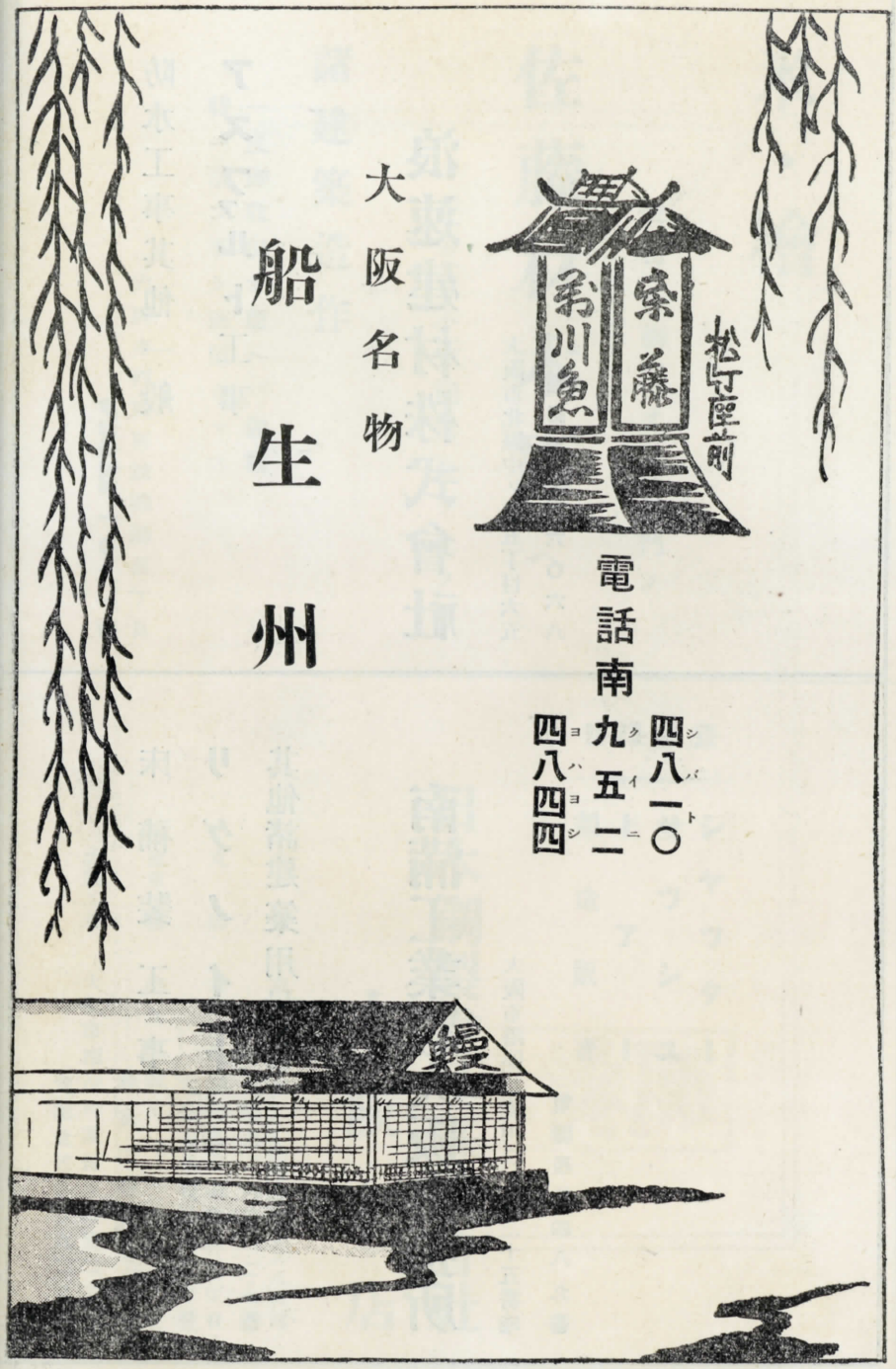
大阪市港區北境川二丁目三十五番地
電話西三四八九番

當る庚午歳中座初春興行

（下）中幕「菅原傳授手習鑑」

〈首見る役は松王丸……
その返事や如何にと緊張した春藤玄蕃が姿
市蔵の春藤玄蕃

（上）中幕「南部坂」場の外堺
清水一角……實川延若



當る庚午歳中座初春興行

二番目〔戀飛脚大和往來〕新口村

孫右衛門……片岡仁左衛門

忠兵衛……中村鴈治郎

晴れて逢はれる親子ではあるが折柄の雪道を年寄りの足弱にすべり轉んだのは……切つても切れぬ肉縁の糸に情も濃やかな一場面が展開される

浪花座正月の
「慶安太平記」

若延川實……彌忠橋丸

吠へつく犬を拂ふ
小石の礫は濠の深
さを測る手だてと
は……

劇中でも最も人口
に膾炙した堀端の
忠彌の見せどころ

合名會社

大阪橋本組

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

電話 東 特長一一五八〇番 特長二一六五八一五番

支店 東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地
電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

銀行會社等の經濟記事は精細を極め
演藝映畫其他の趣味讀み物は豐富

四面滿載の市場商況殊に
米界の報道は日本一の誇り！

發行所
株式會社 大阪毎夕新聞社
大阪市堂島中一目丁
電話北 〇四六二・九〇八一 〇〇六六・〇五〇六
振替口座大阪三五四二四番

大阪北濱

タイルとテラコッターの殿堂

タイルの山本窯業

大阪市北區芝田町　電北 286・5610

東京市日本橋區濱町三丁目　電浪花 1978

木製建具一式

許特案新・許特實專
ぬれ破代末
襖ドカミ 商登標錄
濟經・雅優

三宅豐次郎商店

大阪市西區南堀江上通三丁目
電話櫻川一九一五・三四六六

洋家具製作
室内裝飾業

上谷製作所

上谷萬吉

大阪市西成區北吉田町壹番地
電話天下茶屋三五二八番

鐵骨・鐵筋
建築・鐵物
製作・請負

内藤廣造

大阪市東區石町一丁目六番地
電話東四一六三番

浪花座の

「三人片輪」

壁太郎助……林長三郎

佐々木高綱……市川右團次

時姫……中村扇雀

當る庚午歳浪花座初春興行

一番目

「鎌倉三代記」

絹川村閑居の場

證券金銀

有價證券賣買

株式會社

本店　支店

日本信託銀行

大阪市東區今橋二丁目

電話本局 自五三三〇番 至五三三五番

振替口座大阪 五四二五〇番

發信略號シン

東京市日本橋區南茅場町

電話茅場町 四五五四番 四五五六番 四五七七番

振替口座東京 五六〇九〇番

發信略號シン

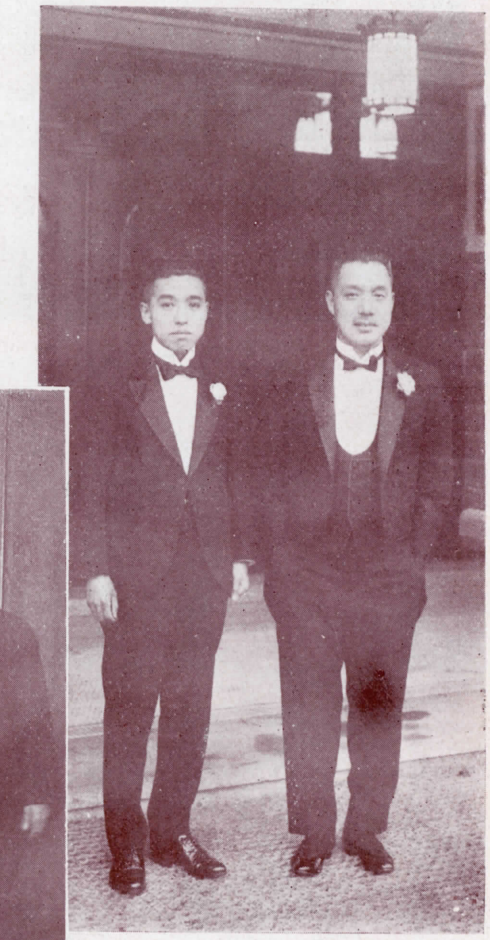
文樂座

グラヒック

四ツ橋畔に新装なれる

郷土藝術の光輝燦然たる、世界的大殿堂文樂座は竣工さる

昭和四年十二月二十六日晴れの開場式挙行當日の盛況……



（右）表玄關に立てる松竹社長白井松次郎と同專務白井信太郎

（左）廊下にて伊國領事がスコ氏等と接見する松竹白井社長

木の香床しき新装の舞臺

向って右より四人目　柴田大阪府知事
同　五人目　松竹白井社長
その他　京阪神の諸名氏

松竹白井社長と
その母堂

典雅壯麗を極むる貴賓席

姙娠のお方に警告

安産を望まれる方難産流産の癖
初産を恐れる方は

産婦人科專門諸大醫有効御證明

木津けなし丸を

是非お服みなさい

昔から有名な産婦專門の家傳藥です

能効
悪疽が治る　浮腫が引く
流産もせぬ　體内を溫める
胎毒も取れて　お産が輕い

できた子達は丈夫で美しいと旦那様も大喜びです

各地藥店にあり

藥價
五拾錢　壹圓　貳圓　參圓　五圓　拾圓

腹痛トクプ＝本舗＝サンタリン

大阪高麗橋一丁目

西野自在堂

電話東三九一番・振替大阪一五七番

——ダグラス夫妻を迎えて——

昭和四年十二月十六日……われらがあこがれのダグラス夫妻来る……松竹白井社長は、翌十七日夜歓迎宴を京祇園の一力に於て催されました。寫眞はその時の記念撮影です。

スクリンから飛び出した寶客を圍んで、前列右より二人目の白井社長を始め皆様おなじみの林長二郎、阪東妻三郎、森靜子、千早晶子、浦波須磨子、飛鳥明子のスター連。

（英字は白井社長に宛てたダグ夫妻の自署）

夕刊四頁
一部 金四錢
一ヶ月 金五十錢

『青！』は本紙のペット、ネーム。
『明るい新聞』は本紙のモットー。

試みに、先づ『青！』と呼びかけ本紙をお求め下さい。新鮮な青紙に、盛られた潑溂たる記事は、必ずや、貴下の心を奪はん。

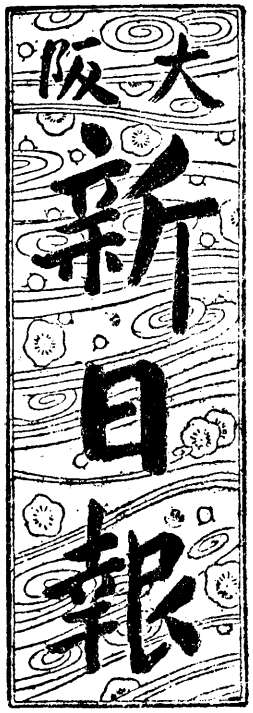
爾今、夕刊は『青！』とおきめ下さい。

社長 相島勘次郎

本社 大阪市北區網島町將棋島地先
電話東六一一六番 六一一七番
振替大阪五五三八九番

支局 東京・神戸・門司・京城・大連

一番面白い



夕刊新聞

各種軟石大理石加工一式請負

昭和石材株式會社大阪支店

大阪市西區京町堀上通二丁目三番地
電話土佐堀三五二七番
東京市麴町區有樂町三菱三號館
電話丸ノ内一六二四番
工場　石川縣小松驛前
電話三五六番

スチールサッシュ
スチールドアー
スチールシャッター
其他附屬金物一般工事

合資會社　榮進社

神戸營業所　神戸市平野下祇園町一二二
電話元町二七〇九番
大阪營業所　大阪市北區梅ケ枝町（梅ケ枝ビルデング）
電話北（二八四六・五八六八・三一二五・五三五九）
本社及工場　東京府下日暮里町日暮里一二八
電話下谷一〇二七・一四八三

煉瓦其他一般建築用材料

小武内仲治商店

電話土佐堀（三二八一番・五一七八番）
大阪市西區江戸堀北通り三丁目

西俣ベニア

國産品中最も歴史古き
◉專賣特許淺野式ベニア板
◉ベニアドーア
時代の先鋭から生れた優秀品の
◉N・V・C・リヂスト・ドーア・
N・V・C・ベンティニーア・ドーア・
ベニア製品の專門店〃西俣〃

關西代理店と總發賣所

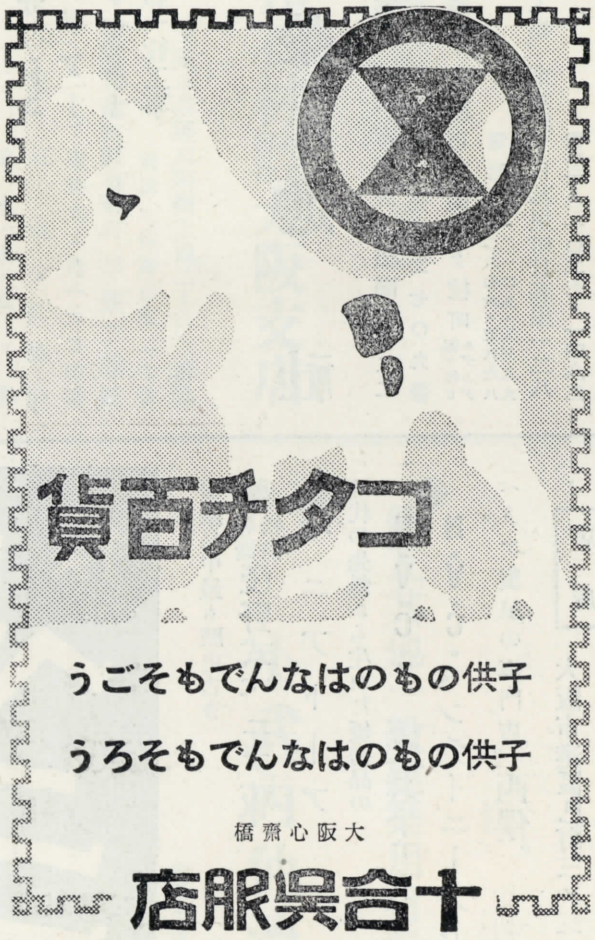
大阪市港區巳町三ノ三一
西俣商會
電話西(43)四三四五番

競映の映畫陣を向ふに廻して、堂々上演の

角座初春興行新聲劇の「貝殻一平」五幕十七場

辻野の澤井轉と中田の仲間一平

二人ともに右手の甲にある大きな黒子は何を物語るでせう……。



南座竣工記念吉例顔見世

グラヒック

松王丸……中村鴈治郎

夜の部

一番目「賀の祝」

櫻丸……中村福助

梅王丸……松本幸四郎

畫の部

「近江源氏先陣舘」

盛綱陣屋の場

母微妙……尾上梅幸

佐々木盛綱……中村鴈治郎

篝火……中村宗十郎

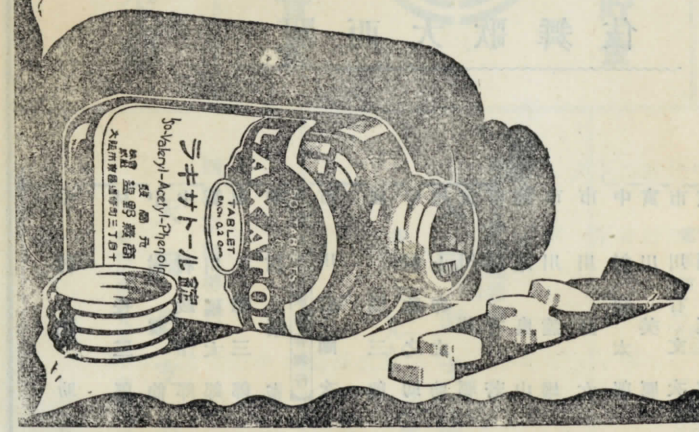
信樂太郎……松本幸四郎

婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張皷腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下劑 ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり



大阪市東區道修町
發賣元 株式會社 塩野義商店
東京市日本橋區岩附町

L.O.116

（上）夜の部
「賀の祝」
白太夫……市川中車
（下）晝の部
「新東鑑」
板倉周防守……市川市藏

京都南座……顏見世興行

謹賀新年

中座

東西同合大歌舞伎

中村鴈治郎
中村福助
林長三郎
嵐吉三郎
實川八百藏
中村成太郎
中村魁車
中村章景
實川鴈正
市川九團次
市川箱登羅
實川延若
中村扇雀
片岡我童
片岡ひとし
片岡義直
片岡長太夫
片岡我當（千代之助改め）
市川藏
片岡仁左衛門

謹賀新年

角座

新聲劇

辻野良一
新田吉里
小波若朗
武澤恒雄
鈴木默堂
中田正造
名越仙左衛門
山本之彦
芝田新
藤本正雄
伊川八郎
和歌浦糸子
澤井光代
細川多鶴子
井上關彌
金剛麗子
富士岡園枝
吉野靜江
中村仲次
富士野蔦枝

恭賀新年

浪花座

關西大歌舞伎

中村福助
中村政治郎
實川延太郎
德三郎
中村霞仙
林長三郎
嵐橋三郎
中村駒之助
尾上卯之助
實川芦鴈
市川右若
淺尾奥山
市川達雄
（鶴三郎改メ）
中村福太郎
實川美鴈
市川右文次
實川延郎
市川右田三郎
片岡秀郎
淺尾大吉
實川延若
（當ル庚午歳初春興行）
市川右團次
嵐扇雀

不動は堅い
ニコ〳〵貯金
ニコ〳〵貸金
貯金は不動

東區本町二丁目角
大阪支店
電本町一一九八（四三）一九七三（四四）

南區心齋橋北詰東
大阪南支店
電船場七八九（二一〇）二二一

西區京町堀角
大阪西支店
電土佐堀一九九三（四〇）一一

年　新　賀　謹

座　南・都　京

場　劇　一　第

阪東壽三郎
三若宮好榮子
六條波美子
香取幸枝子
石河薫
藤村秀夫
小笠原茂豐夫
元安
吉田正雄
前田隆太郎
市川眼亘
高田童
進藤英太郎
阪東豐之助
山中團九郎
吉田豐作
山口俊雄
松井潤子
浦波磨子
林長二郎

年　新　賀　謹

座都京・都　京

劇　庭　家

澁谷天外
曾我廼家十吾
曾我廼家十郎
一八九
三鐵富士
紫富士郎
天致秋四郎
十時
三一
東春二紫小桃北三鈴如米
日葉東谷村笠木月津
愛惠菊美重智代久信武左
美八照美
美
子子子子子子子子子子子子子子子子子子
賀川清
小織桂一郎

正　賀

帝キネ長瀬スタヂオ超特作

次男坊を見ずしてユーモアとナンセンスを語る資格なし……現代喜劇の極北篇

現代喜劇

佐々木邦さんの 次男坊 全巻

杉狂兒入社第一回主演

曾根純三入社第一回監督作品

帝キネ珍優總動員大助演

監督　長尾史錄

撮影　丘本幹也

時代大喜劇

岡本一平さんの 彌次喜多再興 全巻

實川延松・林誠太郎主演

珍妙無類ふざけ切つた昭和式彌次喜多の道行一つづり……時代喜劇の革命篇

月刊・演劇研究・雑誌

演藝畫報

第五年

一月號

第四十輯

一九三〇年映畫界に乗り出す巨巻・壓巻！燦たり

時勢は移る

林長二郎主演映畫
菊池寛原作
菊池一監督
竹内俊一
早川千・池晶子・郎一
るほか葉二・子
演助
友成達雄撮影

加賀の篇 組すら

阪東妻三郎主演映畫
大佛次郎原作
犬塚稔監督

松竹キネマ株式會社

蒲田十週年記念映畫

進軍

牛原虚彦監督
ウイリアムボイド原作
水谷文次郎撮影

鈴木傳明・田中絹代・高田稔主演

最後の幸福

島津保次郎監督
チャールスデッケンス原作
桑原昂撮影

井上正夫・岡田時彦・渡邊篤・結城一郎
龍田靜枝・筑波雪子・及川道子・共演

黎明の世界

重宗努監督
五所平之助原作
野村昊撮影

柳さく子・渡邊篤・新井淳
及川道子・小藤田正一・共演

新年の辭

白井松次郎

昭和四年度といふ年は非常に明るい傾向の芝居が喜ばれた年でした、レヴューが素晴しく流行したのもそのためでせう。

演劇は何時の時代でも、社會の大勢と同じ歩調をとつて進んで行かなければいけないといふのが私の日頃の所信で、常にその所信の實行につとめて居ます。

そして、時代の進運につれて一層加はる社會苦といふもの、反對には必らず明るい感の劇が一般に受け入れられる事と思ひます、從つて本年も大體この傾

向で進むでせう。殊に近來八釜敷く云はれて居るスピードの問題もなるべく高速度のものが喜ばれるだらうと思ひますが、これも、せちがらい世情の反映として見逃せぬ現象です、だから脚本の撰定から劇場の設備などすべて世の中の要求に充したいとつとめて居ります。

既に年内に京都南座、神戸新松竹座、四ッ橋文樂座の開場の運びにまで漕ぎつけ、本年は又市内目拔きの場所で某大劇場建築の腹案がありますが、これなどは何れも新時代の要求を充すべく其の内容設備共に留意して居ります。

とまれ、昭和五年度の新時代に會して、我が演劇も、その進展を計るべく萬端の改善に努力する覺悟で居ります。

新年の御挨拶に代へて演劇の社會的貢献の微意を述べる次第であります。

文樂座竣工を記念して

◇……高須芳次郎・鬼太郎・安部豐……◇

近松情調の過去・現在

高須芳次郎

私が散文詩篇、『近松の人々』を公にしてから、もう十六年の月日がいつの間にか流れすぎた。船場に生れて、幼少の時から近松情調のアトマスフィアのうちにゐたので、御靈さんの文樂には早く親んだ。七歳の頃、南久寶寺町の叔父の家に寄寓するやうになつてからは、度々叔母につれられて、彦六座の人形芝居を見た。その時、故大隅太夫の老巧な藝に接したのであるが、その印象としては、彼れの偉大な體格と無邪氣らしい容貌とを記憶してゐるのみである

それほど早く近松情調の中に育つた私ではあるが、近松の戯曲については、存外知るところがなかつた。文學上から聊かこれを研究し始めたのは、明治三十四、五年の頃からである。その時分、中村吉藏、河井酔茗、西村眞次、佐野天聲及び故平尾不孤の諸君と毎曜一回、より合つて、近松の世話物を合評したことがあつた。あの頃、記錄を留めて置けば、相當の分量になつたのであるが、それに氣付かず、唯一夕の座談として、誰も記錄しなかつたのは、今から考へて、惜しい氣がする。

□

それから私は十餘年前、『近松の人々』續篇を書いて、南久寶寺町一丁目邊にあつた中村文魁堂（？）とかいふ書肆に原稿を渡したことがある。この書肆がいつか突然、廢業した爲めに同書は出版されず未だにその原稿の行衛さへ分明しない。それは大正五年頃、大阪平野町の親戚の二階に一時、寓居してゐたとき、毎日、二階から文樂座の方を眺めながら、書いたのである。

それには、『近松の人々』に收めなかつた世話物を大抵收めてある上に、おのづから、近松情調の漂うてゐる大阪で日毎に曾根崎や新町や道頓堀を歩き廻つて書いたのだから私としては、深いインスピレイションに打たれて、起草した小篇が多い。當時、大阪市内に於ける近松に緣ある場所は、大抵歩き、その當時を追憶したり、或は作中の人物について深く思ひを潜めたりしたのであるから、私にとつては、相當、意義のある著作であつた。

ところが、書肆が廢業して、一向、その消息がわからず、その上、稿料を受取つてあるので、德義上、私は同一のものを他から發表するのも、どうかと考へて爾後十餘年間、その儘に過ぎて來た。今、その原稿を見たら、存外、つまらぬと思ふかも知れぬが、それが見出されない丈に、いかにも殘り惜しい氣がする。

兎に角、あの時分は、私も未だ若かつた。みづから、デカダンを以て任じたし、酒も可なり飲めたから、陶醉すると、紅燈のきらめく頃、新町を歩いて、夕霧伊左を思ひ、梅忠を思つて、詩的情熱の燃えあがるのを感じた。時には醉顏を川風に吹かせながら、新町橋に佇立み、兩岸の紅燈を眺めたり、銀蛇を走らせる青い夜の川水を見おろしながら、近松に於ける美しい戯曲の情景を胸に浮べて見た。今その頃を考へると、恍として、一夢の如く、「もう青春が去つて了つた。」といふ悔るが深い。

□

然し青春の時代が去つても、私の近松に對する渴仰の情熱は未ださめ切らない。一體、私は近松の世話物に於ける男性の類型的な點を好まないが、女性に對しては、今尙ほ引付けられる。近松の女性のうちには、際立つて、すぐれた性格の所有者が多い。小春にせよ、梅川にせよ、おさんにせよ、お千代にせよ、皆それぞれ性格上、美しいところがある。それらは、近松によつて理想化せられたと思ふ人もあらうが、私は必ずしも、左樣でないと思ふ。今も私は大阪におさんの如き女性、梅川の如き妓女が、稀れに見出されるやうな氣がしてならない。

と云つて、私は近松の女性に一々、モデルがあつたか、どうかは知らぬ。唯近松は、彼れの描く女性について、必ず何等かのヒントを現實の女性から得たにちがひないと思ふのである。今日、未だ大阪の女性から消え去らぬ優し味柔か味、丸味などは、近松の女性の影響などから、傳統的

に作られたものであるまいか。

そこで私はかう空想して見たことがあつた。新町へゆくと、何となく、梅川や夕霧のやうな濃情の女がゐるのではなからうか、曾根崎(北新地)へゆけば、小春のやうな凛とした梅花の清婉を象徴する女性がゐるのではあるまいか。また船場の大店とか老舗とかのうちには、おさんのやうな貞實な女房が今も微笑してゐるのではあるまいかと。が、それは、餘りにも、大阪の近代性を除外した小供じみてゐる空想にちがいない。けれども私は尙ほこの虹にひとしい空想を捨てたくないのだ。

□

近松の女性については、その位にして置かう。今一つ、私が感じてゐることは、近松の世話物と關係ある大阪市中の場所が次第に亡びゆくことの淋しさである。近代文明が詩的情趣を次第に破壞し去るのは、止むを得ぬ勢で、文藝的名所の衰亡も、今更、嘆いたとて、仕方があるまい。けれども近松の名作中に出てゐる主な場所は、何とかして、詩的記憶から消えて了はぬよう、そのモニュメントを作つて置いたら、どうかと思ふ。例へば蜆川などは、『紙治』のおさんを想はせる絶好の文藝的名所で、近松の名文句「泣かしやんせ〳〵、その涙が蜆川へ流れて、小春が沒んで呑みやらうぞ。」といふ印象深い言葉と共に忘れることが出來ぬ。

私は青春時代に、北新地を通る毎に、蜆川の水を眺めつゝ、おさんの俤を思つたことがあつた。あの時分、蜆川は細い流れであつたが、兩岸の燈影と絃聲とによつて、一種の近松情調を湛えてゐた。然しそれは、もう跡方もない。「これかや戀の大海を換へも干されぬ蜆川。」と近松が歌つたのも、今は夢だ。それにしても、蜆川と名作『天の網島』とは、切つても切れぬ關係にあるのだから、曾根崎に一つ文藝的名所としてのモニュメントが欲しい。

これとても、近代的な大阪に對する私の空想としては、餘りに小供じみてゐると、自らその痴愚を憫笑してゐる次第だ。恐らく地下の近松翁も、こんなことを聞いたら、微苦笑するかも知れない。

□

それにしても、近松情調の豐かな京阪の地に、ロオカル・カラアに卽した新しい藝術が未だ生れ出ないのは、どうしたものか大阪の家庭を見ても、經濟生活を見ても、優に立派な戯曲となり、小說となるべき素材が山積せられてゐるそれを拾ひあげて詩化する立派な創作家が、もう出てもよい頃だ。

何處かに新しい近松、第二の近松が潜んでゐるやうな氣がしてならないのは、私のみの妄想であらうか。大阪を愛する私は、その妄想が妄想に終らざらんことを心から祈つてゐる。

新建築と古藝術と

鬼太郎

時代に副ふやうな文樂の新建築がお出來になつたさうで誠におめでたい事ですが、容器(それもの)と人形芝居といふ者の關係が、どう云結果を齎すかは、私には一寸分かりかねます。

洋風觀覽席で人形を見るやうにでもなれば、長時間の興行はどうでせうか。さうでなくとも、建築相應、時勢に連るゝ客の好みから、延いては太夫たちの語り場の都合などから、遂には見取りに出し物が並ぶやうの虞はありませんか知ら。

萬々一にもそんな事があつたら、床も人形も修行の道が變則になつて、古典藝術の基礎がぐらつき出すでせう。これが今後の人形芝居に取つての第一の不安です。

私は東京の人間ですから、手近の東京の事に就いて申しますが……。

今東京では、文樂大持ての有樣です。此の藝術に興味を感じた若い人々が、眞劍になつて擁護運動をしてゐられるのは、心强い事ではありますが、然し、それは極少數の人々で、一般東京の人の珍しい物好きが、いつまで續くか危いものです。

猿若町の、蠣殼町の、錦町の、人形芝居が三軒まで、私の知つてゐるだけでも潰れてゐます。東京に於ける人形芝居は、今でもホンの珍しい物流行りで、時々キヤ〳〵とするのではありますまいか。

多少の豫備智識がなければ分からない歌舞伎芝居を、分からうとする若い人は、マア幾らもありません。初めて見ても直ぐ分かる芝居だけが、追々勢力を振はんとしつゝある今の東京です。義太夫三味線人形の三つの味を、耳と目とから一度に感得攝取する事の出來る人でなければ、此の代物の面白味は到底分かるものではない、ところが、一廉の通を云ふ人の中でも、丸本一册ろくに知らないのが幾らもあります。義太夫に就いては斯道の復興はなか〳〵うまく行きますまい。

其處へ行くと本場の大阪、此の藝術を理解してゐる人は澤山おありでせうから、手前共の右の不安を取拂つて、新らしい文樂と古い人形芝居との氣分の背反などなきやうのお智慧を十分願ひたい。擁護保存するにしてからが、歌舞伎芝居や藝人の小利口の影響の、可なり見える現在の人形

芝居でも、關はず今のまゝ永遠の型にして遺す事にするか出來得る限り元へ戻して、少しでも餘分に懷古の味を出させて、而して好い加減のところで固めて保存するか。其の程度、爰が一番大切な、むづかしい所だと思ひます。

古いから好いといふ物は、精々古くして置く事です、折角の味ある銅器を金盥同樣磨砂で磨いたのでは、座敷用にはならぬと同く、人形芝居などに新し味の附く事は、結局どつち附かずで自滅する基です。新文樂座と古藝術、調和がなか〳〵むつかしからうと岡目には思へますが、當局諸君には、勿論成算のおありになる事でせう。

新館落成をお喜び申すと共に、私は、此の世界無比なる名物の、倍々眞の名物として、幾久しく遺らん事を、只管お祈り申します。

文樂を訪ねて

安部豐

文樂座の新生……初開場……實に芽出たいことである。私は劈頭これを祝福いたしたい。

久しい間朝日座で不自由を忍んだ一座の人々は元より、一般の觀客もどんなに仕合せであるか知れない。斯道發展のため實に喜ばしい次第である。

新文樂座は舊近松座の改造であるから、地の利には乏しいが、慣れゝばよくなるであらう。私は嘗て春子太夫の淨るりを此座で聞いたことがある。たしか大正二年四五月頃と思ふ。御靈文樂座との競爭で、吉田玉造なども一生懸命であつた。その翌年の何月か、始めて首振芝居なるものを見たのも此近松座であつた。爾來星移つて幾變遷、遂にはビルデングとまで形態を更へた同座が、今回白井氏の手によつて復活し、文樂座の名稱のもとに華々しく開場されたことは、全く奇しき因緣である。殊に今年は初代竹本義太夫が始めて櫓を擧げて、人形淨るりを興行してから二百五十年に相當する。偶然ではあらうが何となく因緣じみて、妙に嬉しい感じがする。私は白井氏の此有意義な仕事に對して心から感謝の意を表したい。そして今後も人形淨るりの爲に、或程度まで損得を離れて、一層の援助と努力とをお願ひしたいと思ふ。

人も知る如く、近年文樂人形淨るりは著るしく衰微しつゝある。二十年前の攝津大椽や大隅や南部や、紋十郎等の活躍した頃から靜かに現在を眺めたならば、餘りに衰微の甚しいのに驚くであらう。そうして二十年三十年の後に思

を馳せたならば、更に寒心するものが多いであらう。

私は先年この文樂の衰微に關し輿論の喚起に力めたことがある。それが導火線となつて同志の人々と『文樂人形淨るり擁護會』を設立し、廣く會員を募集して文樂座一行の東上に際しては、其都度團體見物（昨夏は四百人餘）を催して、文樂座の人々＝主として人形遣ひの面々＝を後援奬勵する一方、新聞雜誌を通して、それの維持擁護の急務なるを世間に溯へてゐるのであるが、幸にも反響夥しく、今回新橋演舞場十日間興行の內、三日間も賣切れを見るなど豫想以上の成績を納めたものである。尤も此盛況を招いた一つの原因は、出し物のよかつたが爲でもあるが一昨年の忠臣藏の通しや、昨年の日向島や、今回の近江源氏八つ目など、歌舞伎と異つた珍らしい出し物の場合は、期せずして評判となり、每日雜鬧を見る譯であるから、大阪は勿論のこと、東京にての出し物の研究には、餘程の考察を要することは勿論である。

近來東京に於ける文樂の觀客は、あらゆる階級の老若男女で、就中男女の學生を多く見受けるやうになつた。それに不思議に思ふのは、從來空席がちな三階席が常に滿員になることである。人形芝居の觀客は、特殊な好事家や御常連のみに限られたもので、棧敷や土間の半分位いにしか充たないのが其通例と稱されたのである。それが昭和の今日では客種が一般的となり、あらゆる人に愛護されるやうになつたのだから、この點では大に慶賀すべきである。

ところが憂慮に絕えないのは、文樂人形淨るりの凋落、衰微に關することである。如何にすれば其凋落を未然に防ぎ得るか、保存法はどうであるか……といふ實際問題について考察して見ると、之れは容易に明答が出來難い。從來此問題には幾多の名論卓說が出て、大に當事者を惱ましたやうであるが、多くは机上の空論で、一つとして實際的に活用して見るに足るの名論はなかつたのである。

たま〳〵文樂擁護會々員であり、平素人形淨るりを愛護される柳原義光伯が、その保存法に就て高遠なる名論を出されたから、左にその大要を記して見やう。

「殘されたる古典藝術の保存は生やさしいことでは出來ない。先づ文部省に應分の補助を願出で、一方大阪府知事や大阪市長に折衝して寄附金を募り、東西の有力者を說いて約五十萬の金を集め、これを最も安全な方法で預金し、組織を財團法人にして、その利息を以て文樂座就業員を後援し、人形遣ひや人形製作等の後繼者養成に力めることにしたい。勿論興行主と合流して行く必要があらう……」と述べられた。

又、同會員で東京市會議員の岸邊福雄氏は、

「文樂座の經營は至難である。之を一興行主に委ねるのは無理であらうから、之を國營とするのが最も妥當と思ふ。併し今の緊縮內閣では實行不可能であらう……」と申されたは文樂座の經營を「大阪市營」に移すことを力說したので

私は此問題について、先年發表したことがあるが、それ

ある。無論白井氏の文樂座に對する並々ならぬ心勞と、今後の經營に就ての苦惱とを知るところから（同氏が一昨年十月演藝畫報誌上に發表された文樂座の經營に關する公開狀に因る）白井氏の立場をも考慮し、且つ文樂座人形淨るりを、安泰な方法で保存する必要から、右の說をなすのである。白井氏は文樂座を繼承して以來二十數年間その維持に力めて來た人で、進んで相當な犧牲も拂はれたのであるが、元々營利業者であるから數字と共に歩かねばならぬ營利を度外視して此文樂座の經營に衝るわけにはゆかないのである。斯ういふ苦しい環境にある白井氏に一任して置くことは甚だ無理な話で、人形淨るりのために却つてよろしくないと思ふ。白井氏はこれに對し果してどんな考へを有たれてゐるか分らないが、此際すべての行掛りをすて、大阪市營に移すことが肝要である。尤も大阪市の當局に、眞に亡びゆく文樂を愛護する人がなかつたならば、此問題は容易に成立しないことになる。私は賢明なる大阪の人々に特に之れを慫慂したい。せめて文樂のそれが今日以上に發展せずとも、現狀を維持するだけでも結構である。そのうちには必ず斯道の名人大家が輩出して、頽勢を挽回するであらうから、爰暫くは持久戰の覺悟が必要かと思ふ。

次に出し物のことについて重ねて附言したい。現在文樂座の有する人形は、先年の火災に免がれたもので、元の約半數に減じ、その後補充も出來ずに、不自由ながら限られた藝題を繰返へしてゐるそうであるが、これは人形製作者に乏しい爲めで、急に揃へる譯にもゆくまいが、併しながら、行詰つた文樂人形淨るりの發展策から云へば、モット人形の數を殖やし、變つた面白い藝題を出すことが急務とも云へる。四百餘種もある狂言藝題のうち、人形淨るりとして繰返へすのは、僅々十四五種位いにしか過ぎない。而も時代物なら太十、熊谷、世話物なら酒屋、堀川……などと相場がいつも定つてゐる。寔に心細い話である。斯樣な小數の藝題を繰返へして、その命脈をつながねばならぬから、自然と衰微に傾くことになるので、此點充分考慮を要するものと思ふ。出し物さへ確かりした面白いもの、歌舞伎で演らない變つたものを擇んだならば、屹度觀客は押寄せるに定まつてゐる。勿論太夫の顏振れ等の影響もあらうが、總ては藝題の選擇如何で勝負は決せられるものであるまだまだ古いもので上場に價する立派な藝題が澤山あるに違ひない。太夫や人形師がその氣になれば價値あるものを創造することは容易であらう今回の『俊寛』の如きは、歌舞伎に演じたことのない珍しい藝題で、定めし好評を博するであらうが、之れを心掛けた古靱太夫の壯擧を先づ賞揚せねばならぬ。斯うした努力は、斯道の發展を促進する警鐘となり、沈滯極まりなき劇界の羅針ともなる尊い試みである。津太夫や土佐太夫等に於いても、大に奮起して、此古典藝術の爲に善處されむことを依囑いたしたい。

文樂座の新生に際し、その幸ある將來を祝福し、白井氏の健在を祈るものである。

中座一月上演

大森痴雪作

名馬

一幕二場

第一場　闇見明神の祠前

若狹國三方郡十村に祀る、闇見明神の境内で古びた社殿、苔むした燈籠數基、玉垣の處々に崩れたなど、うら寂しい有樣である。

と、たゞならぬ人馬の音、一聲高い馬の嘶き荒らかな人の聲が春の長閑さを破つた。

家臣野中主計、郎黨逸平太その他數名の武士に手舁つぎにされて、山内猪右衛門一豐が出て來た百姓の杢兵衛も何事ならんと、駈けつけて遠くから眺めてゐるのだつた。

家臣や武士の介抱で、やつと意識を回復した一豐は大丈夫〳〵と叫んだ、馬が倒れて一豐は不覺にも落馬をしたのであつた。

織田信長、柴田、山内、瀧川、池田、松宮等の諸將を伴つて出て來た、一豐は朝倉攻めの出陣に不吉な落馬などをした事を詫びた、尾張隨一と呼ばれた名馬夜叉栗毛と誇つてゐたのに、餘り癇が強すぎたのだらう、諸將等はかういひ〳〵した、信長は四邊を見廻して心にうなづいて。

「いや馬が惡いのではない、猪右衛門が惡いのだ。

「いえ私は、實は殿のお馬が私の馬の太腹を信長は一豐の言ふことを打消して、神域に馬を乘り入れた爲忽ち神罰を蒙つたのだ。

恐ろしい神樣だ、尊い神樣だと一豐、と一豐の落馬は神罰に極めてしまつた、一豐は急に身顫ひを始めた。

「いよ〳〵怖ろしい神罰だ、おゝそこにゐる男、この神樣は何神であらせられるか。

杢兵衛は土下座して呆氣にとられてゐるのみだつたので、神主を呼べと命ぜられて走り去つた。

眞海法印と娘お浦、杢兵衛が慌しく出て來る。耳の遠い眞海はお浦の介添えで、信長である事が判つて地上に額づいて、恐る〳〵社神は天神である由を答へた、信長は天神とあらば道眞公のことで雷となつて惡人共を打殺された荒神、此度の朝倉攻めに戰勝祈願の祈禱がして貰ひたい、勝利となれば、御禮には先づ馬、黃金、社料の田地も寄進する、そして病體の一豐凱陣の時まで預つて吳れと言ふのであつた、眞海は醫術の心得もあるからお怪我も治して進ぜるといそ〳〵と用意に去つた、一豐は朝倉攻めにお供出來ぬ口惜しさ我れに代つて働きくれと主計、逸平太等に命じる。

木下藤吉郎が、佐柿の城主粟屋越中守を伴ふて來た、信長は小城に立籠つて敵を喰ひ止

めた勢を犒うのであつた。藤吉郎は一豐の落馬を聞いて、馬乘の名人より落馬の方は自分が上手だと冗談口を叩いて信長や一豐と意味ある眼付で顔を見合つた。

眞海法印の祈禱が始められるので、信長は地上に坐した、皆んなもそれに倣らつて、清きめの秡いに恭々しく手を仕へる。

第二場　同　境　内

茂つた森に圍まれて半朽ちた厩舎、その下手に崩れた築土、ところ〴〵に椿や山櫻が咲きまぢつてゐる、第一場より數日の後で、厩舎には一豐の愛馬、夜叉栗毛が繋いである、靄らかに晴れ渡つて空には雲雀の囀りが長閑に聞える。

一豐が築土の崩れから出て來て、夜叉栗毛を撫でながら、退屈を喞つてゐる、お浦がいそ〳〵と來かゝつて、勝戦と聞いて來たと告げ、戀しさうに一豐に寄り添ふのである、李兵衛が來てお浦をからかつたのでお浦はつんとして行つてしまうた、一豐は李兵衛に夜叉栗毛と同じ毛並の馬を買つて來てくれと、銀錢を渡して築土の崩れから牽き入れてくれと頼んで、譯を知らず殘り錢貰ふ嬉しさに急いで出て行たつ。

「あれの丹精を無駄にしてたまるものか」

一豐は夜叉栗毛を引出して築土の崩れから出て行つた、お浦が出て來たが厩が空になつてゐるのを怪しんだ、逸平太が喘ぎながら御大將の到着になると一豐を探ねる、一豐が築土の崩れから出て來て、馬が逃た、病後の足で追ッつかず、李兵衛に頼んだが早くつれ戻つてくればいゝがと人々の前をつくらうてゐた。

信長初め諸將は敵の主將朝倉中務大輔を引立て來た、一豐は信長に祝着を述べると、信長は皆を遠ざけて、

「今度の合戦は貴樣の働きで大いに士氣を鼓舞し、易々と大勝利を得たのは隨一の手柄者だぞ。

一豐の機智を賞したが、一豐は曾て桶狭間の合戦の時、熱田の社前で信長が社參錢の表が出れば勝利だと、投げた錢が裏と裏とを貼り附けてあるそのからくりを知つてゐたので不覺の落馬も信長の奇智に士氣を鼓舞する具と成つたのである。

「殿、名馬といふものは、必ずしも戦場を馳せ廻るばかりでない、といふことを初めて知りました、あの夜叉栗毛だけは長う手許に飼ひたいと思ひますが。

「主を振落すやうな手柄が度々あつてはたまらんぞ。

「あれは妻が夫の一大事の時より外に決して貶ふなと、實家かういひつかつて參つた。黄金拾枚を投じて購ふてくれた馬なのでございます。

後詰の藤吉郎と半計が來て、主從互に恙なきを祝し合つた、眞海とお浦も勝利を祝した築土の崩れから李兵衛が栗毛の痩馬を牽いて歸つて來た、一豐はその口綱をとつて神に詣を蒙つて夜叉栗毛も痩たと言ひ紛らした、眞海親子はたゞ呆れるばかり、藤吉郎は流石に意を覺つてゐる。

「いや痩ても枯れても名馬は名馬、殿立派なものでございますな。

「うんよい馬だ、流石猪右衛門の妻が黄金拾枚出したゞけの値打はある。

一豐に妻あると聞いてお浦は茫然とする信長は約束通り馬と金は直に奇進して社料は追つての沙汰上洛を急ぐから戦勝御禮は後に勝手にしてくれとばかり早發足の合圖はされたそして一豐に乘替の用意はあらうと聞いた。

一豐の命で築土の外から逸平太が夜叉栗毛を牽いて出て來る。

——幕——

中座　一月上演

菅原傳授手習鑑

—寺子屋の場—

寺子屋を開く、武部源藏の家にあつては今日も大勢の子供達が手習ひをしてゐた。

——いろはにほへと、ちりぬるをわか——

其心にその手習ひの中にあつても、ともすれば戯れ聲に、外の方に脫線するのが常であつた。菅秀才は常日頃から、此んな子供達とは一歩かけ離れた境地からして、そんな子供達のしぶりを苦々しく思つてゐた。

「一日に一字學べば三百六十字とのおしへ、そんな惡戯をせずと、本の清書をしたがよい」

そんな言葉を聞くと興太郎はおさまらなかつた。

——御師匠さんの子やと思ふて、そんなゑらさうな事を云ふな——そして興太郎は立上つた。と同時に他の子供達も一勢に立上つた。

——お師匠さんの子に口ごたへする涎くりめ、いがめてやれ〳〵——

皆々倚つて興太郎に打つてかゝつた。

餘りの騒々しさに戸浪は其場へ出て來て、

「これはしたり、どうしたものぢや、又そのやうにいさかいをする事があるものか、もうけふは赦しては置かぬ、サアこつちへおじやー」

さう云つて興太郎を机の上に立たせ、線香と鉢を持つて立たせたのであつた。

——お師匠さん、堪忍してくなはれ、〳〵——イヤ〳〵けふは了簡はならぬわいなアー

興太郎は遂にたまらなくなつて泣き出してしまつた。

其處へ千代が小太郎の手を曳き三助を連れて源藏の家を訪れて來たのであつた。

——申し一寸お尋ね申します。此邊に竹つべらの源藏さんと云ふ家は爰かいな……——何竹つべらの源藏、そんな内はないわい——

さう云つて興太郎は下りて「そんな内はあるかい」はては三助と口爭ひをする。

——又その樣な事を云ふかいな——戸浪の言葉に興太郎は元へ戻り——ウハ……」——と泣き出した。

——武部源藏は此方で御座います——言葉にしよじられて千代達は家へ這入る。

それは千代の息をお世話して呉れと先日源藏に頼んであつたのであつた。源藏もそれを承知して世話してやらうと云ひくめてあつたので、それでわざ〳〵今日連れて來たのであつた。

戸浪も心よくその子を世話する事を誓つたのであつた。千代の子は小太郎と云ふ可愛らしい子供であつた。興太郎も小太郎の寺入に依つて今日の罰を赦して貰つたのであつた。

千代は寺入のしるしまでと、三助に持參させた堺重を戸浪の前に差出した。千代は呉れ〳〵も小太郎の事を頼んで隣村まで使の爲に出かけて行つたのであつた。戸浪は小太郎を連れて奥へ這入つてしまふ。

三助の居眠りしてゐる樣を見て興太郎は又

からかい初めたのであつた。そして今先、戸涙と千代とが別れしなにした素振を眞似たりする。そして師匠が歸つて來た事を一向に知らず。

――いろはにほへと、ちりぬるをわか――

子供達は急に改まる手習ひ事。

〽立ち歸る主じの源藏、常にかわりて色青ざめ、内入り悪しく子供を見廻し

「エ、氏より育ちと云ふに、繁華の地と違ひいづれを見ても山家育ち、世話甲斐もない役に立たずぢやなア

奥より戸涙、小太郎を連れて出で來る。そして約束の小太郎の寺入りの事を云つて、

「さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢ふてやつて下さんせいなア」

「御師匠樣、今からおたのみ申しまする」

〽云ふに思はず振仰ぎ、きつと見るより暫らくは、打守り居たりしが忽ち面色やわらかに

「ハテ扨て器量勝れて氣高い生れ附き、公家高家と云ふても恐らく恥かしからず、ハテ扨てそなたはよい子ぢやナ、して母御はいづくに」と問へば戸涙は「サアお前の留守に、その間に隣り村まで行つて來ると云ふて」「それもよし大極上、先づ子供と内へ遣り機嫌よう遊ばしたがよい」「それ皆お暇が出た、小太郎と共に奥へ行きや」聲に子供達は机を片づけて奥の間に飛んで這入る。

〽若君諸共、誘はせ、跡先見廻し、夫に向ひ

戸涙は先程より兎角顏色の優れぬ夫に何か此れには樣子があると、問へば源藏も初めて戸涙に總てを打明けるのであつた。

「實は今日庄屋まで呼出されたのは、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅丞相の御恩を着ながら時平に隨ふ松王丸、こいつ病ほうけなり檢分の役と見へ、數百人にて、追ツ取り卷き汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子として、かくまうよし訴へあつて明白、急ぎ首打つて出すや否や、但し踏み込み請取らうや返答いかに、退ツ引ならぬ手詰、是非に及ばず首討つて渡さうと請合ふた心には、數多ある寺子の内、いづれなりと身替はりと思ふて歸る道すがら、あれかこれかと指折つても、都育ちの公家達と賤が伏屋の童とは似ても似つかず所詮は御運の末なるか、痛わしや淺間しやと屠所の歩みで歸りしが天運の控へ強きにやあの寺入りの子を見れば、まんざら烏を鷺ともいはれぬ器量、一旦は身替はりで欺き、此場さへのがれたれば直に河内へ御供する思案、今暫らくが大事の場所ぢや」

源藏の言葉に戸涙はそれを遮つて、

「その松王と云ふ奴は、三ツ子の内の悪者、若君の顏はよう見知つてゐるぞへ」

と云つたけれど源藏は

「面ざし似たる小太郎が首、よもや僞とは思ふまじ、よし又それと顯はれたれば、松王めを眞ッ二つ、殘る奴原斬つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と、胸をすへたが一つの難儀」

それは今にも小太郎の母が來たらば何としたらよいか、此の事が當惑、さし當つた此の難儀と云ふを、戸涙は「女同士の口先きで、ちよつぼりさ欺まして見せるわいナ」

と云ふ戸涙の言葉を聞いて、源藏はそんな事では手ぬるい、一層親子諸共に死出の途と戸涙はそれではあんまりで御座いますと云へど、若君の身にはかへられん、あの子が今日寺入りしたが、業か、母御の因果か、報ひは此方が火の車と夫婦思案の處へ、春藤玄蕃と松王丸首受取りにやつて來る同じく百姓達も自分の子供の首をうたれては大變と、子を取戻しに來る。そして玄蕃に賴む、玄蕃は早く連つれて歸れと云ふ。けれど松王は菅秀才の顏見知つてゐるかに、一人〳〵呼出して面をあら

ためて戻してやると云ふ。そして順々に面をしらべて皆を歸してやる。

そして松王と玄蕃は内へ這入つて、源藏に改めて、菅秀才の首をうけとらうと云ふ。

源藏は畏まつて、暫時用捨を吳れるやうに云ふ。だが松王はそれを否定して「暫しの用捨と暇どらせ、逃仕度をいたしても裏道へは數百人を附置き、蟻の這ひ出る所もない、又生き顏と死に顏は相格の變るなどと身替はりの僞首、イヤもそれもたべぬ、下手な事して後悔すな」

と松王の言葉に源藏はムッとして、紛れもなき菅秀才が首附見せうと――源藏は首桶を持つて奥へ這入る。

暫時息のつまるやうな雰圍氣の中に時は流れた、嚮て、源藏は首桶を抱えて奥より出で松王の前に首桶を差出した。

「是非に及ばず菅秀才の首討ち奉る云はゞ大切ない御首級性根をすへて松王丸、しつかりと檢ぜよ」と源藏は松王を睨めつけてさう叫んだ。松王は「何の此れしきに性根なか、今淨はりの鏡にかけ、鐵札か？」金札か、――

――地獄――極樂、――

「生死の境、それ源藏夫婦を取り卷き召され」と松王の聲に捕手はぐるりと源藏夫婦を取卷く。

――とく實檢……と源藏は此處一瞬が生死の境ひ、もし首桶をあけ、僞首と云はば、たんだ一ト討ちと疑ひと松王の樣子を打守る、戸涙は可弱き女の身として、祈願天道神佛あはれみ給へと念じ入る。刻々、……松王の顏色に時ならぬ喜氣がさつと流れ出でた。

「ム、こりや菅秀才の首、討つたは紛れない相違ムらぬ、源藏よく討つた。」と松王の聲に源藏夫婦はほつと胸をなで下した。

「出かした〳〵、片時も早く時平公へ御目にかけん」玄蕃も肩の重荷を下した樣にさう云つた。松王も首實檢の役をはたし、此上は病氣保養に身を退く。玄蕃も今更の如く喜び首をかゝへて供を引具して去る。

天命か、天運か、何のかこちなき事の次第の好結果に源藏夫婦は嬉し泣きに泣いた。

其處へ訪れる、小太郎の母千代、夫婦のいこひに内へ這入つたのであつた。

我子の顏を一眼見たさに奥の間に、戯れ遊ぶ樣を夫婦に聞いて、奥の間に入らんとするを、源藏は背後から一太刀浴びせる。すかさず太刀先をかはして千代は源藏に向つて

「若君菅秀才樣の御身替りお役に立つて下さつたか、但しはまだか、サア〳〵何とでムんす」と云ふ言葉に夫婦は悔りして「シテ其許は何人の御内證」

〽尋ぬる内に門口より

梅は飛び櫻はかるゝ世の中に

何とて松のつれなかるらん

「女房喜べ、倅はお役に立たはやい」松王はさう云つて家へ這つた、「己れ、松王」源藏は叫んで斬りつけるを「源藏殿、だん〳〵」

〽夢か現か夫婦かと呆れて詞もなかりしが武部源藏異儀を正し

源藏は今迄に打つて變つた松王の態度にいぶかしく聞き訊した。

松王は先年時平公に隨ひ、親兄弟とも緣を切り、御恩うけたる丞相樣へ敵討主命とは云ひ乍ら、是皆此身の因果、何卒主從の緣切らんと作病にて暇此願ひ、菅秀才の首見たらば暇やらんと今日の役目餘もや貴殿は討ちはせまい、なれども身替りに立つべき一子なくば如何にせん、爰ぞ御恩の報ずる時と、女房千代と云ひ合はせ、二人の中の倅をば先へまわして此身替り、机の數を吹めしも我子は來たかと心の溝、菅丞相には我性根を見込み給ひ何とて松のつれなからうとのお願を松はつれない〳〵と世上の口にかゝるくやしさ、推量おれや源藏殿、倅がなくばいつまでも、人で

なしと云はれんもの、持つべきものは子でムる――と恩義を忘れぬ松王の言葉に今更源藏夫婦感涙したのであつた。

「定めて最後の節みれんな死をいたしたでムらうな」と松王の言葉に。

「イヤも若君菅秀才の御身替りと云ひ聞かしたれば、潔く首をさしのべて」「アノ逃げかくれも致さずに、につこりと笑ふて」「あの笑ひましたか、女房笑ふたといやい、ム、ハヽムヽハ、ムハ……ア、利口な奴、立派な奴氣健な奴ぢや九つで親にかわつて恩送りお役に立つは孝行者、手柄者と思ふなら」と松王は小太郎の氣健な最後に暗涙を禁ぜなかつたのである。

一間の内より菅秀才が飛んで出で、我れの身替りに成つた小太郎の身を、不憐な者と御袖をしぼり給へば夫婦もハツと共にひたふる有難涙にくれたのであつた、そして松王の差圖にて一挺の乘物引廻させ、松王扉をひらけば中より御臺が飛んで出で、絶えて久しき親子の對面――先つ頃時平の爲めに捕へられた山伏に姿をやつし救ひまいらせし松王の働き……目出度くも此處に主從は、幸福ある邂逅に涙したのであつた。

小太郎の野邊の送り

「野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、われ〳〵夫婦がかわり申さん」と源藏夫婦の心盡し、「イヤ〳〵是は我子にあらず菅秀才の亡骸をお供申す、いづれもには門火〳〵

〳〵たのみ、たのまる

と奥より門火をだし、この内源藏奥へ行き香爐と香をとりに行き持つて來る。

〳〵御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙冥土の旅へ寺入りの師匠は彌陀佛釋迦無彌佛、六道能化の弟子となり賽の河原で砂手本、

いろはかく子はあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれが添乳せんうむうゐめみる親心劍と死出のやまけこゑ、あさきゆめみし心地して、

――南無阿彌陀佛……

〳〵京は故郷と立別れ、鳥邊野さして出て行く

一同、新たなる涙の中に燒香する。

――幕――

南部坂

中座一月上演

(一) 瑤泉院御殿

しめやかな御殿にも、年を迎える煤掃で、甲斐々々しくも身仕度の腰元達は、用人澁川攝摩を胴上げにして、

〳〵目出度〳〵の若松樣よ、枝も榮えて葉も茂る、お目出度や。

と唄ひながら廣い座敷を一ト廻りしたが、とう〳〵澁川を座敷の眞ん中に落してしまつた澁川は腰を打つたが、しかめ面で煤取りの胴上げが御嘉例でも、之れは又無法だこの敵はきつと取ると、用人らしく生眞面目な物腰、中にお梅と呼ぶ腰元は、敵といふ言葉の尾について、御家老が亡き殿樣の敵討をなさるとの噂があるになぜお討にならぬと、意味ありげな間振、澁川は何の氣もつかぬま、今に敵討があるであらうが、他聞を憚る一大事だからよしなき噂を致さぬやうにと、皆の口を抑える。

噂をすれば影がさすと諺の通り、近習が大石内藏之助出仕の事を知らせに來る、澁川は此由を後室へ知らせやうと、腰元達へ粗相なきやうたしなめて立上つた

(二) 瑤泉院御居間

亡き殿、冷光院殿の位牌を守る、後室瑤泉院の居間である、瑤泉院はつゝましやかに、大石の來るのを待たれてゐるのであつた。

上〳〵時めきし、春は昔に冬枯れて、今は花なきそげ尼の……

戸田の局の案内で、大石内藏之助は瑤泉院の傍近う進み寄つた、瑤泉院は大石の顏を見ては何よりも、殿の無念、敵上野の事が忘れられないのである。

〳〵返らぬ事を繰返し、珠數の珠なす御涙御痛はしやと落涙なす、

内藏之助も瑤泉院の心中を思ひはかつては涙なしではゐられない、ふと大石は腰元のお梅が、襖の隙間から窺つてゐるのを、さとくも見附けた。

戸田局は此雪もいとひなく訪ね來た、大石の心中を問ふた、大石は名におふ東都の名所古跡も殘る方なく見物も濟ましたから、明朝都へ歸る所存で暇乞ひに參上した、猶亡君の敵討の義は思ひ止まつたと、瑤泉院や戸田局には案に相違の言葉で二人は興ざめ顏で面を見合すのみであつた。

「今改めて申さずとも、御存じの事ながら本國開城の砌御寶藏に貯へ置かれし御用金を配分なし、思ひ〳〵に知るべを便り既に拙者も山科の片ほとりへ居を構へ勤めなき身の心安

く祇園清水寺、智恩院、又愛宕南禪寺、見る物毎に珍らしく日夜遊覽なしたる上、敵地の樣子さぐらんと、東へ下向なしたるも名所古跡を眺めんため、上野飛鳥の花は知らねども、三つ股の月隅田の雪、けふは目黑翌は王寺と、三月以來見物なし、日頃の望みも叶ひし故、使ひ殘りし此金子、矢禮ながら後室樣へ納戸金に獻上なし、明朝都へ出立致し候へばいつまたお目にかゝれるやら計りかねたる内藏之助、それ故斯く雪中もいとはず御暇乞ひに出まして御座る、今獻上なす此の金子も、云はゞ御家の御用金、御受納なし下さらば大慶至極に存じまする。

たのみに思ふ大石が心變りに、瑤泉院は無念の齒を喰ひしばるのみである、あまりの事に戸田局は默してゐられない、赤穗離散の砌は、立派な覺悟を聞いて武士は斯くこそありたきものと、望みをつないでゐたが打つて變つた今日の心底……無念とばかり内藏之助に詰寄った。

〽女ながらも鐵石に、こりかたまりし忠義の一心、天晴れ健氣と良雄が、心で譽めて素知らぬ振り……。

内藏之助は熱湯を飲む思ひで、亡君の御短慮から御家の大事になり、數多の家臣も路頭に迷ふ今日の始末も殿一人の了簡で、今更吾良殿を恨む筋もなく、それゆへ復讐は思ひ止まつたと云ひ放した。

此の一言は聞捨てにならぬと懷疑をくつろげ、猶も詰寄る戸田局を瑤泉院は止めながら佛間より取り出したのは、冷光院殿の位牌である、内藏之助の前言は殿位牌の前でも變る所はない、果ては命が惜しいとまで云ひ放つ瑤泉院の無念口惜しさは譬へやうもない、手にある珠數を投げ捨て、命を惜しみ、名義を捨つる臆病未練の不忠者は、亡君にかわつて自ら折檻するとばかり、内藏之助の襟髮取つて、位牌でさん〳〵に打たれるのであつた、戸田局は後室の御腹立ちが御持病のさわりになると、なだめるのであつた。

〽なだめすかして止むれば、打しほれたる良雄が、姿を見れば何故に、かゝる心になりしぞと、主從涙にくれたまひ……

「返す〳〵も殘念なは、御緣家ながら御當家の御家來衆へもおもてを伏せ、嘸我君も冥途にて殘念にござりませう、月はかはれど逮夜ゆえ、佛間へ參つて御回向なし君をなぐさめ申しませう。

「申出して詮なけれど、妻子眷族養ひし、其の君恩を忘るゝとは、民百姓にもおとりし事」

「田の面にうつる月たらで、人の鏡の武士が」

「弓矢はとれど案内子同然。

「詞かはすもけふ限り。

「すりや拙者めに。

「君にかわつて勘當なるぞ。

「御勘當を蒙らば、これ今生の御暇乞ひ。

「再び面は、合はさぬぞよ。

瑤泉院は位牌を守つて、戸田局と共に佛間へ入つた。

〽手はあはさねど後かげ、心で拜む暇乞ひ、こなたは佛間つく〳〵と今が此世の生別死別、心の底は白雪の、怨みも怒りも只一夜、翌の朝日にとくるぞと涙と共に……

増上寺の鐘がさも、名殘り惜しむ響きを傳へて、内藏之助の胸にひし〳〵と喰ひ入るのである。内藏之助は以前の帛紗包の金子と更に懷中から東日記を出して、瑤泉院の紙壷に置いて更に名殘りを惜しむのであつた。始し終の樣子を聞いた腰元のお梅は内藏之助の企てがないのを知つて、安堵の胸を撫で下して姿を消した。

内藏之助は、しづ〳〵と去りかけた、戸田局が佛間から出て、内藏之助の置いて行つた東日記を見て内藏之助の深謀を知り、二人は顏を見合したが、内藏之助はさりげなき樣子でつか〳〵と向ふへ……。

（三）同　塀外

瑤泉院御殿の裏手である、今朝より降りしきる雪はなほ歇むべくもない、只見る雪皚々の清淨そのものゝ景色である。

〽埋もれて、往來も稀に屋敷町、大道狹しと出で來る、指す傘の澁川流、自慢の鼻の高足駄、雪踏みわけて立止まり……

清水一角が澁蛇の目傘で、大道狹しと出て來る、降りしきる雪を仰いで立止まる、と慌だしげにいそ〳〵と出て來た、以前のお梅は一角に先刻の内藏之助の言葉動靜を物語つて敵討の所存のないのを語つて仔細は密書を讀んでくれと手渡した。一角はその密書を見て意久地のない内藏之助を嘲笑するのである。

と見る内藏之助の姿にお梅は、一角の教へで道を違へて下手へツイと去つた。

〽折から此處へ歸り來る、道も一筋大石が、弓手へよければ弓手へつく、馬手へよければ馬手へつく、ハタと行き逢ふ一角が、喧嘩仕掛けに突當り……

一角は内藏之助の歸途を待つて、わざと突當つたのである、無法に賣る喧嘩に買ひもならず内藏之助はたゞもう平謝りであるが、一角中々に聞入れない。武士なら此場で勝負をせい、との難題である内藏之助は、腕などといふ手練もなき身、幸ひ雪に往來も途絶えて知るものもないゆへ見のがしてくれと歎願の外はなかつた、一角はとう〳〵大石内藏之助と呼びかけて、吉良邸への討入は何時の頃かと切り出した、内藏之助は愈窮した。

「それは全く浮世の雜說、手前においては左樣の企て毛頭致せし覺えは御座らぬ、すでに今日亡君の後室瑤泉院どのへ暇を乞ひ、大小捨て明日より町人になる内藏之助、これと申すも命の惜しさ、手前に企てなき事はこれにてお察し下され。

内藏之助は矢張かう云ふより外はなかつた

「天下無雙の大器量と、世の噂とは大きな相違、亡主の仇も報はずして、大小捨て明日より町人になるとは、見下げ果てたる犬侍、左程身共が腕に恐れ尻尾卷いて恐れるなら、犬つくばいに詫びさつせい。

「仰せの通り犬つくばいに兩手をついてお詫び申す。

〽兩手を突いてわびければ、猶も弱身につけ込んで……

「尻尾を卷いて詫びたはづ、犬にも劣つた内藏之助、相手に致すも刀のけがれ……、エヽ面を見るのも、けがらわしい。

と内藏之助の面に唾をはきかけた。

〽身の大望に堪へ忍ぶ、弱身に附込む傍若無人、人の心は白妙の、道踏みわけて歸り行く……。

一角は嘲笑を殘して行つてしまふ、やおら立上つた内藏之助の心は反つて清々しいものがあつた。

〽跡は往來も南部坂、流石丈夫の大石も今を限りと振返る……。

館の方を打見やりつゝ、湧き上る涙を押へた、寺坂吉右衛門、赤合羽、まんぢう笠の姿でつか〳〵と出て來た。

「お頭お迎ひ。

「大儀々々。

快よい笑ひがあたりの寂寞を破つた。

白妙を踏み分けて戸田局の姿が現れた、東日記に記されたる今夜の快擧を知つたからである、瑤泉院の嬉しげな顏も見えた。

「良雄、吉左右を待つぞや……。

「始めて知つたあなたのお心。

吉右衛門の意氣込むを、傘でさへぎつた。

「跡のことをおたのみ申す。

内藏之助は今生の別れ、血を絞る思ひで見返りがちに……。

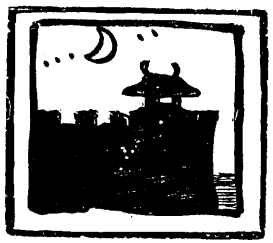
——（幕）——

中座一月上演

岡本綺堂作

箙の梅

三場



第一場　摂州生田の森一つ家

元暦元年二月七日――いとも晴れ渡つて、春の日射しに陽炎も燒えやうといふ、朝である生田の森に近い一農家、家とはやゝ不釣合ひと思はるゝ、樹振り面白き一株の梅が、今や花の盛りを見せ、傍なる井戸も梅の樹によつて一種の風雅を見せてゐる。

陣鐘の音が頻りに聞えて、源平今や鎬を削つて合戰最中を思はしめる、家の中には梅ケ枝と呼ぶ鄙に稀な此の家の娘、椽に腰かけた農夫の女房おいね、おくろと明けやらぬ中からの戰さ話である、源平いづれが勝たうが關係がないと云ふものゝ、此處で生れたせいか平家びいきであると、梅ケ枝が云ふので、女房達も東夷と昔から云ふ通りで源氏の武士は都育ちの平家の衆とは、雪と墨の違ひであらふと、とり〳〵の噂である、農夫の虎作は水汲みに來たが、何日も邪魔になる梅の枝を折らうと、おいねに鉈をかりて井戸の傍へ寄つた、梅ケ枝はそれを見て、慌てゝ止めて父を呼んだ、梅を折ると聞いて飛んで出た、甚五兵衛は虎作の手から鉈を奪ひ取つて、親子が大切の梅の木に鉈を入れやうとは憎い奴、指でも差さうものなら梅の枝よりも先へ、汝れの手足を叩き折ると強い權幕である、虎作も自分の仕業に詫びを入れて、此の梅の木を左程大事がる譯を尋ねた。

「今から丁度十七年前、この娘が生れた時に私は生田の御社の境内から、實生の梅を持つて來て門に植へたのが、その梅ぢや、春の花も數ある中で、梅は清く美しいもの、娘もそれにあやかる樣にと、名も同じ梅ケ枝とつけた、それから月日の立つ中に樹は段々に生長する、娘も段々生長する、今では樹も花盛りはゝゝぢやに依つてわしは自分の娘と同じ樣に、その梅の木も大事に育てゝゐる、早く云へば其の樹も此の娘も一身同體で、何うやら魂が通ふてゐる樣にも思はれるのぢや。

仔細を聞いて、あの梅の樹に刃を當てるは娘御に刃を當てると同じ事と、甚五兵衛の怒る譯が皆に呑込まれたのである。

貝鐘の音はげしく、劔戟の響に皆は立上つた。戰の間近に起つてゐるのを知つて三人は狼狽へて逃去つた、甚五兵衛も梅を抱へるやうに緣に上つて表の樣子を窺ふてゐた。

梶原源太景季、紫匂ひの鎧、箙を折負ひ大童にて太刀を拔き平家の軍兵二人と戰ひつゝ、出て來たが軍兵は敵せずして早々に逃げて行つた、源太はホッと一息吐いたが、渴を覺えて井戸の畔に來て釣瓶の水を汲んで飲む家の中に人あると見て。

紺絲の鎧着たる四十三歳位の武者と、卯の花の鎧着たる若武士を見なかつたかと尋ねかけたが、鎧姿の侍は絶えて見かけぬと聞いて、源太は暫かしく思つた、亂軍の中に親と弟を見失ひ心ならずも引揚げしが、一筋道のこゝを通らぬとは……獨言のやうに云つて不安の眉をひそめたのである、梅ケ枝はおづ〳〵源氏の方か、御苗字は……と尋ねて見た、如何にも東の者、梶原源太景季とハッキリ答へて親弟が萬一にもこゝを尋ねて參らば、再び城に駈け向ふたと傳へくれ。

「敵は何萬騎ともあらばあれ、面も振らず切つて入るを、坂東武者の情と知らぬか、親子三人打連れて戰の庭に向ひながら、二人の姿を見失ひ、我のみ生きて返らるべきや、父討たれなばその仇と組んで死なん、弟捕はれなば、その繩切つて救けん、生くるも死るも親子一所ぞ。

源太一人が城へ向ふと聞いて氣づかわしげに思つてゐた親子は、凛とした源太のこの一言で男々しくも感じたのである、ふと目についた梅の木に、源太は無心あると梅の枝を所望した。

「先刻よりの働きに、箙の矢種も射つくしたれば、咲き亂れたる梅ケ枝を……。

「箙に挿こんでお越しなさるか、さりとは優しい。

「東男も風流を存じてゐるわ。

源太は微笑むのであつた、梅ケ枝は其の顏をつく〳〵眺めてゐたが、鉈を取上げてつか〳〵と梅の木の傍へ行つた、甚五兵衛は止めやうと聲をかけたが、止めてくれるなとばかり、梅の枝は二三本折れた、源太に捧ぐも情ある梅ケ枝のそぶり……。

「おゝ扨も見事に咲いたのう。これより敵に駈け入つて落花微塵に散らすとも、匂ひは鎧の袖に殘らう。

源太は箙に挿さうとした、梅ケ枝は手早く梅を源太の箙に挿してやつた、さうして源太の武者振りをしげ〳〵と見入るのであつた、陣鐘太鼓の音に、屹度見返つた源太は「さらば」とばかり勇んで走り去つた。

恍然とそれを見送る梅ケ枝に、甚五兵衛は大切の梅を何故折つたと詰つたが、梅ケ枝はあの侍なら折つてやつても惜しふない、もう源氏平氏の何れとも構はぬ、妾の魂の通つてゐる彼の梅は遣りたい人にやります、と思ひ入つた娘の言葉に、甚五兵衛は娘の心を覺ることが出來た、陣鐘大鼓の音いよ〳〵烈しく流れ矢さへ、はら〳〵と飛んで來る、娘の身を案じて内へ入れやうとしたが、梅ケ枝は猶もあなたを見送るのみだ、遠くに見えた源太の苦戰に、今は躊躇もなく梅ケ枝は、父の止めるも聞かず小褄からげて、其の方へ走り去つた、甚五兵衛も打捨てゝは置かれぬとばかりその後を追ふて走り行くのである。

第二場　生田城外

木立を透して生田の城の木戸、櫓などがほのかに見える、あたりは一面の梅林で花は眞白に咲き亂れてゐる。

本三位中將平の重衡、引立烏帽子緋縅の鎧を着て弓を持ち軍兵數人と、敵の寄せるをふせぐべく控えてゐるのである、と見る向ふに只一人にて斬りまくる、心憎き敵とばかり矢を番へたが、そこへ兵衛盛長が駈け寄つたを幸ひ、敵は何者と問ひかけた、盛長から箙に今を盛りの梅ケ枝を挿して居ると聞いて、「何梅ケ枝を挿てゐるとか、矢種を殘らず射盡して箙の花をさしたるは、優にやさしき武士よな東の夷にも風流はありけるよ、斯程やさしき武士を遠矢にかけて射止むるは、餘り哀れを知らぬに似たり。

重衡は蓄へた矢を外して完爾とした、彼一人駈け入つても、やがては疲れて退くであらうから、唯捨おいて功名させよとばかり、重衡も流石に風流をわきまへた都人であつた。

盛長は源太をあのまゝに見捨てるのが武士として惜しい氣持であるのであつた。

「八幡太郎が貞任を、見逃した例もある、敵ながらも可惜武士を無益に殺すな、兵衛まゐれ。

重衡はこのまゝに源太を見てゐるのは心苦

しかつた、皆を引具して此處を引上げた、陣鉦の音は一層さわがしく聞えるのである。

源太景季籠に梅ケ枝を負ひ、太刀をかざして走り出で、名乗りを上げた、應ずる者城方より、菊地三郎高國軍兵大勢を引連れて、忽ち亂闘となつた、落花は亂れて吹雪に似かようた、高國は源太の太刀風に支へかねて、退くのを源太はいづくまでもと追ふて行つた。

重衡と盛長見送りながら再び出たが、源太の働くさまを眺めて重衡は。

「あれ見よ籠の花は太刀風に亂れて散るわ、——吹く風を何厭ひけん梅の花、散り來る時ぞ香はまさりける——

古歌の心も偲ばるゝのう。

「仰せの遠り、花を散らして香を殘すが、勇士の本意で御座りませう。

「げに梶原は天晴れ勇士ぢや。

床しげに源太を見送つて、重衡はたゞ〳〵感嘆するばかりである。

第三場　元の一つ家

胸に矢を負ふた娘梅ケ枝を抱て、甚五兵衛は我家に戻つて來た。

甚兵衛も娘の心を察して。

「あの方の籠の花も大方今頃は散つたであらう、その花の主も散らねばならぬ。

娘の心を察してゐる、甚五兵衛も今更愚痴は云はなかつた、娘の望みで今一枝、梅の木を打折るのであつた。

「これ娘よそなたが思ひをかけたらしい源氏の若武者は、この花を籠に挿て今頃は無勇ましう働いてゐるであらう、そなたの魂もあのお方の影身に添ふて、仇を亡ぼすやうに祈つてくれ……。

梅ケ枝は梅の枝をひしとばかり抱きしめてそのまゝがつくりとした。

梶原平三景時、同平次景高家來數人と出て來た、源太の見えぬに心許なく引返して來たのであつた、平三はつか〳〵と家の前へ來て甚五兵衛に年の頃二十一二、紫匂ひの鎧着けたる阪東武者は參らぬかと、源太の事を問ふて見た、二度駈けと聞いて平三は源太討たすなと走り行かうとした、折よく馳せ戻つた源太は、親弟のあるに互にその恙なきを祝し合つた。

源太は甚五兵衛にさしまねかれて、娘の死を知つた。

「娘は流れ矢で……娘が情の此の花も今は手向の花となつたか。

籠の梅の花を見かへつて源太は暗涙をのむだ。

河越次郎は判官、鵯越の難所を下りて、逆落しに寄せた、此の期を外さず押しよせよと大將の命を傳へた。平三、平次は素破とばかり馳せ向つた。

源太は哀れにも散つた、梅が枝をじつと眺めた。

「喃、御主人われらが籠にさせし枝は、落花微塵と相成つた、娘が抱きしゝの枝には、最後の息が通ふて居らう、その枝とこの枝とを換へて源太が申受け、再び陣頭の花を見やうわ、それがせめてもの追善か……。

うきふしも知らぬ東の夷、風流をわきまへぬ下蔕よと、都の殿原に笑はれんも口惜しく籠に盛りの花をかざして、俗風流の化粧軍、何のこれが譽にならう、よしなき花を所望してあたら一人の女子を殺した。

と聲をのむのだつた、甚五兵衛は此の一言を聞いて娘の冥福と喜んで、梅ケ枝の抱きしめてゐる梅の枝を差出した、源太は籠にその枝をさしながら、

「生死定めぬ戰の庭これが別れとならふも知れぬに……生きて娘の亡骸に……

脆いて熱い涙をそゝぐのであつた。

——幕——

中座一月上演

戀飛脚大和往來

新口村の場

新口村の場

大和國新口近在の街道とあつて、四邊は雪の景色のみである。

竹本の絃が雪おろしと共に、しん〳〵と響く、艶やかにも太夫の聲が流れ出た。

〽落人の爲かや今は若草の、薄尾花はなければども、世を忍ぶ身のあとや先人目をつゝむ頬冠り……

頬冠り姿の忠兵衛が、手拭を吹き流しに冠つた梅川をいたわりながら花道から出て來る

〽かくせど色香梅川が、なれぬ旅路を忠兵衛が、暖められつあたゝめつ、石原道をはかどらぬ……

雪に凍える手先を互に暖めながら、馴ぬ旅路の女足、忠兵衛の情の籠る介抱でやつと二人は故郷の入口まで來たのである。

〽急げば早きふる郷の新口村にぞ着きける……

舞臺はわらぶきの農家の側面を見せて、縄のれんの入口、反古張り煤け障子の竹格子の半窓がつゞいてゐる、百姓忠三郎の家である

忠兵衛は親孫右衛門にはお目にかゝるは今の身では大きな不孝、此家は家來同然の家だから、暫らく身の上を賴んで見やうと、忠三郎〳〵と聲を忍びながら訪ふた。

ばた〳〵と出て來たのは忠三郎の女房で、家の人は今庄屋へと云ひながら二人を見て小首を傾けた、自分は近頃此家へ嫁いだ者、前方の近附きは知らぬが、親方孫右衛門殿の息子殿が傾城とやらを買ふて、人の金を盜んだ上その傾城と手に手を取つて走つた。と忠兵衛等の今の身の上話、忠兵衛はギクリとした代官所の詮議、孫右衛門殿は久離切つてお上には構ひはないが、血を分けた親子の中とてきつい案じ、家の人も馴染故、庄屋から呼びに來る、ソレ印判ぢやと節季師走に傾せん事で羨えかへる、と遠慮なく喋舌りつゞけた。

〽知らねば遠慮もなかりけり……

忠兵衛も氷の上を踏む心地だが、自分等は女夫連で年籠りの參宮なつかしさに寄つた、大坂者と云はずに呼んで來てくれと賴むので女房は二つ返事で行きかけたが、飯の仕かけてあるのを梅川に賴み、炊きやう知らずば教へやうと。

「そも〳〵飯の炊きやうは、初めちよろ〳〵中くわつくわ、ジユウ〳〵時に火をひいて赤子泣くともふた取るな。

〽こゝらが飯の出來かげん仕方話しも傳授ぶり、一人のみこんで一ト

走りとばかり。

〃たすき取る間もとつかわと足もと早く走り行く……

いとも氣輕に、ちよこ〳〵走りに駈けて行くのだつた。

〃二人は跡を見送りて……

女房の今の言葉で、梅川は胸を痛めた。

「コレ忠兵衛さん、ほんに茲は劍の中、かうして居ても大事ないかへ。

「イヤ〳〵男氣の忠三郎、賴んで今宵は茲に泊り死ぬる共故郷の土。

〃産みの母の墓所へいつしよに埋められ嫁姑の未來の對面させたいと目もうろ〳〵と泣きければ……

〃それは嬉しうござんせうさりながら私が本のかゝさんは、京の六條の珠數屋町、一ト目逢ふて死にたいと又も涙に咽び居る。

梅川の心細さはたゞもう泣くより外はなかつた、慰めながら降りしきる雪を見上げて忠兵衛は梅川を促して繩のれんの内へ姿をかくした。

道庵醫者、藥箱を持つて僕の與助、竹馬に乘つた元氣相な子供なりは大きな相撲取でも親には甘いしなだれやう、老いたる父に鼻汁をかんで貰ふなど、三河萬歳、才藏と寒さ凌ぎの一くさり、各々に通り過ぎる。

〃駄洒落を道のしほにして隣村人と急ぎ行く……

跡は人も途絶えて、雪の降る音さく〳〵とのみである。

竹窓の障子を明けて、忠兵衛と梅川は向ふを見てゐた、遇然……遇然、忠兵衛は遠くの父孫右衛門を見たのであつた。

「あれ〳〵あれへ見へるが親父樣、此世の別れお暇乞ひ、せめて他所ながらお顏なりと、拜もふと遙る〳〵と茲迄來た念願が叶ふたかあゝ有難い〳〵。

「そんならあれがお前の父さんで御座んすかへ、本に親子とてあらそわれぬもの、目許なら鼻筋ならお前によふ似た事かいなア。

「サそれ程よふ似た親と子が、詞さへも交されぬとは何とした身の因果、あゝお年も寄り足許も弱つて御座る、もし親父樣、是が今生のお暇乞ひで御座りまする。

忠兵衛は手を合はした、梅川も延び上りざまお顏の見初め見納め嫁の梅川で御座んす。

〃あなたへ御苦勞かけまするも、みんな私ゆへ、此梅川故……

聲を上げてうろ〳〵するのみである、忠兵衛は梅川をなだめながら、せめて忍んでお暇乞ひを障子を〆切つた。

〃大坂の義理も故郷の恩愛も、道は二つに別れども、血筋計りは一ト筋に道場參りの返り足……

花道から孫右衛門、弓張腰片手では杖、片手に傘をさしかけて來る。

〃孫右衛門は老足の休み〳〵門ドを過ぎ、子故に心細道をかくとは知らずやう〳〵と、野口のみぞの薄氷すべるを留まる高足駄、鼻緒は切れて横ざまに、どうと轉べば……

孫右衛門年寄りの足弱に、雪の上へ伏し轉んだのである。

〃忠兵衛これは南無三と、もがけど出られぬ身……

忠兵衛はこれを見たが、傍へは寄れぬ身のかなしさはら〳〵するばかりであつた。

〃梅川慌て走り出で抱き起して裾絞り

忠兵衛に代つて梅川は入口から走り寄つて孫右衛門を抱き起し手厚い介抱をして、手を取つて内へつれて入つた。

上り框に腰かけさして孫右衛門をいたわる

梅川は、孫右衛門が自分で鼻緒をすげると、ちり紙を出すのを見て、茲によい紙があると懷紙を出して、さそくにこよりをひねつた延紙取り出すその手元、不思議そうに打守り

〃孫右衛門は此處ら邊りに見なれぬ女中、なぜ此やうに慇にしてくれるのだと問ひかけるのであつた。

〃顏つく〳〵と眺むれば、梅川いとゞ悲しさに涙は胸に、あまれどもわざといろにもいださずに……

「ハイ私はあのそれ〳〵旅の者、私が夫の親御樣によう似た年輩、恰好も生寫し外の人にする奉公とは更々以て存じませぬ。

お年寄つた舅御さんの臥しなやみの抱きかゝえ孝行は嫁の役……

「お役に立つて何ぼうか嬉しう御座んす、嘸連合が聞いてなら、飛び立つやうに思はれませうその紙と此紙を。

〃かえてわたしが申し受け父御に似たる親父さんのかたみにさせたう御座んすとちり紙袖におし包む……

忠兵衛は障子を細目に開けて覗く、梅川の眼と眼が合ふて無量の感慨、孫右衛門はそれと心附いた。

〃かわゆう御座ると泣き沈み、血筋の誠ぞあわれなる、涙のひまに巾着より金一ト包取出し……

孫右衛門は御本寺樣へ上げる金だが、嫁と思ふんではない今の御禮之を路銀に少しなりと遠い所へ行けと差出した。

〃渡せば梅川おしいたゞき……

「お心つかれし此お金逆さまながら頂きまする。

〃大坂を立退いて、わたしの姿眼に立てば、かり籠に日を送り奈良の旅籠屋、三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十兩遣ひ果して二歩殘る……

「金故大事の忠兵衛さん、科人にしたも私故嘸にくからうお腹もたとうが因果づくじやとあきらめておゆるしなされて……

と梅川は孫右衛門の手に縋つて顏を見上げた

〃下さりませ、親子は一世の緣とやら此世の別れにたつた一ト目……

「オ、さうぢや〳〵物いわず、顏見ずと手先きへなとさわつたらそれが本望逢ふた心、親子一世の暇乞ひ、が必ずこなたの連合に物云はして下さるなや。

〃喜ぶ中に忠兵衛は嬉しさのあまり駈けいでゝ、互に手と手取りかわせど互に親とも我子とも云はず云はれぬ世の義理は、涙わきづる水上と身も浮くばかり、泣きかこつ……

忠兵衛は轉ぶやうに出て、ひしと孫右衛門の手に縋つて泣く、どや〳〵と巡禮、古手買に身をやつした、捕手が、此家けぶいとばかり戸を明けやうとする、内には開けさせぬとかきがねかけて、懸命に押へる孫右衛門、天の救けか一人の組子あはたゞしく走り來て忠兵衛と名乘るもの長谷の山つゞきに休み居るが、手に合はぬゆへ加勢賴むと呼ばゝつた。

〃孫右衛門は飛立つ嬉しさ、天の助け

忝けないと伏しおがみ……

捕手の跡を見送つて、孫右衛門は手を合はして喜んだ、此ひまに此裏道の小川を渡り、藪を拔ければ御所街道、早く〳〵と二人をせき立てるのである。

舞臺は家體を下へ引いたので、後の藪が現はれた、忠兵衛と梅川は別れを惜み藪の奥深く分け入つた。孫右衛門は延び上り〳〵いつまでも名殘りを惜しんでゐる。

時の鐘、雪颪烈しく愁三重にて……

——幕——

御挨拶

松竹土地建物興業株式會社
常務取締役　福井福三郎

謹んで昭和五春を迎へましたことを祝福いたします。偖てかねて、再建を謀つてをりました世界的鄕土藝術の殿堂文樂座が新樣式の建築の粹を蒐めて竣成しました、永らくその本城を失つてゐた文樂人形淨瑠璃が

この近代的劇場で古典藝術の精華を見せる日を迎へ得ましたことは啻に私等經營者の喜びだけに過ぎずこの世界的藝術を持つ日本の誇りを新にする欣びではなからうかと存じます。

從來、内は秩父宮を始め奉り高貴高官名士をお迎へ致し、外は諸外國の高位名士の態々御來觀を得た等光輝ある歴史を持つ鄕土藝術新文樂座の出誕こそ多幸なる昭和五年に於て、益々羽翼を張つて國寶的入神の技術を發輝する事であり、今後一段の盛賑を見るは皆樣と俱に絶大の自信を持つものであります。新殿堂を得た文樂座は切に皆樣の御聲援に俟つてその伸展と使命を完了致したい心願で御座います。

『寺子屋』の一考察

森　ほのほ

「寺子屋」一場の色彩美に絢爛たるものはない。しかし其處には朧銀のやうに燻んだ落つきのある、燿變物のやうに底光する澁味のある、統一した色調がある。黑地に雪持ち松の對衣裳、小豆色の石持、羊羹色の紋付、黑の野袴、白の小袖――すべてが曲の內容に並行した、調子の整つた配合である。

「寺子屋」は「手習鑑」の一挿話に過ぎない。しかし、エム、シー、マアカスならずともそれを單獨の一幕物と見做すに、異議を挾むものはないであらう。其處には豪放な規模は無い。華麗な樣式も無い。しかし、水底に渦卷く流のつゝましい、忍び泣きの歌がある。黃昏の葉がくれに咲く夕顏の青白い、悲しい詩がうたはれてゐる。

『寺子屋』は松王一家の悲劇であつて、同時に源藏夫婦の悲劇である。

「報はこつちが火の車」「追つけ廻つて來ませうわいなァ」と源藏夫婦を暗然たらしめる前に、既に唯一人のいとし子をお身替と覺悟するまでの松王一家の悲劇は演ぜられてゐるのである。そしてその成ゆきは、後に松王と千代とで、演繹的に說明される――。

「寺子屋」の舞臺の蔭には、この痛ましい一場面の外に、他の一景が隱されてゐる。それは源藏がいたいけな小太郎の首をはねる件である。この二つの場面――それは誰しも見たいとは思はないであらうところの、殘忍な、悲痛な――が此シバキの後「景」を爲してゐる。そしてそれが、「寺子屋」の一曲を奧行のあるものにしてゐる所以ではないであらうか。

能の「仲光」では、仲光が我子の千壽を幼君美女丸の身替にする有樣を目のあたり見せるものであるが、能曲の本質から私達はそれをさして殘酷に感じない、併し、若しシバキで源藏が小太郎の首を打つ實景を見たとしたなら、私達は「御所三」の辨慶がしいぶの首を切る以上に、「タバコ切」の政右衞門が水子を刺殺す以上に、不快さを覺えたに違ひない。

この身替の條が後景として隱されてゐることを私は喜ぶ。それは前に言つた意味からばかりでなく、「奧にはバツタリ首打つ音」前後の、松王を押包む急迫した空氣を描出する上に、反つて効果があるからである。

「仲光」の系統を引く大近松の「嫗山姥」の冠者丸身替の段に暗示を得、「吉野都女楠」の首實檢の場の章句を借りて、「寺子屋」の一節が仕上げられたことは疑ひない。

「女楠」の三段目（尊氏本陣の場）は小山田前司が、義貞の身替となつて討死した我子高家の首實檢する條である。「ためつすがめつ、見れば見る程疑もなき……」とか、「生顏と死顏とは相好の變るもの」といふ文句が其處にある。此等の文句を「寺子屋」の作者は借用してゐる。而もより有効に……。

「嫗山姥」では、仲國の妻が我子、冠者丸を賴光の身替に立てようとすると、冠者丸は「首討たるゝ科ありとも、助くるこそ親の慈悲、つれない母や恐ろしや」と逃げ惑ふのであるが、遂に「拔打に討つ太刀風」に首を落されて「未練な死」を遂げるので、「仲光」と同じ樣に身替を如實に見せてゐるのである。

「寺子屋」では、こんな慘な光景は省略してしまつてあるが併し、小太郎は冠者丸のやうに逃げ隱れせず、果して源藏が言ふが如く、「潔う首さし延べ」「につこりと笑うて」討たれたであらうか。私は源藏の言つた言葉を當座の間に合はせであると取りたい。なぜなら、けなげな最後を遂げた小太郎よりも、卑怯未練な死樣をした冠者丸の方に、子供らしさ、いぢらしさをより多く感じるのであるから――。

「手習鑑」より二十餘年後に出來た「近江源氏」の作者が、人質の小四郎に「私が命一つで、父樣や伯父樣の手柄になるなら何の惜みは致しませぬ。尤も腹の切り樣も稽古して置いたれば切損ひもせまいけれど」とけなげな事を言はせて置きながら、一度母親の聲を聞くと、折角の覺悟も忽ち崩れて、「母樣の聲聞いてから一倍命が惜しなつた」と逃げ廻る段取に仕組んだのは純眞な冠者丸よりも更に一層人間味を感じさせる。

多血質な源藏と膽汁質な松王、何處かまだエロチックな戸浪と理智の閃く千代、平民の小太郎と貴族の菅秀才、或は白塗の松王と赤ツつらの女蕃――どれも、これも對立的に組合はされてゐる。

「寺子屋」の面白さは、此等の組合せから釀される混合酒の味である――。

マアカス譯すところの「敎室」――寺子屋の寫生をのつけから見せたのは珍らしい趣向である。小兒達の一つづゝ控えてゐる机が、單に手習の爲の小道具に終らず、松王の演技にとつて重大な任務を持つ物となつてゐるのも好い。小道具を上手に運用したものに、もう一つ駕がある。菅秀才の母が姿を隱して來た網代駕は、後に小太郎の死骸を納める乘物となるのである。

マアカスはこの小道具の利用を沒却してしまつてゐる。

マアカスの脚色でいゝのは、小太郎の死を歎く松王に、同腹櫻丸の死を全く連想させぬことである。このカツティングは我が「寺子屋」に應用しても可い筈である。（納めの弘法の日）

寺子屋覺え書

——その一部松王に就て——

高谷　伸

忠臣藏、菅原、千本櫻などは何といつても院本物を代表するものである。殊に寺子屋などは、夙に海外まで紹介され、おまけに逆輸入までされてゐる。從つて自分の覺え書を繰つてみてもかなりの頁を費してゐる。その中から要點だけを摘出するにしても與へられた紙數ではあまりに少い。

松王の演出では、無禮者めの所、首實檢、二度目の出、その三點に各人各樣の型がある。

第一は、松王が首桶を源藏に渡し、奥の樣子に心を惹かれてゐる。奥ではばつさり首うつ音がする。首は菅秀才の首か自分の子小太郎の首か、それとも他の首か。おそらくは小太郎の首であらうといふ松王の心の激動を象徴する動作の終結である。この時、思はず發する松王の言葉は、「無禮者め」でも「すさりをらう」でも他の言葉でもよい譯であるが、今では「無禮者め」が多いのである。

エーイと首を打つ源藏の聲がする。松王は杖にした刀を思はずすべらせ咳にまぎらせ下手に身を崩す、とたんに、これも心配によろめく戸浪と思はず突きあたる。松王はこの心の動搖を立蕃などに知られないやうにと、思はず一言叫ぶのである。

故人膺阿彌の記錄によると、團十郎はちよつとギックリして刀を右手にトンと突き頭を抑へて持堪へる形をして見得をしない。五代目菊五郎は體を崩して戸浪と當り「無禮者」と幅をもたせて時代に叱り別に正面を切つて大きく刀を眞中につき右の手を胸にあて見得になる彦三郎型である。また昔好みに行くと左手の刀を右寄りにつき右手を頬杖の形にきまるとある。

私の見た中でも幸四郎はこの型であり、中車は右手に刀をつき左手を開いて大きく柄頭に重ねて見得をしたのである。

さて仁左衞門は、明治四十二年三月浪花座では右に刀をついて「無禮者」を大きく言ひ左を懷手の形できまり、その刀を左へ持直して右の臂を柄の上にかける形になつて右の手先でちよつと頭痛を押さへる型だつたと聞いたが、大正十二年の顔見世に見た時は、裏むきで右手に持つ刀をトンと突き、右手はふところ手にして、顔だけ振りかへつた大見得だつた。

かう書きつらねて考へると、團十郎のは活歴といふ主義から來てゐるにしてもあまりに澁く、歌舞伎の樣式美を無視してゐるのを憾みとするやはりどちらにせよ刀を突いた正面の見得のあるのが本格であるが、仁左衞門の裏むきの見得にも亦棄て難い趣があつた。實は、この見得一つで私は仁左衞門の松王を推賞したいと思ふ程である。

第二は首實檢である。一番この無難なのは松王が首桶の蓋を取つて左側に置き右手をその端に掛け、左手を開いて頬杖の型

に行く中車である。それは曲錄を前に置いて「ためつ」で左の手「すがめつ」で右の手を開いて兩手の頬杖に行く型と、たゞ蓋に兩手をかけて正面から瞰をろす型とを折衷した型で、兩手の頬杖は先代多見藏型で先代芝翫もこれを踏襲したが、いかに傍若無人の松王でも「かりそめならぬ菅秀才の御首」に對し曲錄は無禮である。蓋に兩手の型は今の扇雀も踏襲してゐたが、「よく討つた」でボンと蓋をする形と似るので損である。形といへば幸四郎の演る刀拔きもある。松王が首桶ひきよせる。立蕃が蓋をとつて松王の前に置き、その手で臺と共に首を持つて松王の方へさしつける。松王は同時に大刀をひき拔いて源藏の方へさしつけ左肘を蓋に置いてぢつと見る。「でかした」を悲痛な調子で叫び「源藏よくうつた」で刀を左に持ちかへ右手でボンと膝を叩きその手を擧げるといふ風で、これは七代目團十郎の型だつたが當時不評で廢つてゐたのを九代目が復活させたので九代目としては隨分思ひきつた型である。

仁左衞門のはまた違つてゐる。裾を捌いて座に就くと、右手を膝の上に置き刀を左手で立てついてきまると、立蕃が蓋をとつて横に置く。松王は正面のまゝ先づ源藏に目を配りその目を首にうつし腹で泣き自分の頭を細かく振りつゝ段々にかがみ、刀を倒しかけ、大きく肯づくと共に刀の柄に右手をかけんと立て直し「でかした」で右手を開いてあげ「よくうつた」で刀を置き蓋をした首桶の上に兩手を重ね腹で泣くといふ行き方である。

以上のそれぞれは代表的のものであるが、團藏には首桶をあけかけ思入れあつて一たん蓋をして立蕃に見られまいとした横向きの松王がある。それを巖笑が踏襲してゐるが、巖笑のは居所まで下手に寄るので立關先の松王である。中車が八百藏のずつと若年時代にやつて失敗した鉢卷はづしの松王を實川新四郎といふ役者によつて見たことがある。今の德三郎の和三郎時代に首桶の蓋を立蕃にさしつける珍型なども見たが、懷紙を實檢の時に啣へる型などは復活したいものである。

松王の二度目の出、「梅はとび」の歌、これは菅原全曲の作意に重要な關係をもつ物であることは前號賀の祝の舞臺で述べたが、この歌の順序に五種ある。甲は本文通り松王がこの歌をまつすぐに言ふので人形では勿論これである。乙は松ケ枝に短册をつけて源藏に上の句を讀ませるので、これは昔の幸四郎から七代目團十郎へ傳はり今の幸四郎もやつてゐる。丙は菅羽家系の文庫の裏に短册の貼つけてある型で源藏が千代に斬つけると文庫で止められる。ふと見ると短册があるので上の句を讀むといふのである。丁は扇に歌を書いて投げ込む型でこれは扇雀のを見たが扇雀だから扇といふ洒落ではない。もつと古く誰かの見た事もある。戊は經帷子に歌の書いてある型だが、これはあまりに作爲が過ぎる仁左衞門は、この甲も戊もやつたと聞いてゐるが、私の見た時は乙の型だつた。

最後の幕切の形は御臺若君は二重の上、源藏松王の二組の夫婦が舞臺の上下に別れ八の字に引張りになつて幕が本格であるが、（三十五頁へ）

紙上舞臺

「鎌倉三代記」

―浪花座一月上演―

本舞臺三間、常足の二重。上手折廻し障子家體の中に布團を敷き蚊帳がつゝてある。竹の本椽。石の手水鉢。岩の臺石に植木鉢。松の大木。石組みの井戸。其他。

と云ふ舞臺面である。

緒川村なる三浦之助義村が侘住居である。

〽時鳥ふる程啼けど聞く人おのがまゝなる在の名も……

と幕が明く。

百姓直藏、九郎作、伊八の三人が、在所の女房おはたの拵へで茶を飲んで居る。

〽……母は老病のふら〳〵と近所隣りの見舞人にわら家の軒も賑はへり。

やがて百姓達は何とか見舞ひをいつて去つた後、おはたが其處等をかたづけて居ると、紘に乘つて阿波の局、讃岐の局が、近侍習供廻り仰々しく現はれて賤ケ伏屋を訪ふ。

―三浦之助義村殿の母御前こなたさまかなあ。

と阿波の局の訪ひにおはたは驚いて飛んで出る。

―北條時政公の御息女時姫樣此家の内に御渡り遊ばすと……

二人が迎へに來たと聞いておはたは、

―おゝ、それは氣の毒な事やの。爰の母御は病氣で寢てござるぢやが、今言はつしやつた姫とやらは大方時女郎の事であらうわい。―それなれば無駄な事、是迄も度々迎ひにムつたなれど、

一度夫婦と誓つたからは何時かな歸るものでないと姫の御執心を被歴して、田舍人の氣安さに、鳥渡用たしする間、留守を賴みますと出て行く。

後に殘つた二人は、どうしても姫が歸ると言はなければ、最後の手段として三浦之助の病母を殺し有無なしにおつれ申さうと打ちうなづき、小褄りゝしく取つて忍び行かうとすると聲がかゝる。

―待つた。待つた。お局待つた。

で出て來たのは雜兵出で立ち、やくざ槍、安物作りの一と腰――と云ふ姿。

局等がいさゝかむつとして誰何すると、

―何俺が名はおゝそれ〳〵雲の上をがう〳〵と鳴あるく雷殿の如く

と大きく出ておいて

―なれ共急に名のついた安達藤三と云ふほんの當座の間に合ひ侍、北條時政樣よりの御使者

―なに、御使者とは心得ず。

―はて疑ひ深い衆ではある。其證據とつくり見せうと柄にくくつた袋物を差し出すと、局達は驚く。

―やゝそれは。

寄らうとするのを、

―いや、それから御覽じ。

と藤三郎は大きくなる。

―それこそは寢覺と名附給ひし御守刀、と云ふのを尻目にかけて、

―さあ、寢覺めやら寢起きやらそれは知らぬ。

是が使者の割符なりとふりたてるので、流石の局達もハヽアとなり、いざまづと入れかはつて

―して、御上使の趣きは。

とかしこまる。

―使者のおもむきは餘の儀で無い。

時姫殿連れ歸りの御使者だと云ふ。お局達は歸れ、歸れと云ふ。

―もし仕損じた其時は、

―これはきつい御念ぢや。

首はやられぬが此鼻をやらうで不安思案たら〳〵の局は入る。

後見送つた藤三郎も奥へ入る。

〽入相のすぎされば風雅の歌人は戀とや聞かん蟲の音も澤の蛙の聲々も修羅の街の戰ひと

身にひきしむる。

兜の緒をしつかと結び、香たきこめて、若宮口から一散にとつてかへした三浦之助義村が出て來て門口に來ると氣がゆるんでばつたりとなる。

すると奥から時姫が出る。

―やあ、三浦樣か。

で、かけ寄つて介抱し、有り合せの獨參湯をのませる。

三浦之助は氣がついて、是も御母の御慈悲なり、と感謝し、時姫の來て居るのをいぶかる。

しかし、時姫は、戰ひの世の習ひとて、一たんちぎつた夫なら、父に背いてもみさほをたてるのが妻のつとめ。心に誓つた三浦さまの爲に、病の母君の世話に來て居ると云ふ。

それで三浦之助が見參とばかり病所へ近づくと、へだての戸をばたりとしめて、母の聲である。

―やれ、此障子、あけまい

そも〳〵三浦が歸りしとは、坂本の城へかへりしか。よも此處へ來る三浦ではあるまい。

病氣とは思へぬりゝしさである

母の病に心ひかれて未練の心附く時は、却つて親子の弓矢の名折れ、必ず母有りと思ふなよと、出してやつたのに、今更歸つて來たと云ふのは、大方人違ひの三浦だらう。

―京鎌倉兩家わけめの大事のいくさ、戰場へむかひ乍ら敵にうしろを見するたはけた性根ならば子ではない。親でない。最早此世で顔合す子は持たぬぞ。これ、此蚊帳の内は母が城廓、其おくれた魂で此城一と重破るゝなら破つて見よ。

三浦之助の胸には一々ひしと應へる言葉なのである。

やがて頭を上げると、いざ戰場へ、とかけ出さうとすると、氣のすまぬのが時姫、追ひすがつて引きとめる。

―折角顔見た甲斐も無く、まう別るゝとは由もない親に背ひてこがれた殿御、夫婦のかためない内は、どうやらつんと、

とこなしになる。

―短い夏の一夜に忠義のかくる事もあるまい。

然し三浦之助も、仲々つんと氣のすまぬ乍ら、やつぱり此處では戰場へ、戰場へと、叫ばねばならない。

がい陣の後を待てと云ふ聲も、いさゝかうるんで聞かれる。

それ丈に時姫の未練はます。

追ひつ引かれつの形である。

緋おどし、

紫の袂と、

もつれにもつれる綾の繪である

〽是が泣かずに居られうか。討死の門出には、忍びの劔を切ると聞く、殊更兜に名香の、

かほるはかねての御物語り、

思ひ切つた最後のお覺悟

―妾や、あなたに連添ふからは、何の未練が

とかきくどくのである。

何故明らさまに打明けて未來の夫婦の約束をして下さりませぬと恨むのである。

―やつぱり敵の娘ぢやと疑ふてかいの。聞へませぬ。

すつかり駄々つ子である。

いや、痴話げんかの形だ。

鎧の膝に泣き伏した時姫の泣いて居る頸を見つめ乍ら三浦之助は

云ふ。

——おゝ、よき惟量。いか程深切つくしても、三浦が疑念は晴れぬわい。

——すりや、是程に申しても。乙女心は悲しい。

どうしても解けて呉れぬと言ひ切られても此最後の別れには、ちよつとすねても見られない。

あたら北條殿の娘御が、三浦之助の鎧の袖に泣きすがる姿はいぢらしい。

それではせめて母君の今はの藥湯なとせんじて行つて下されと頼むのである。

三浦之助も心が折れた。

二人は藥鍋を持つて奥へ入る。

夜が次第に更ける。

藤三郎の吉左右を待ちくたびれた先刻の局達二人が、各々一腰たばさんで忍んで來る。

と、高田の六郎が、忍びのこさへて、井戸から上つて來る。

六郎は驚く局を制して、一度藤三郎に姫連れ歸りをおほせつけられた時政公が心細く思はされて、彼に横目の使を召されたと云ふ。

——兼て覺へし忍びの術、小松殿より牛丁ばかり、此井筒まで切ぬかせ忍び入つた手元の手つがひ、三浦が此處に來りしは、いはしあみにて

へくぢらの大功

と喜びの大見得である。

局達もやつと安心して、宿外れで待ち合せる約束をして去る。

すると、藤三郎の女房おくるが立ち聞きして居たのを身とがめた六郎がきつとなつてつめよると、

——勝手知つたる裏口四方、いざ、御案内申しませう。

と連れて去る。

入れ違ひに時姫が、守り刀を抱いて出ると藤三郎が後から、樣々にかきくどき乍ら出て來る。

姫樣故に此顏へ入墨した。無事にお連れ申せば俺が女房に下さるわい。此藤三郎でも、男に持つて何の不足もあるまい……

つべこべ云ふのを時姫は、推參者、主へ對してとばかり、かくして居た刃を拔いて斬りかゝるを、口程もない藤三郎は許して、許してと逃げ廻り、どゞ、六郎が出た井戸の中へかくれて入る。

後に時姫は一人で、樣々の思ひに胸がつぶれる。

守り刀を送つたのは、三浦之助を討てとの父の心か。

それにしても、後を追へとは言はないで、人もあらうにあの樣な雜兵奴の妻に呉れやうとは情ないまう此上はと

自害しやうとすると三浦之助が出てとめる。

——やれ、早まるまい時姫、只今の一言で日頃の疑心はれたるぞや。

——それやお疑ひは晴れましたか。

喜んだ姫の心も束の間である。浮き立つた其心に、三浦之助は世にも怖ろしい難題を持ち出すのである。

迎へに來たのを幸いに、城へかへつて、鎌倉の大將、北條時政を討つて來い。今の言葉で父よりも夫を大事と思ふと知つたから、お前の父とは思はず、敵の大將、北條時政だ。必ず討つて來て呉れ。と賴むのである。

とつおいつ、かうかあゝかとまよつたが、それが出來なければ緣もこれ迄と言はれると時姫の心は一途に三浦之助へと燃え熾つた。

——思ひ切つて討ちませう。

時姫は泣き伏す。

三浦之助は勇み立つ。

と、上手の物かげからおくるが飛び出して

——聞く人なしと思ふは不覺、最前よりの一大事殘らず聞いた時姫殿此通り、鎌倉殿へ、おゝさうぢや。

とかけ出すのを三浦之助が取つて押へると其手の下からおくるは

叫ぶ。

——これ〳〵六郎殿、此處かまはずたくみの次第北條樣へ、早う早う、

とせきたてられて六郎についつかりと井戸へかけ入らうとすると中から白閃、一突きやつと槍先にかけられて息絶へる。

三浦之助は、つと井戸端にかけよつて陣贔を照らして中をうかゞふ。

——兼ねて申合せし計略、今日只今とゝのふたり。佐々木四郎左衛門高綱どの。

と呼ばれて井戸を出たのはさつきの藤三郎である。

上手に槍をたてゝ戻つて來る藤三郎の姿を見ると驚いたのは姫である。

——やゝそなたは。

——おゝ時姫の不審、尤も。

で、佐々木四郎の物語りが初まる。

其處に居るおくるの夫藤三郎と云ふ者が、彼に良く似た顏立ちだつたので其生命を買ひとり、北條家を欺いて佐々木のにせ首として送つたのだ。其後專心賴家公にお盡し申したが御武運無く、これではどうにも仕樣が無いからと、實は三浦之助と示し合せて、おくるの夫藤三郎になりすまし、北條殿に取り入る爲、指にも足らぬ端武者共に生捕られて、御前に引き出されたのが、地獄の上の一足飛び明智の北條殿も四天下郎に相違なしとあざむかれ給ふて、是此通り面に入墨をさゝれた時の嬉しさよ……

と節になる。

さうして今日の迎へ、時姫の心の決定、と語つて來て悅に入る。

と、おくるは何を思つたか、懷劍をとるとグサリと咽喉につきたてる。

苦しい息の下から彼女は云ふ。

——私の夫は水呑百姓、その日〳〵のが、もとは侍であつたが生れついてからの憶病の爲、刀をすてたのだつたが、常々其事ばかり口惜しがつて居たが、佐々木樣に面ざしが似て居るとの事で、天晴れ討死の數に入るは本望と、ニコ〳〵顏で死にゝ行つたおもざしが今も眼に殘つて居ます。あなた樣のお顏を見るにつけ思ひ出されてなりません。此上は一時も早く後を追つて——とかくの仕儀——

（三十一頁より）延若幸四郎の時は延若が座つたので畫面の均衡を失つた形があつた。嚴笑の松王のやうに下手むきに水晶の珠數を振つて泣きあげたのでは、源藏が取り殘されてぶちこわしで、これに至つては無茶である。

いろは送りは淨瑠璃作者としても力を籠めたものだけに叮嚀にやつて欲しい。割りぜりふでさらりとやるにはあまりに惜しいと思ふ時がある。近頃、淨瑠璃物の段切が時間の都合でか足が早くなつて餘情の乏しい事が多い。早い話が顏見世の賀の祝にしてもチクリが略されてゐたし、近八でも食はれてしまつていつもある割り白さへ無くなつてゐた。段切の文章は略されても筋はわかる。しかし、今の人の歌舞伎を見るのは、筋は寧ろ從である。歌舞伎の興味はその情趣である。段切など叮嚀にやることは、一見冗のやうに見えて、實は大なる必要である。

皆樣、おさらば。

と絕へ入る。

——既に四更も過ぎたれば東の陽氣は是鷄鳴、南北西に人氣立つはハテ怪しき……

東國勢の押し寄せだと、三浦之助は立つ。

母がうんと苦しむ。

無常の聲やと佐々木の長大息。

で幕。

紙上舞臺

福地櫻痴居士作

「春日局」

―濃花座一月上演―

紅葉山は春酣にして――。

見渡す限り千代田の城の櫻花一時に花咲き、吹上御殿の庭前櫻樹開花の中に春の終日は觀櫻、宴に突如と暮て……天下の權勢、德川も早二代の夢を結ぶ。

其日は微風が櫻樹の木の間を縫うて、吹きそよいでゐた。ヒラヒラと風の戯れに散る花瓣の遠近に世の無情はその瞬間あはたゞしくもまたゝいた事であらふ。

「高圓どの」――ひくいが底力のこもつた聲でさう云つた者があつた。「シッ」とその言勢を壓へつけるやうにして高圓と呼ばれし人は相手の輕卒をなぢつたのであつた相寄る二人の姿は櫻花の中に初めて相對したのであつた。先に聲をかけたのは石川刑部であつた。高圓とは國千代君のお傳役老女高圓その人であつた。

世は春にして、――吹上御殿の廣庭に斯く人目をはゞかり乍ら密事を語る高圓老女と刑部石川、そも二人の口から如何なる言葉が囁やき交されるか？

彼れ石川刑部は、大坂方と内通して、德川天下を覆へさんの暴事を抱き、又老女高圓は、今殿中に於て、竹千代、國千代の若君、擁護の二派に別れるを機會として刑部と共に相謀り共に德川の天下をねらつてゐたのであつた。

「たゞ邪魔になるはあの春日」高圓はさう云つて眉根をけわしく暈らしたのであつた。折しも彼方に打つ竹刀の音が聞えて來た、二人はぶつゝりとその會話を絶つて、

「見附けられては面倒、高圓どの」

「後刻」と高圓は目顔でうなづいて見せた。刑部も深くうなづいて、竹刀の音のする彼方を睨み乍ら櫻樹の中に姿を消した。高圓も悲びれもせず靜かに櫻樹の中に這入つて行つた。

「エイッ！」「ヤッ！」小さい唇からほとばしり出る氣合の聲も元氣に滿ちてゐた。竹千代は多くの小姓達を相手に今日も春日の指導に依つて文藝修練にいそしむのであつた。

ドタ〳〵〳〵と氣敏に櫻樹の間を駈け巡り乍ら切結ぶ勇ましい樣を見て春日の局は微笑むだ。

嚮て國千代の先に老女高圓が附添ふて出て來た此の有樣を眺めた――國殿か――竹千代の言葉に――兄上、野試合でムりますか――と國千代は兄に聲をかけられてさう云つた、――一本參らうか――はい――兄弟二人は各自に竹刀を取り上げた。

――若樣、櫻咲く吹上の御庭に竹刀うちはちと不風流――と高圓はそれを制してあちらの岡へと誘ふた。その言葉に春日の局はムッとした――武門のお家、まして淳和奬學兩院の別當、やがては征夷大將軍にもならせ給ふ若樣、御身たけくお育て申すが春日のあやまりでござりませうか――春日の局の血氣ばむを輕く受流して老女高圓は哄笑した。何に彼につけて意志相容れざる二人は各自別固の立場からして常に苦々しく對さなければならなかつた。

「臺樣のお成りで御座ります、――」

二人のいさかいは此の言葉にうち切られてしまつたのであつた。

事毎にいつくしむ臺樣の國千代に對する愛着は、總てに冷膽にふり舞ふ竹千代に對する臺樣の心に何時も惱ましさを春日は身に泌まなくてはならなかつた。

――「母上、あちらの岡の櫻が見たうございます、」

「オ、、國殿の所望とあれば皆も一緒に」

臺樣の仰出しに皆々が立上つた

「臺樣」――さう云つた春日の局は極度に緊張してゐた。「春日何ぞ用があるのか」じろりと春日に一べつをくれて臺樣はさう云つた。

「何卒竹千代樣もとも〳〵に」春日力一杯だつた、「ほんに竹どのも一緒に」と云ふををつかぶせて、「お供致すで御座りませう」春日は竹千代の衣紋をなほして立上つた。

そして、供に彼方の櫻の岡に竹千代をいざなふのであつた。

一しきり櫻の花が取殘された空地の上にハラ〳〵と亂舞した。今迄のその樣を逐一眺める一人の武士があつた、それは城中にその權勢並びのなき土井大炊守其人であつたのである。「折からの嵐」……

さう云つて何か深くうなづいた、

「花も心をせねばならぬの」嚮てそんな言葉が大炊の口から呟かれたのであつた。無心に散る櫻花の中に大炊はまぢろぎもせず何時までも〳〵立つくしてゐた。

今まで鳴いてゐた蛙の聲がハタと鳴き止んだ。春日の局は不振さうに四邊に氣をくばつた。

突然闇夜に光る紫電一刃、サッと春日の頭上に飛ぶ、間髪を入れずして白刃の下をくゞり拔ける春日は早その時泰然として曲者に相對してゐた。曲者は氣をいらたゝせて猶も鋭く斬り込んだ。

「曲者！」春日は笈づるを縫ふ手もやめずにさう叫んだ。聲を聞きつけて梅の戸はぼんぼり片手に急ぎ足に春日の部屋に駈けつけた。此の體を見て愕然とした。

「おッお局を、」さう叫んで曲者に打つてかゝつた。闇夜に三つ影法子が亂舞した。

サアと流れる曲者の腕首をすかさず取つた梅の戸は忽ちに曲者を組ひしいだ。そしてのがれようとあせる曲者を素早くしごきにてくゝり上げてしまつた、それは本の瞬間であつた。

二人に問詰められた曲者もいつかな口を吐かなかつた。

「しら〳〵しい今更に誰にたのまれたとは深く云ひ交したのも忘れたか。春日さへ亡きものにすれば忍び逢ふのも自由自まゝと其口から云ふたでないか」梅の戸はあまりの事に茫然として曲者を見つめた、

「默れ我身におぼへもない事を云ひかけ梅の戸にまで罪に落さうとや、そもじのやうな者は知らぬ此の梅の戸は存じませぬ」と梅の戸はきつぱり云ひきつた。

春日は梅の戸に命じて曲者の懷中をさぐらせた懷中からは一通の書面が出て來た。その書面には土井樣より酒井樣あての一通だつたけれども明發な春日は返つて曲者の心の裏を見拔いて哄笑したのであつた。

そして梅の戸は春日の命ずるまゝに土井大炊のもとへ曲者を引立てたのであつた。

曲者は詫間吉藏と云つて、石川刑部、並びに老女高圓と共謀する惡人だつたのである。

師走の寒さは蕭々と身にしみる程だつた。今日は未明に門出して春日の局は和子の病氣平癒祈願の爲に伊勢參宮に出達するのであつた。

未だ平河御門外は仄暗かつた。夜露にしつとりと濡れた屋根瓦の上にも早冬の氣が滿ち充ちてゐた傳馬役手代重兵衛と馬子二人は夜明けの、冷寒の中に立つて春日の局の出門を待つてゐた。

嚮て、平河御門は音もなく開かれて、内からは鋲打の女乘物がす

うつと出て來た。數人の附人に守られた春日は乘物を立たせて、靜かに降り立つたのであつた。

暫しとは云へ伊勢參宮に西國へ下る春日の胸に、和子に對する懸念が一杯であつた。そして梅の戸に吳々も和子の御身の上を賴むのであつた。

「萬事土井樣にナア」と土井大炊にすがる春日の胸中もさすがに心殘りだつたに相違はなかつた。梅の戸は專一和子の御守を春日の前に誓ふのであつた。ト春日は先程からこの寒さの中に立づくしてゐる重兵衛と馬子を見て、

「あれに引いたるは何誰のお傳馬ぢや」

「ハツ、此度お局御參宮につき差出しましたる御傳馬にござりまする」

春日は先年下向の時の事をまざ〳〵と思ひ浮べた。下向の時のお傳馬は蒲團もなく手綱も繩であつた事を思ひ出した。それに今日の「お傳馬の見事な飾つけにたゞ事の皮肉として春日は見受けたのであつた。

「お傳馬は其儘早く引いて戻られたがよからう、かへす〴〵も世の中は次第に長ずる奢の沙汰、春日はうけませぬ」

さう云つて重兵衛に引取る事を申聞けた。

重兵衛も爲才なく馬子を促してしよぼ〳〵と引返して行つた。

「申附けたる用意の品をこれへ」

聲に附人は文箱を開け、其中より紫ちりめんのふくさにつゝみたる品々を包のまゝ文箱の蓋に入れて春日の前に差出した。それらは西國下りに用ひるべき巡禮衣裳だつたのであつた。聽て巡禮姿と早變りした春日の姿を見て皆の者も今更の樣に駭いた。

「最早其方達にも用はない、立ちませい」

春日はさう云つて供の者まで退けたのであつた。

千早ふる神の御坂にぬさまつらいはふみことはおも君の爲めさう一首を詠みて、

「はて、おもしろき門出ぢやナア……」

……春日は御殿の彼方に禮拜して靜々と伊勢參宮の途に……。

慶長十八年四月、大御所家康は隱居の身をはる〴〵江戸表に訪れたのであつた。

御臺所の餘り國千代を熱愛し、竹千代を兎角疎んずるを薄々承知してゐたのであつた。

そして大御所は御臺に怨々として子供のしつけを說くのであつた暗に示す大御所の言葉を御臺は御無理御尤もとして拜承しなくてはならなかつた。

同席せる土井大炊、酒井雅樂、青山伯耆、本多上野の面々にも十全の堪忍を說法した。

只人世は堪忍なりの自家教訓を說いたのであつた。

そして春日の長子千熊を、竹千代の小姓として差出すむねを土井大炊に申附けたのであつた。

家康は懷中より一書を取り出して

「それは子供を育つる心得方を老人の夜なべ仕事に永々と認め置いた程にとくとお讀みなされたがよい隨分お爲に成る事もござらふ、尤も國が成人の上は此書附を遣はされよ」

さう云つて書狀を御臺の手に渡した。そして今一通堪忍のいましめを認めし心得法を土井大炊に依つて讀み上げられたのであつた。

其れから間もなく竹千代と國千代の二人の孫の顏を見る家康もさすがに嬉しかつた。

大御所の故意に菓子を得さす事に依つて、國千代の其れをなぢるのであつた、

「コリヤ國いかゞ致した、勿體ない此處はその方が上る所でないぞ それに居よ〳〵」

國千代はたゞ母の顏を見て「ハ、ア」と下段に平伏したのであつた。

「コリア何ゆへに國千代どのには此處へは叶ひませぬ」御臺はさう云つて大御所に問ふた。

「來男は家來同然の心得なれば、同席は相成らぬ」さう云つて「竹千代どの、お菓子を參らする」と菓子を竹千代にあたへたのであつた。

「國、その方も相伴致したいか？」國千代は

「ハ、ア」と平伏した。大御所は菓子を二つ三つ國千代にあたへた。

「有難く頂戴仕りまする」さう云つて國千代はまぶたをしばたゝいた御臺は、その樣を見て事毎に境界ある竹千代の身を恨むだ。

竹千代殿は幼少よりして逋れの器量、德川三代の天下は泰平なるぞ」

大御所家康は皆の前に先見を了つた。遠くで謠の聲が廣間に流れて來た。

千代田城中、白書院に集まつて土井、酒井、本多、青山の諸侯達は話合つてゐた。

其れは此度和姬君の御入內遊ばされる事に就いてゞあつた。

春日の局は和姬の御母代りに此上もなき光榮を拜仕してゐた。

先年より、大坂方に內通して德川天下を覆さんとして、その密事暗々裡に謀計してゐた老女高圓まつた石川刑部も春日の局の才氣に依つて覿破され、それ〴〵所刑を申し渡されたのもつい先日の事であつた。

實に誠を輝す朝日かげ、三代の御代も動きなく、常磐の松の色かへで、幾世久しき榮へ行く、なびく御治世を春日は心に何れだけ祝福した事であらうか。その時春日の胸中は只感喜に波打つてゐた。

其時長子稻葉丹後守は、山科に殘りし夫佐渡守の使として、二男七之丞三男內記のもたらせる書狀を持參した。春日は其書狀を見て愕然とした。あまりの事にぐらぐらとげいめいを感じたのであつた絕えに絕え忍んでもさすがの春日も遂に其場に泣き伏してしまつた和姬始め他の諸侯達も吃驚して、春日にその話を聞いた。春日は涙乍らに長の暇乞ひを言上しなくてはならなかつた。それは此度夫佐渡守が眞岡二萬石にて將軍家へ召かゝへられる事につき、佐渡は妻の餘榮に依つて身の立身は心外なりとして春日に離別を申出でたのであつた。餘りの突飛な出來事に並居る諸侯も呆然としたのであつた、そして佐渡守の短慮を非難せずには居られなかつた。

秀忠公は逐一禊の影にて始終の樣子を聞いて、春日の歸國を許したのであつた。

春日の局はちゞに喜び其の場より退出せんとした。其時秀忠公の命に依り夫稻葉佐渡守が其座に現れ出たのであつた。

春日も今更の樣に事の如何なるを知覺する事が出來得なかつたのである。それは佐渡守の此度の御取立は大御所の御目鏡に叶ひ新地二萬石かし下さる事に依つて佐渡の疑念も晴れ、まつた離別狀は春日の局に披見させ無用の悲しみさせまじとの上意だと相判つたのであつた。竹千代も春日の局に何時〳〵までも傍に居て吳れる樣と希つた。春日も事此處に極まる上は何の否はなかつたのであつた。そして七之丞は尾張公へ、內記は國千代の小姓として親子五人一度に輝く榮光の世界に入る事が出來得たのである。

嚬子、謠の調べに連れて舞ふ春日の胸や感慨無量とや、いや榮え行く御代の厚恩に、如何に感喜した事か、一拍子〳〵振舞ふ足のはこびも千萬無量の思ひがむしあふれてゐた。

紙上舞台

「慶安太平記」

―浪花座一月上演―

序幕　城外堀端

遠見は西丸城――
二重橋――
雨に煙る城外、堀端の出茶屋の景。
三味線の音が漂よふ――
おきまりの酒くらひ奴が二三人床几にかけて、燭酒屋牛六の御燗で過ごして居る。
其處へ例の、朝から酒の丸橋忠彌がさふらふとやつて來る。
七三で、
――ア、いゝ心持だ。川岸通りの居酒屋でたつた二た跳子飲んだのだが大層醉が出た。いや、出る筈でもあらうかへ。
彼はしどろな舌さばきで、先づ今朝飯前に向酒二合、それから角の鰯屋で、ちよいと五合、それから蛤で二合づゝ三本、雁鍋とさしみでほんの一升……と、とんとんと數へ上げて、
――とんだ無間の梅ケ枝だが、こゝで三合かしこで五合、拾ひ集めて三升ばかり、是ぢやあ仕舞は源太もどきで、鍋を買におかざあなるめえ。裸になつても酒ばかりは……
とか何とか言つて舞臺へかゝると、件の仲間を見付けてすつかり悦に入る。
――是を見ては見逃されぬ。
どれ一杯と床几にどつかとかけて、先づ、酒をほめられた牛六に
――それぢや、亭主、貴樣も好きか。……いや、酒が好きとはたのもしい。一寸一杯あいをしろ。
――有難うはござりますが、賣物を飲みましては。
――代は俺が拂ふから、遠慮せずとあいをしろ。
――さやうなら酒の代は……
――へイ／＼有難うござりまするで燭酒屋牛六の悦につり込まれてついこれも乘り出した仲間等にもおいそれと注がせる。
忠彌の天下は太平である、
見かけは貧相なところに、何がかくれて居るのか、誰も知るまい
牛六は酌をし乍らお追稱である
――こんな慈悲深い旦那に、天下を取らしてえなあ。
――あなたに天下を取らしたら思ひ入れのまして下さいませう。
酒の上での輕口も、忠彌の胸には有卦とひゞいた。
其内に下城の刻が近づいて、仲間供は銘々に禮を言つて去る。
と、犬が出る。
――ワン、ワン
――赤犬は、牛に味が似て居るから、モウとなけ。モウと泣け。
――ワン、ワン
――やつぱりワンと泣かあ。モウと泣かぬと打つ切るぞ。
煙管を振り上げておどすので犬は逃る。
忠彌は小判一枚與へて、牛六を者賈ひに出す。
と、入れ違ひに、女房の親の弓師藤四郎が出て來る。
眼敏く見つけた忠彌は一度かくれたが、舞臺へかゝつた藤四郎が鼻緒を切つて蹴つまづくのを見ると、見兼ねて飛び出して對面となる。
先づ、酒の强意見である。
さて、
――紀州家へ、千五百石で槍術指南番に仕官すると言はつしやる故、身仕度金二百兩程入用と言はれるまゝに、口入して貸した金子それなりけりで貸して臭れた先方へ言ひ譯もない上に日限切れて度々の催促……
醉ひどれの忠彌には、此手きびしい强談判ものれんに腕おしの態である。
――金は品川、吉原と廓の酒に呑み果し、申し譯にと摩利支天樣へちかひましたる酒斷ちもまこと神へ嘘はつかれませぬ故三ケ年斷ちましたを六年に增し、半日づゝ呑み初めましたがらちが開かず、まう六年增して向ふ十二ケ年きつぱり酒を斷つ事にしてかくの通り毎日かやうに呑み初めまして、夜だけは、寢て居ります其間だけきつぱり呑まぬと致しました。何とよい工夫では……
忠彌は一人好きな事を喋舌りたてると、しまひに大の字に寢てしまひます。
藤四郎は、ほと／＼彼に娘をやつた事をこぼし乍ら去る。
と、最前の赤犬が出て來る。
忠彌の口をなめる。

――まう、呑めぬ。呑めぬわ。
と眼をさました忠彌は、逃る犬を追つて後から小石を投げる。
ドブリ。
礫は堀の中に落ちた。
ドブリ
第二のつぶてである。
忠彌はあたりをうかゞつた。
黄昏近く、
雨が煙つて、
遠くへ逃た赤犬の尻尾も見えない。
忠彌は小石を拾つた。
煙管を握つた。
投つた。
ドブン、ドブ、ドドド、、、
（道具が半廻りになる。）
蛇の目傘をさして出た松平伊豆守が、來かゝつて、ぢつと見る。
つか／＼と來る。
傘を差しかける。
忠彌は、ふと、雨のかゝらぬのに氣づいてびつくりする。
――ム、。
――ハハ、、、
伊豆守の笑ひにむつとして行きかける忠彌は呼び止められる。
――こりや、其方、何をして居た。
――へイ。あんまり犬が咬へましたので、
忠彌は空とぼける。
――生醉ひの事でござりまするから、あたりましたら御免下さりませ。
――オ、左樣であつたか。行け行け。
忠彌はそのまゝ、さらうと花道にかゝつた。
――あゝこりや／＼待て。
――お呼びなされたのは――
――そちが名は何と申す。
――えゝ、忠兵衛と申しまする本釣りがボオンと來る。
伊豆守が傘を片手にぢつと見つめる。

第二幕（一）忠彌の宅

忠彌は相變らず醉ひしれて奥で寢て居る。
彼の近頃の醉態を不安と觀じた同志勝田と駒飼が、大變ないきごみでおしかけて來て居るので、妻のおせつは仲に入つて覇り切つて居る。
――事の破れとなるは必定。
――さ、その破れとならざる內某參つて息の根を止め
と駒飼が立ちかけると、
――喧しい、鎭まり召され。
と聲あつて忠彌が出る。
起きて居たと云ふ。
借金取りかと思つて息を殺してうかゞつて居たのだと云ふ。
さて、事を上げる日限が迫つたから、其手筈を具體的な話になると、彼は再び大の字に寢てしまふ。
駒飼は激怒して、同志の者と一評議せん、ござらつせへと勝田と共に席をけつて立ち去る。
おせつが氣もそゞろのかい巻を

とつてかけてやると、藤四郎が來る。

二百兩の催促である。

醉ひざめの忠彌が、ふと口すべらして天下を――と言つて逃込む其後を、問ひつめられたおせつは產みの父なればとつい夫の大事をもらしてしまふ。

――さあ、餘りの嬉しさに、俺あまう胸がぞく〳〵とするやうなどれ――

日限から手筈迄、もれなく聞き取つてしまつた弓師藤四郎は何と思つてかそゝくさと立つて行く。

第二幕（二）伊豆守役宅

夜。

家臣二人が、弓師藤四郎の妻は御前のお乳人、其娘せつは乳兄弟とうはさをし、その正直者藤四郎の注進故、此夜中の人拂ひの御面會だとうはさする。

伊豆守が出る。

藤四郎が召される。

軍學者由井正雪の謀叛の事が、逐一、松平伊豆守に言上される。

捕方が召される。

藤四郎が東道役に立つ。

第二幕（三）忠彌の宅

忠彌は何處迄も醉ひどれである德利を枕に寢て居る。

其德利に、とう〳〵とひゞきかへつたのは人數集めの太鼓の音である。

――事、露顯か。

がばと起きたが、何程の事があらうと、せゝら笑つて再び寢る男である。

おせつは氣もそゞろである。居ても立つても居られない其戸口を開けて飛び込んで來た捕手の先頭には、やつぱり、父の弓師藤四郎が居た。もう是迄と自害をしやうとするのを押へられる。

忠彌は寄るのを起き上つて投げとばし、手練の手槍を繰出すといざ來れである。

第二幕（四）忠彌宅裏手

竹藪つゞき。

眞中に井戸がある。

忠彌は手槍をふるつて、入りかはり立ちかはる四十人の捕手を相手に立ち廻り乍ら、竹藪を分けて出る。

砂を入れた玉子殼の眼つぶしが盛に飛ぶ。

忠彌のくり出す槍先がいなづまのやうにきらめく。

さつと捕手が引く。

忠彌は井戸へ行つて水を呑む。

「忠彌、御用」

「御用」

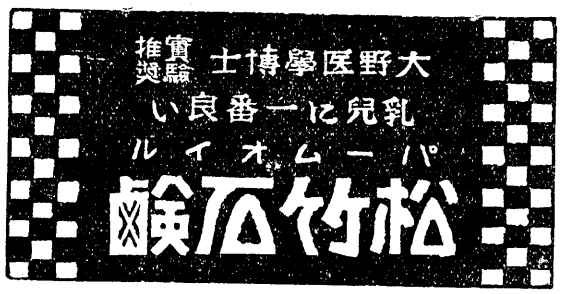
の聲に驚く忠彌は呑みかけた水をぶつかける。

「御用」

「御用」

とう〳〵忠彌を捕手はとりまく、引く――寄る――突く――かゝる――捕つた。

忠彌は釣瓶縄で縛られる。



誰が私をそうさせたのか

◇……「新口村」むだ書き……◇

椿　八　千　代

「新口村」といふものには隨處にキゝ文句がある。

まづ最初が

落人のためかや今は冬枯れて……

次に梅川が

それはうれしうござんせう、去りながらわたしのとゝ樣か、樣は京の六條珠數屋町……

最后に、

大阪を立退いて、私の姿が目に立ば、借駕に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日、三日夜をあかし、二十日餘りに四十兩つかひ果して二分殘る、金ゆへ大事の忠兵衞さん……

誰でも知つてゐるキゝ文句だ。

このキゝ文句のために「新口村」はいろ〳〵の方面へ派生した。

清元にも常盤津にも……薗八節？にもなつたやうに思ふ。

どういふものか、わたくしはたま〳〵機會を得て、常盤津をタツタ一曲稽古した、そうして選りに選つてこの「うめ川」を習つたことがあつた。

清元でも習ひ放しにしたことがあるが、今では兩曲が混線して根つから埒もないものとなつてゐる。

つまらぬ、恥さらしをしてゐるやうで恐縮だが、「道頓堀」の松本泰三氏がムヤミに催促するので、こんなことで責をふさいでゐる。

ところで、清元や常盤津の方では初めの歌ひ出しに

落人も見るかや今は若草の芒尾花はなけれども、

すつかり早春になつてゐる。

成程、清元では……常盤津の方は一寸思ひ出せぬが……「道行故郷の春雨」といふ名題である。そのクセ

この大和は生國なれば十七間の飛脚屋仲間、御上からはかくし目付或は順禮、古手買、節季候にまで身をやつし

……

と、早春の季節感を無視して、歳末の季題にある節季候を登用してゐる。

作者三升屋二三治も隨分やり放しなことをやつたものだ。

◇

かの「奈良の旅籠や三輪の茶屋」といへば、今も尙、三輪神社の參道の馬場の入口に三輪の茶屋の遺跡なるものがある色ガラスの障子のはまつた大きな家、庭も相當廣い、この三輪の茶屋の遺跡なるものが、現在では某辯護士の法律事務所になつてゐることさへ、ちよいとしたナンセンスではあるまいか。

もう一つ、今の大軌八木線の沿道に「新口」停留所を知つてゐる人は知つてゐやう。

そうして驛の附近名所案内標に「梅川忠兵衞の墓」として毒々しいペンキ塗りで鴈次郎の忠兵衞が、電車の窓をにらんでゐる。わたしは物好きに「新口」で降りて所謂忠兵衞の墓に賽したことがあつた。

停留所から軌道沿ひに半町許り北へもどつて　ちよいとした農家を左に曲ると、鼓梅のある眞宗のお寺がある。

そこが忠兵衞の墓のある寺なのだ。

表構へが眞宗である事は、忠兵衞の父親孫右衞門が「あの綟子の肩衣が孫右衞門さま」と忠兵衞の言葉どほり堅門徒であつたことが肯へた。

そうして門を這入て一歩、直ぐに自然石に「南無阿彌陀佛」と彫つてあるのが目をひいた。

その周圍には蘇鐵が葉をひろげてゐるのであつた。

わたしは裏手の墓地へ、それらしいもの、碑面を一つ一つ見聞したが判らない。

庫裡で聞くと、ハイカラに結つた若い細君らしい人が

「門の直ぐ手前の自然石がそれだす」

と、敎へてくれた。

「あの南無阿彌陀佛かね!!」

と、わたしは默つてうなづいた。

「繪ハガキのやうなものはありませんか」

と、わたしは細君に聞いた。

「まだ出來てまへんね」

「それぢや仕樣がありませんが、これだけ立派な遺跡ですから是非大切に保存しておく必要がありますな」

と、わたしはその自然石にコダックを向けた。

何、何、何百年かの後に、「梅川忠兵衞遺跡」として史蹟保存のやうなことを、もし講じられるとしたら、この愚文は有力なる資料文献として擧げられたらどんなものだらう。それは誰がわたしをしてそうさせたのか?

新文樂の竣成と

思ひ出るまゝ

竹本土佐太夫

曲亭馬琴には「いはでもの記」といふ隨筆がありますが、それは言はでもすむ事ながら、思ふ事云はで止みなんは腹ふくるゝ業なりと兼好法師の說かれた如く、心に思ふ事をだまつてゐるのも殘り多いといふのでかゝれたものらしい、私も鳴滸がましいおしやべりをして、尻ッ尾を押へられるかも知れませんが新文樂座の出來上つたについて、何か感想を述べて見よとの御注文で、自から進んで申上げる程の事ではございませんが、聊か胸に浮んで來たことを、いろ〳〵取交ぜて申上げて見やうかと存じます。

人形芝居といふものが始つた京都の井上播磨掾や宇治加賀掾の時代、降つて大阪の義太夫、若太夫の時代には、劇場もよほどお粗末なもので、すべての準備が幼稚であつたらうと思ひます夫から後、道頓堀の東西二座を始め、文樂座の元祖植村が阿波から出て來て、生玉や其他で人形芝居を始め、御池橋、堀江から博勞町稻荷の芝居と、各所を打つて廻つた時でも、小屋の構造や道具の設備は知れたものであつたと思ひます、明治年代になつて松島開拓に就いて、府知事から命ぜられて同地に小屋を建てた時も、規模は大きかつたが、左まで立派な小屋ではありませんでした、明治十七年御靈社内の御靈芝居を改築してこゝへ移轉した時でも、急ごしらへの早普請、ホンの間に合せといふに過ぎません、其後いよ〳〵こゝに根城をすへて老舗の根をおろすにつれて、こゝかしこ膏藥張りの修繕を加へ、先づ小屋らしいものには成つてゐましたが、御存じの如く場所は狹し、防火壁はなし、運動場はなし便所はちかし舞臺も狹ければ樂屋もせまし、人形遣ひの部屋も哀れであつたが太夫三味線の部屋と來たら、實にみじめなものでありました日本一の名人と云はれた二見の師匠（攝津大掾）でもアクビをしたら、手が天井につかへるほどの狹い部屋に陣どつてをりました、仕舞にはカブリつきの客席の上に天井を張り出して、そこに大部屋をこしらへ、こゝに大席語りなどが雜居してをりました、日本一の文樂座の樂屋はこれですといつて地方から來られたお客などにお見

せ申すと、へーといつてアツケにとられてお仕舞ひなさるほどでした、二階、三階に昇る段梯子の如きは眞に文字通りの螺旋狀になつてをりました、いつも注意して居ても、どうかすると天窓を天井にブツつける事がありました、かう申しましても話が大袈裟過ぎるといつて本當になさらぬお方もありませうが、實際常人の想像が及ばぬほどの慘狀を極めてをりました。

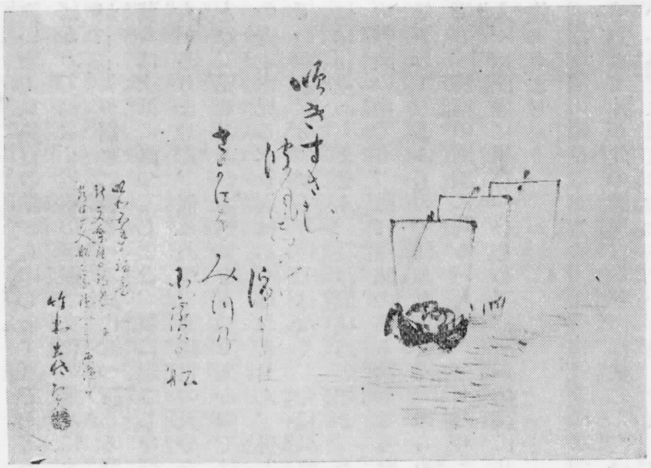
それでも有難い事には、其の陋隘なる古小屋でも、老舗となるとねうちがついて、お客樣もおいとひなく永當々々〳〵御入來下され、太夫、三味線、人形遣ひの名人達が競つて立派な藝をして見せましたので、其古小屋不完全極まる所の――ボロ小屋にも陸離たる光彩をそへまして、お客さまも藝人も場所と小屋とに一種の信仰心を生じ、それが又愛着ともなり、習慣ともなり、假令外にどんなよい小屋が出來ても、此の小屋卽ち御靈の文樂座ばかりは永久に亡ぼしたくないといふ念が、殊に年をとつた我々のやうなあたまの者にはやどつてゐたのでありました、恐らく世間にも同感のお方が多かつただらうと思ひます、全く御靈の文樂座といふものは世間の御ひいきのお蔭と代々の名人の藝の光りによつて、偉大の勢力を握つてゐたものでありました。

けれども世の變遷は仕方のないもので、さしも音に聞えた名劇場も一朝火難に襲はれては跡かたもなく燒亡せて、我々藝人は忽ち住馴れたねぐらを失ひ、勝手ちがひの他の劇場で興行したり、旅から旅を巡業したり何だか心細い想ひをしてをりましたが、災ひ必ずしも災ひならず、松竹といふお仕打をもつてゐるお蔭には苦もなく善後策が立てられて、結構なる文樂座が新築される樣になつたのであります。それにつけても昔しの藝人は、どんな名人でも、前に申ます如きボロ小屋――といつては不穩當ですが、何しろ不完全なる小屋ばかりで興行したのでありますから、お氣の毒でありますが、我々は開明進步の世に生れて、かゝる輪奐の美を極めたる劇場に於て興行致しますのは聖代の餘德といふものか、何しろ有難いことで御座います、併し劇場ばかりが幾ら立派でも內容が之に伴ひませぬと、所謂蒔繪の重箱に馬の糞でありますから、藝人一徒、こゝは一番死力を盡して奮鬪せねばなりません、大金をかけて此の結構なる劇場を建てゝ下さつたお仕打の苦心に報はねばなりません。

處が前に述べました人形芝居の小屋の變遷を說きますに當つては、茲に一つ見逃すことの出來ないものがあります、それは明治四十四年、今度文樂座の新築された土地に創立された近松座の事であります、これは曾て文樂座に對抗して覇を爭つた彥六座の一派が敗れては興り、浮んでは沈んだ結果、堀江座によつて殘黨が旗揚をしてゐた處斯道に御熱心であつた八木與三郎緒方正淸、島德藏、桐原捨三、岡田茂馬の諸氏が全く斯道救濟のお考へで、日本で初めての株式會社を以て、あやつり興行を企てられたのでありました。尤も其以前彥六座後も合名組織ではありましたが、株式といふ程には至りませんでした、此の近

松座が卽ち今度新文樂座の建つた土地でありまして、此の土地はよく〳〵あやつり座に緣の深い處と見へます。

近松座は其頃にあつては先づ古來無比の上小屋卽ち良劇場でありまして、迚も御靈文樂座などはお傍へもよれぬほどのものでありました、此の近松座の出來た時に於てすら、私などは驚異の眼をみはつたのでありましたから、今度の新文樂座に對しましては、實に名狀すべからざる快感を以て之を迎へるのであります、唯々前にもいふが如く、內容の之に伴はざらんとするを心配するのであります。



土佐太夫筆

今此の結構至極なる新文樂座の出來たのを見るにつけ、これは私情ではありますが、二見の師匠や大隅師匠や津太夫師匠、團平師匠やッイ近頃死にました越路太夫、南部太夫、春子太夫其他の人々にも一目見せてやりたいやうにも思ひます、がそれにつけても我〳〵の責任は一層重大であるとも思ふのです。

夫れから又少しお話しの方面をかへまして、近來我淨瑠璃道の不振になつたにつきまして、種々御忠告をして下さるお方がありまして、中には太夫の缺乏は養成法を設けざるが故である、新文樂座の出來るについては、淨瑠璃學校を起して之にあてろといふお說もありますが、斯道に於ては學校などは設けなくても、文樂座といふものが立派な斯道の道場となつてゐるのであります、志しある者、堅忍不拔の心を以て之に當り、文樂へ來て學んでをれば必ず成功するに相違ありません、尤も其の天分のない者は幾ら學んでも駄目ですが、それは學校に入れて拘束しても物にはなりません、猶くわしくいはねばお分りにならぬかも知れませんが、何しろ我淨瑠璃道には學校の如きものを設けるのは不要とおもひます少くも緊切なる最要問題ではありませんとおもいます。

物には流行りすたりがありまして興行物にも近頃はそれが烈しくなつて來ました、目下第一等世にもて囃されてゐるのは映畫です、これが爲めに總ての在來の興行物が壓倒されましたと申します人もありますが我が斯道は映畫などゝはよほど趣きが

違います只興行の點から申します事でしてあながち映畫の壓迫ばかりではなく世態の變遷、文化の進歩にもよるのであります……夫が爲めに啻さへ不振になつてゐる我が淨瑠璃の如きも藝人は次第に減つてしまひ、新に志ざしを抱いて飛込んで來る人がありません、偶まあつても稀世の天分をもつて、十分やりとげて見せるといふ抱負をもつて來るのではありません、斯道の秀才と見るべき人はあらはれません、併しこれは一時の傾向でいつまでもつゞくものではなく、今に又好機運が廻つて來るには相違ありません、我淨瑠璃道の如き、あまたある日本固有の聲曲の中でも、殊に深味のある精妙なる藝術がさう安々と亡ぼされてしまふものではありません、幾らめくら千人の世の中でも、藝術の鑑識に明るい人もタントありますから、これらの人々は此邊に想ひをひそめて、斯道擁護に共鳴して下さるに相違ありません。

淨瑠璃の嫌ひなお方に、無理に好きになつて下されとは強ひられませんが此の深奥なる藝術は決して亡ぼしてはいけないといふ事丈は國家的觀念の上から最も治ねく世人に其お考へを持つてゐて頂きたいと思ひます、そして何はともあれ、我が淨瑠璃芝居を御見物にお出で下さる人々は古典藝術の觀賞を目的として京都奈良に遊んで其古雅なる風物を愛し、神社佛閣の繪卷物、彫刻物などを御覽になると同一のお考へを以てお出で下さればよいと思ひます。私はそれを希望するのです、假令社會は進歩して止まず、耳に入るもの、目にふるゝもの、悉く長足の進歩をして、空にはツェッペリン號が飛び、海には最新式の大威力を有する軍艦が浮んでも法隆寺の古美術は優然として其の權威を失ひません、春日神社、大佛殿ノ靈域は更に其趣致を逸しません、其の境地に入つて遊ぶ人、觀賞する人は必ずや皆其の時代を超越して、天下泰平の昔にかへつて、外界の事は忘れてしまはふではありませんか、古美術を愛賞するのだからといつて初めから草鞋ばき、いとだてを着て出かけるのではなく矢張洋服を着たり、電車や自動車に便をかりて行くのではあるが、法隆寺なり春日の森なりへ一たび足を踏込めば、精神はすつかり古代の人になつてしまつてそしてその風物や藝術品の觀賞にひたるのではありませんか、我淨瑠璃人形を御覽お聞きになるにも、矢張此の古美術愛賞と同一觀念を以つておこし下されば、必らずそこに何等かの收獲があるに相違ありません、物を見るには何によらず、それ相應の準備、覺悟があるのです、唯漫然と見てはいけますまい、此點は特に私が江湖に向つてお願ひするのでございます。

筆を持つて机に向へば、申し上たいことは幾らもあります狂言の選拔、子弟の養成法、興行の方針、諸道具の設備などにも意見をもつてをりますが、それは夫々擔任者がありますから申上げなくともよいと思ひます、それでなくとも隨分長文になつて來ましたから、今回はこれで筆を擱きます。

大衆の眼に映じた
昭和四年の道頓堀街と芝居

高橋舟齊

昭和四年の劇壇時事——それは私から殊更ら申上げるまでもなく「道頓堀」雜誌の愛讀者諸君に於て既に已に御承知のこと、思ひます。それのみか、私と同じ貴問に接した諸君の中から定めて詳說される方もあるでせうからその上、私から蛇足を添えるにも及びますまい、また、私としても夫れを愼みたいのであります何故ならば、私が若しその問題について何か書かふと致しますと私の無遠慮な性情からツイ餘計な憎まれ口を利きたくなつて、其の結果、昭和四年度の歌舞伎や所謂名優諸君の尊嚴？　を毀くる無きやを恐れるからであります。

如上の意味で、私の觀察した昭和四年の劇壇に對する私の意見と感想を新年の劈頭に持ち出すことを遠慮致したいのでありますが、然し切角の貴命に背くのも不本意と存じますから、私といふ自我から離れ、且つ劇の內容、劇の批判といふやうな問題から成るべく避けて、只だ大衆の眼に映じた道頓堀街と芝居を大ザッパに書きつけることに致しました、從つて貴問から聊か的を外れた點は何卒御寬容頂きたい——と豫めお斷りをしておいて登場人物を、そろ〳〵引つ張り出します。

×

時＝某月某日、午後六時頃　場所＝某座の表、

觀覽券購買者のために仕切をした柵內で、押しつ押されつ列をつくりながら遲々として進む群集の中の乙女へ、列外からもどかしさうに話しかける甲女

甲「××さん、早ふ切符買ひなはらんかいな、もう幕が開きまつせ、あゝしんき」

乙「そやかて、順番がこんと買はれしまへんがな……あゝ痛ッ、この人、後から押しやはつたかて、前が支へてまつさかいアケしまへんがな、あゝ苦し、一寸々々、××さん、これ持つてとや」

乙女は、手にしてゐた小袋を、サモ大儀さうに、列外の甲女に渡す、斯ふした騷ぎが列內で、二ケ所、三ケ所に行はれてゐる折柄、芝居茶屋の女中に送られた藝妓の一團、嬉々として本家の方から入場する、それを眺めた通りがゝりの髮の毛

を長く伸した男

男「ちよッ、民衆娯樂の劇場で差別等級をつけるのは怪しからん……」

髪の毛をチックで光らした番頭風の男

「何んぼ民衆娯樂やかて、お金を澤山出したものが、氣樂に見られるのが當然やおまへんかいな」

前刻來、看板を一心に眺めてた男

「なんだい、民衆娯樂〳〵と、安ッぽく言ひなはるけど、芝居は藝術だつせ、天下の鴈次郎に二人おまッか」

茶目らしい男

「そや〳〵、天下のわたいにした處で二人おまへんなァ」

×

時＝同日、午後八時頃　場所＝戎橋附近

田舍の觀光客

「ほう、こらハァ道頓堀！　いやもうガイに賑かだぞ、おら眼が舞ひさうぢや道頓堀サ芝居町ぢやけに聞いてゐただが、これぢや役者どんも落ついて芝居を出來まいぢやて、あれ〳〵あの異人館に赤い灯や青い灯が化物の眼玉見るやうに動くは〳〵、おゝッ、こりゃ妙だぞ〳〵、あのデカイ煙管の雁首みたやうな中から誰れか變な聲を出して唸つてゐるけな、役者どんの口跡でござるまいかや」

其の同行者である大阪土着の人

「ちがひま〳〵、何んぼ何かて、役者の口跡が表まで聞えまッかいな」

田舍の觀光客

「左樣かな、俺アはあ、道頓堀は芝居町ちうだで、此所全體が芝居かと思ふてゐたど」

大阪土着の人

「ハッ〳〵、そんなことがおまつかいな、そりや昔は、道頓堀の五座の櫓云ふてな、それ此方へ來てみなはれ、此處は浪花座、先方に見えるのが中座、それから角座、そして今は活動の小屋になつてまッけど朝日座と辨天座の五ッの小屋で芝居がおますし、此方の濱側はヅーッと芝居茶屋が軒を並べてゐて此の通り筋全體が芝居と芝居に關係ある稼業計りでおましたもんやさかい芝居街云ふたんだッけど、今は貴君も見なはる通り、カフエーとかバーとか云ふもんがタント出けて毎日毎晩ブー〳〵ドン〳〵、ヂャカヂャンで騷々しい事だすもん、こんぢや舞臺に立つてる役者かて芝居がしにくおますやろ。

×

時＝同日、午後九時頃　場所＝某劇場内

◇世上の不景氣も此處だけは例外　二圓三圓、五圓の觀劇料も物かは、各等滿員、廣い場内も立錐の餘地なき盛況。

◇舞臺では人氣者の喜劇役者が熱演？の眞ッ最中。

◇觀客の大衆はスッカリ夫れに引きつけられてゐるかと思ひの外、仔細に檢分すると、場内で飲食及び喫烟嚴禁の筈を、キャラメルか昆布かを口に入れて頬ベタをモグ〳〵動かしてござる女は

んがチョイ〳〵目につく、正宗かボクツトウキスキーの壜を電燈の光でピカリとさせた男はんもあつた。二階棧敷の一隅から煙草の煙がボーッと舞ひ昇る、更らに西の棧敷に陣取つた藝妓はん達の行儀の惡さ、或者は舞臺をお尻むけにして何ものかを摘んでは頬りと口中へ放りこんでをるかと思へば、或者は猫が手水を使ふやうな手付で顔の化粧をしてゐる、又或者は同席の旦那はんらしい人物の脊中を叩いたりして黄色い聲でベチャクチャ、結局見物中の誰れからか「喧しい」と怒鳴りたてられてキロリと目を剝く、

◇舞臺は、木の刻む音につれて幕

×

時＝同日、午後十時半　場所＝道頓堀の街路

◇閉場と共に劇場から押し出された群集は、一しきり、西に東に渦を捲いて流れてゆく。

◇醉步蹣跚として手を組合した二人の青年、ジャヅの響き高く傳へるカフエーの中に消えると、どこやらから甲高い女の聲で……

「赤い灯、青い灯、道頓堀の、河面に集る戀の灯に何で、カフエーが、忘られようか……」

◇太左衛門橋畔の交番所前で、一人の警官が嚴格な顔して直立不動の姿勢をとり、ギロ〳〵とした眼を行人に注いでゐる。

紙上舞臺

大阪朝日新聞連載

貝・殼一平

吉川英治原作
六田甲二脚色

角座一月上演

大坂東本願寺横の新地

旅から旅へと流れ歩いてゐる娘水藝師白濱お千代を座長に持つ貝殼座の色あせたのぼりが風に飜つて太鼓の音が人の心をそゝり立てゝゐる。若殿菊太郎を尋ねて飛驒谷の居城を出て十數年久米川帶刀と牛田左傳の二人は今このあたりを通りかゝつた。折柄小曽請組の安井の仲間一平が江戸の役人青木と目明しすつぽんの定に追われて興行中の小屋に飛び込んだ爲一時は大騒ぎになつたが、一平を見失つて引上げて行くのを見送つてゐた久米川と牛田を呼びかけた老母は大騒ぎになつたが、一平を見失つて引上げて行くのを見送つてゐた久米川と牛田を呼びかけた老母それは双子兒菊太郎と一平の行方を旅から旅へと尋ね廻つてゐるのであつた、御堂内の鳩が樂し氣に啼く時女太夫お千代の袖に救われた一平が後を追つて來た主家の娘お加代と共にお千代の胸に何物かを殘して去つて行く。何氣なく通りかゝつた歩士、その右手には確に一平と同樣の黑子がある。それを認めた久米川、牛田の二老臣、すかさず矢部駿河守の遺兒菊太郎に相違なしと詰め寄つた。武士は澤井轉とのみ云つて靜かに二老臣が握る袂を拂つて去つて行く。

安井の家

先刻から大きくなつて酒を呑んでゐる男がある、新選組の密偵方山崎衛門である。

彼は從兄妹に當るお加代を戀墓してゐた。そして、折ある毎に彼女を口説いてゐたが、其の都度刎ねつけられてゐる。今日しも、澤井の行衛を探す爲め祕密の策を相談すると共に、江戸の役人が、彼等と同樣澤井を捕縛せんと活躍してゐるを告げ、先を打たんと種々劃するのであつた。而して、今彼等の間には、澤井を頂點として、山崎と青木を二邊とし、芹澤を底邊とする三角形が成立してゐたのである。此の爭鬪が何處迄進展して行くか——

或る小料理屋の座敷

先刻から親し氣に酒汲み交す二人の武士があつた。一人は澤井、一人は弟子丸太研齋、兩人は江戸在府當時の友人である。併し、研齋が、幕府方の密偵である事を澤井は知らなかつた。寧ろ、己と意を同じうする者として胸襟を開いて語るのであつた。

澤井は、江戸を經つて今日迄の辛苦を語る。（此處脚色者は新機軸を出した。從來の映畫に見られる、過去の物語りを、舞臺に腐心して完全に生かしてゐる）

赤坂山王權現の拜殿

祈禱の式に大奥からの代參として將軍の神文を捧げて參列してゐた中山扇子の姿が、町奉行與力青木鐵生等が神事を中止せしめた時消えてゐた、然も幕府の重要書類を昨夜盗み出して……

同社緣つゞきの部屋

扇子の方を探して青木等が、寢てゐる澤井を起し訊問するが、無論澤井の知る由もない。その時既に彼等の乘馬の一頭が紛失してゐた。彼等がその後を追つたとて間に合ふ譯がない、澤井は決然として立つた、非業の死を遂げた父への復讐討幕の先驅彼の腹は決つた。

中仙道の或る峠道

善光寺詣りの人達がちらほら通るその中を扇子を乘せた駕が急いで通る。青江左治馬に守られて白濱お千代の駕が同じ道を急ぐ、と後を追つて旅に出た青木とすつぽんの定が扇子の駕と間違へ呼び止めた爲めはからずも晝の街道筋に二つの白刃が激しくもつれ合ふ。

扇子の駕が急いで通る、久米川と牛田が通る、代官が大せいの捕手をつれて走る、と馬のたずなを握る澤井の手の甲に黑子を見た二老臣はハツト息を呑んで見送る。

或る土地の代官屋敷

松平主殿之介と僞稱して乘り込んだ澤井は代官を手中に丸め只管扇子逮捕を急いでゐる折、定の探策で彼女の後を追ふ事になる。

信州飯田近くの或る街道

扇子の駕が急いで通る、久米川と牛田が通る、代官が大せいの捕手をつれて走る、と馬のたずなを握る澤井の手の甲に黑子を見た二老臣はハツト息を呑んで見送る。

飯田町貝殼座の掛小屋

やう〳〵こゝ迄逃て來た扇子が澤井に捕えられる澤井はどこまでも松平になり切つて青木に京都送りの用意を命ずる。

時雨に煙る瀬田の橋上

旅にやつれた久米川、牛田の二老人は菊太郎を求めて通る、扇子を乘せた軍鷄駕が只一筋に京都へと急ぐ。

京都二條城多門の石垣下

澤井は大膽なる機智に依つて扇子を逃がす。

元の小料理屋

彼は、此の長物語りを研齋に聞かすのであつた。

阿彌陀池の境内

澤井一人を捕へるに二組の塊り一つは青木と定が引ゆる捕手の勢一つは山崎等と共に目血を光らす新選組の連中、研齋に誘き出された澤井は、研齋を斬り、隊士を倒したが遂に青木等の手に繩されこの騷動の幕一枚の彼方には、戀に狂ふた加代と一平が駈落の相談に血をおどらせてゐた。

洛外壬生の新選組屯所

山崎に見つかつて一平とお加代は戀の巢から引き出されて來る、江戸送りになつた澤井の軍鷄が屆けられる。その實途中で駕り殺しにするつもり——

壬生村近くのある路傍

夕暮の鐘が遠くになる頃、すつぽんの定が倒れてゐる、その傍に扇子がまだ煙の出てゐる短銃を持つて立つてゐる、逃て來る澤井轉を追つて新選組の隊士が來たが扇子の短銃と轉の劍の舞に倒されてしまふ。

伏見貝殼座の樂屋内

大政の奉還された明治二年、久米川老人から身分を知つた一平は母戀しさに敗戰の士山崎に追われ乍ら貝殼座を尋ねてくる。

お玉と一平の再會の喜び……東征軍の進行曲が近づいて來る。

伏見街道

山崎に追われたお加代がお千代の放つた一彈に助けられる。

澤井こそ久米川が生死の境を越へて探し求めてゐた矢部駿河守の遺兒の一人である菊太郎であつた只一ツ情緒を添へるお千代の働き、それは、お加代をソツと一平の傍に押しやるのだつた。

再び結ばれたる二人の手。

今年は午年に因み「馬の脚」について

……新春劇團へ呼びかく……

菅原寛

今年は十二支の午年にあたります。それに因んで、馬の出る芝居と馬の脚について、思ひついたまゝ述べたい。馬が舞臺にとび出すと、なぜか、見物は笑ひ出す。あれは作りものだからであります。後の樣子がおかしいからで。その中に這入る人間の足と、本物の馬の脚とは、膝の關節の折れ方が反對であるからおかしいのであります。いかに小道具の藤波あたりで、新工夫して、縫ひぐるみの巧妙を極めても、生きた人間が、その中に這入る以上は止むを得ないと思ひます。

先代の宗十郎が本物の馬を引つぱつて、花道に出たところ、粗忽して、とんだ見物の物笑ひとなつた試もあります。それはイキナリ、不用意に本物の馬を舞臺に上げたからで、馬といふ奴は厩の床板を踏むと、兩便をする習慣性があると見えます。ですから、舞臺の上を踏ませたから。遠慮會釋もなく、そこは畜生の情けなさ、厩と間違へて粗相をやらかして仕舞ふわけです。これは馬が惡るいのではなく。人間の不注意からであります。

何が彼の女でなく、何がかの馬をさうさせたか？

といふわけになるのです。かういふ馬の粗忽は。滑稽といふよりも、あまり眞に迫つて。寫實的で見た目にもくつきりとしません。やはり、作りもの、馬の方が、まだ〳〵愛嬌があつてそれが芝居らしくなつて興味の深かいものでありますまいか。

もし、將來、どうしても本物の馬を使はねばならなくなつたとしたら、まづ、舞臺專門の馬を養成する外はないでせう。不自然な縫ひぐるみの馬をやめて、然かし、そうまで寫實的にでなくともいゝと思はれます。

さて、一口に「馬の脚」と役者の極く階級のひくい人を、輕蔑して、今日まで、「大根」と同樣に、忌々しい芝居道の卑しい言葉の一つとして傳へられてゐますが、なか〳〵「馬の脚」と一概にけなしたり、輕視したりするものではない。なか〳〵修行の入るもので、前足の人も、後足に廻る人も、一身同體、抜き足、さし足、左右の開き、腹部から頭部へかけての律動。それこそ、一擧足、一投足たりとも、あだやおろそかに出來ない技術が、その道の神隨としてある。以つていかに馬の脚たる人の苦心のなるところを考へると、決して、あだや、おろそかに見のがしてよいものでありませうか。

馬の縫ひぐるみは、日本獨特の舞臺に於ける道具の一つであつて、外國では今頃になつて珍らしく、これを相應したものを作つてよろこんでゐます。

かの、ベッタ、オールの映畫を見た方は記憶されてゐるでせう。シドニー、チャップリンが、日本の馬の脚になつて活躍してゐます。日本では縫ひぐるみの馬は、決して珍らしくもないが、この映畫に出て來て。「馬の脚」が暴れ出ると、とても面白いと云つて、大變なうけ方をしたとの事であります。それは勿論人間が二人前後に這入つてゐることを認識してゐながら、百も承知して他愛なく愉快に感じたと思へます。そして、その頭部と後部とに切り窓を作つて、人間のつまり馬の脚になつた人物が、汽車の窓から顔でも出すかのやうに、出たりひつこんだりして、樣々な、ピエロらしい表情をするからでもありませう。

いづれにしても、今時、外國の日本の「馬の脚」が流行(?)したとは、一寸と面白い現象だと思ひます。日本の芝居のいろ〳〵な特異性を帶びたものを、そのまゝ、うけ入れてよろこんでゐるのは、三味線や、カッラ、鏡板、花道ばかりではなくなつてゆくことは、益々研究に價ひするものではないでせうか。

「馬の脚」の技術や由來は、こゝで悉はしく述べることは出來ませんが、馬の出る狂言を一寸と思ひ出すまゝ擧げますと、澤山調べるとありますが、まづなんと言つても代表的のものは、「鹽原多助」の狂言の中で、かの愛馬の別であります。明治廿五年歌舞伎座で上演されてから、今日まで名狂言の一つとして有名で、今の鴈治郎氏や六代目が得意の藝の一つであります。その外に「明智左馬之助湖水乘切」「初深雪佐野鉢の木」「大和橋の馬切」「熊谷出陣」「曲馬團の娘」「釋迦八相記」「大森彦七」「鈴ケ森」「小栗判官照手姫」「那須與市西海硯」などあります。

馬が中心になつてやる芝居はさう澤山ない。名馬物語は少ないわけであります。罪人が、いはゆるはだか馬にのせられて、刑場に出て來る場面は、あまり感心しません。義人とか或は花嫁が盛飾した馬上の姿は、見た日の淋びしさや、華やかなことよりも、劇的には効果な考へものでありますまいか。

外國でも、身代限りの不德をしたものは、同じ馬でも、あちらでは驢馬にのせて市中を引つぱり廻してあるくのは、一寸と日本に似てゐます。

——彼は馬に乘つた!!

といふ意味は、いろ〳〵にとれるわけで、勇士か、罪人か、その馬上の人間一つで、また馬の脚になる人も、つらひかなでありますと。

とあれ今年はぴん〳〵とはねる馬の年だから、ウンと芝居も景氣づけられて、昭和五年の新春劇壇に勇ましいイナ、キを上げて貰ひたいものであります。

（新春を迎えて）

文樂座新築に際して

加藤亨

文樂の人形淨瑠璃が、東京其他の各地巡業には、相當の人氣を、得つゝあるに拘らず、其の發生の地として、古來極めて因緣深き、大阪に於て、近來頓と人氣の振はざる事實に就ては、斯道の爲めに、之を眞面目に研究して見る必要のある事と思ふ。

大阪は、實に義太夫の本場であつて、文樂は人形淨瑠璃唯一の道場であるとから、文樂の番附の端くれに、虫眼鏡的の名前が乘つて居る樣な太夫でも、田舍では、立派に義太夫師匠の看板を出して、暮して行けるといふのは、之は義太夫界に對して、文樂座の有する特種の權威で、皆之れ先輩が努力になる光輝ある歴史の、反映に外ならぬのである。

顰つて義太夫節なるものが、大阪の人達に嫌がれて居るのであるかといふに、事實は全く反對で、かの素人義太夫界を通覽するに、滔々として、日に隆盛の勢を示し、義太夫を唸る幾萬の「ファン」が、日々夜々、曰く何々會、曰く何々連中とて、年中を通じて義太夫會を催し、時に數日に亘つて、素義大會を催し、その盛んなるには驚かざるを得ないのである。

然るに、何故に義太夫道場たる文樂座の興行が、今一段と振はぬのかと云へば、夫れは文樂内の太夫並に三味線の藝術の問題が、その最大原因であるまいかと思はれる（人形に對する所感は別に發表することゝしたい）

文樂座開場・初興行
——人形淨瑠璃——
初日一月一日
毎日三時開幕

前「**伽羅先代萩**」竹の間より床下まで
竹の間の段＝政岡（駒太夫）八汐（文字太夫、沖の井（和泉太夫）小牧（鏡太夫）鶴喜代（常子太夫、千松（小松太夫）忍び（播路太夫）腰元（龜久太夫）三味線（淺造）人形妻沖の井（玉七）妻八汐（玉治郎）鶴喜代君（紋司）一子千松（榮三郎）政岡（文五郎）女醫小牧（扇太郎）忍び（市松）
御殿の段、切＝（人形土佐太夫）三味線（吉兵衛）人形乳母政岡（文五郎）、鶴喜代君（紋司）一子千松（榮三郎）妻沖の井（玉七）妻八汐（玉治郎）榮御前（政龜）女醫小牧（扇太郎）
床下の段＝（鶴尾太夫、三味線（猿二郎、友若）人形原田甲斐守（玉松）松ヶ枝節之助（玉幸）
「**高砂三番叟**」
千歳（古靱太夫、翁（津太夫）、三番叟（錣太夫）三番叟（大隅太夫、三味線、道八、團六、歌助、叶、勝平、猿糸）引抜柱立萬歳＝（相生太夫、鳥太夫、越名太夫、源路太夫、辰太夫、長子太夫、文太夫）三味線（勝市、芳之助、友之助、友造、友平、綱右衛門）人形千歳（紋十郎）翁（玉治郎）三番叟（榮三）三番叟（文五郎）萬歳（榮三）才藏（文五郎）
中「**双蝶々曲輪日記**」
橋本の段、切＝（津太夫）三味線（友次郎）人形嫁おてる（扇太郎）下女おまつ（文之助）駕屋甚兵衛（榮三）駕屋太助（文作）山崎與五郎（紋太郎）傾城あづま（文五郎）橋本治郎右衛門（玉松）山崎與次兵衛（玉治郎）
次「**平家女護島**」
鬼界ヶ島の段、切＝（古靱太夫）三味線（清六）人形俊寛僧都（榮三）丹波少將成經（政龜）平判官康頼（玉幸）丹左衛門尉元康（門造）瀬尾太郎（玉松）海士千鳥（文五郎）郎黨大ぜい、雜色大ぜい
切ダ伊左衛門「**曲輪文章**」
吉田屋の段＝夕ぎり（錣太夫）伊左衛門（つばめ太夫）喜左衛門（貴風太夫）おきさ（富太夫）太鼓持（千駒太夫）三味線（新左衛門

何種の興行と云はず、あるものは、時流の趣好に投じて之を迎合し、所謂際物と云ふやり方と、他のものは、眞正の大藝術の力を以て、見物を牽きつけると云ふやり方とがある、而して義太夫節なるものは、決して時流の思想に迎合し、其の變遷推移に應じて、容易く動く樣な、浮薄なものでなく、古人の遺訓と、其の藝風を尊重して、之を翫味咀嚼したる上、自家藥籠中に容れて後、自家藝術の特質を以て、大衆を引入れるべく努力すべき、第二の部類に屬するものである、此の點が、近來の流行語たる古典藝術の眞價で、深き深き趣味の存する所である。

名人の至藝より得たる、力强き感應の記憶と云ふものは、實に驚くべきもので、一生涯不滅で忘れぬのみか、折にふれ、時に臨んで、此の追憶の感興は、宛ら壇上に於ける古人の俤が、髣髴たるものがある位である、嗚呼藝術の力又偉大なりと云ふべしである。

攝津大掾の寺子屋の、門火を賴み賴まるゝの落しでは、常にホロリとさせられ、酒屋のお園のサワリでは、情調纏綿、若き初妻のやる瀨なき、悲歎を想ふて常に泣かされたものであるが、こんな語り口も今は絶無となつた事を、惜しみても尙餘りある事である。

自分は、若い學生時代から、義太夫節には、深き憧憬をもつて居て、東京に留學中暑中休暇果の、九月の初旬には、文樂の興行が、まだ初まらぬので、其初日の開くのを待ち兼ねて、聞きに行つて、それから上京した事もたび〳〵あつた樣である、其時分には、見物の中にはよく義太夫の五行本を披いて、熱心に聞いて居る觀客を見受けたが、之等の人達は云はゞ、文樂の太夫の語り口を聞いて之を參考に資したので、文樂を斯道の模範的權威として、之を尊重したのである、然るに今日の文樂にはこんな熱心な見物は段々其影を潛めて、見受けられないのは、一に聽衆の趣味が低下したものとのみ簡單に片付けてしまふ問題ではなく、此の一事、又太夫三味線共に、眞劍に

考慮しなければならぬであらう。

終りに、余が記憶を辿りて之を先輩に糺し、文樂諸公の一粲に供しやうと思ふ。

文樂座が稻荷より轉じて松島の今の八千代座の所に移りて、柿葺落をやつたのは、明治五年一月と云ふ事である、其後興行が年と共に漸次振はず、日々の缺損で、當時の座主植村氏は到頭維持に困り果て、遂に閉場と迄決心したそうである、其の當時、越路太夫（後の攝津大掾）は、植村座主と番頭の渡邊と鳩首謀議の結果、越路は今後三年間無給金で働かうと申出て、上下心を一にして植村の御寮人（此人京都の出にて藝事殊に舞踊に堪能で舞臺の振附などにも心をつけしと聞く）自ら上つ張を着て、お客の火鉢を運ばれしとは、當時之を目擊せし實話である。

上下一致の効空しからず、殊に越路が無給金で迄働くといふ事に世間の同情が集つた爲め、逐次頽勢を挽回して、御霊文樂新築移轉（明治十八年）の前年の如き、越路の國性爺樓門が呼物で、六十日間大人の打通しであつた事は、文樂衰微凋落の當時にあつて、今も尙同好が語り合ふて、故人の人格を偲ぶ逸話の一つである、實に至誠の熱情鐵石を鈴かすと云ふ、人格の發露であらうと思ふ。

玲瓏玉の如く調べる聲調を以て、錦繡の扉を披きなすが如き攝津大掾の藝風に對し同じ春太夫の門より出で、切瑳奮勵遂に堅實無比と、金石相攘ちて火花を散らさんばかりの藝風を以て、之に拮抗して人氣を集中せしものに大隅太夫あり、前者は文樂を本城とし、後者は稻荷、明樂、堀江と轉々して最後に近松座（今回改築文樂座）にありて、自ら一家の重きをなしたものである。

此兩者の全く異れる藝風に對し、共に團平が、其の三味線として重きをなした事は三味線の神として崇められる、所以であらうと思ふ。文樂の松島時代には、越路は芝居が終て、後、毎日團平に侍して、己が家に歸り晩餐を饗じて卓を共にし、團平を師と仰ぎて、其の藝談を聞きて、秘訣を索るに腐心したといふ事である、大隅太夫は腹の

猿太郎、友衛門、清次郎）人形藤屋伊左衛門（扇太郎）吉田屋喜左衛門（門造）女房おきさ（玉七）扇屋夕ぎり（紋十郎）太皷持松助（玉市）太皷持由八（光之助）かむろ（文二郎）仲居大ぜい、吉田屋若い者大ぜい

昭和四年の

劇壇清算

昭和四年一月より十二月まで道頓堀各座に於ける上演狂言の總締めすると、中座、浪花座、角座、上半期の辨天座及び千日前樂天地を通じて實に三百二十九種の脚本がある、そのうち喜劇（五郎、淡海、家庭劇、貞樂、五九郎）が約半數の百四十二篇を占め、次いで新作物が百十三篇、歌舞伎が四十八篇、所作事が二十篇、レヴュー、オペレットが六篇と言ふ數字である。

新作物中には十篇の新聞連載物の脚色があり、その他小說の脚色などで大いに賑つたまた歌舞伎の中には、三十三篇の院本が上演されてゐる因に新作物の作及び脚色者の一覽表は左の如し。

大森痴雪（十）田中總一郎（九）鳥江鉄也、瀨川春郎（各八）食滿南

差當つての注文

八木善一

皮が撚れて臟腑が轉倒する迄の猛練習をされて大成した人である、此の兩者を仕立て上げた所に、團平の尨大なる藝術を發見するので、今の義太夫界を通じて、この心掛の太夫もなければ、之を率ゆる三味線もなからうと思ふ。

今の文樂諸公よ、新文樂座は松竹會社の財力に依つて新築成り、來る二十六日を以て開業の式を擧行せられて目出度い次第であるが、此の新裝の輪奐に立籠つて、適れ更生的發奮を以て、模範的義太夫道場たる實を辱めざる覺悟と意氣ありや、願くは、故名人達の遺訓を遵奉して、期待に副ふべく、古典的なる鄕土藝術の爲めに、一層の努力を、希ふて止まない次第である。

（昭和四・十二・二十三）

絢爛華麗、我が鄕土藝術の殿堂は美々しく完成されました。「新文樂座の感想」に就て——は別段申上ぐべき事も御座いません、要は如何にして新文樂座を保護すべきかが何よりの問題だらうと思はれます。

私の注文は二つあります、第一は「時代に伴ふ內部の傳統的習慣の打破」と第二は「大阪の素人天狗——」に對する希望であります。

「內部の傳統的習慣の打破」といつたつて根本的な改革を叫ぶのではありません、太夫、三味線の持場に就ての改善案でカイつ

北（六）中井泰孝、門脇陽一郎（各五）長谷川伸、金子洋文（各四）福隅一孝、額田六福、德田純宏（各三）津村京村、菊池寛、岡本綺堂、岡鬼太郎、川村花菱、行友李風（各二）松本有義、瀨戸英一、澤田正二郎、佐藤明豪、岸田國士、益田太郎冠者、渡邊霞亭、高安月郊、田島淳、幸田露伴、中村吉藏、大關柊郎、福地櫻痴、松尾松翁、武者小路實篤、吉田德二郎、音羽六藏、村田和緒、大西利夫、雄島濱太郎、水谷薫、大倉桃郎（各一）

午歲の俳優

仕事の上では絕對に齡の事を考えない、また考へてはならない俳優の年齡は、いつも推定にまかせられて一般にはその事實が知られないのが普通である。さうした世界の人々の年齡調べも面白いものだが、午歲の新年に因んで本年の干支に當つて生れた人々を調べる事にする。

先づ中座の東西合同大歌舞伎に出勤の人では、明治十五年生れの片岡我童を筆頭に二十七年生れの嵐吉三郎、三十九年生れの中村扇

まんで申ますと、千本櫻の鮓屋だの一の谷の熊谷陣屋、さては伊賀越の岡崎といつた長丁場もの、大幹部だからとて丸一段を獨占させぬ事です、テムポを尊ぶ時節。

時間の經濟と新進登用の實を擧げる爲めに、これを二分して所謂目下の三巨頭に次ぐ人々に其半分を與へる事です、舊い思想の義太夫黨は或は私を異端者のやうに罵るかも知れませんが、新時代に魁らんとする新文樂座ではこれ位の改革は寧ろ當然の事だらうと思ひます。

太夫は一段丸ごかしで語るのを以て本分とし、誇りとするやうな說を固持する人は「時代」を知らぬのも亦甚しいといはなければなりません、故攝津大掾、大隅太夫越路太夫のやうに其人一人で文樂座を脊負ふて立つやうな名人、巨匠が現はれるまでは私は飽までも此說を主張します。

次ぎは義太夫をモット普遍的に――讀み難い五行本から解放して分り易い活版刷りに、所謂パンフレット式に宣傳して（せめて文樂座の狂言丈けでも）入場者に與へてこの千古不滅の名文章を一般的に玩味させてやる事です、文樂座の愛好者――擁護者は殖えこそすれ減りはしないと確信します

對外的には鄕土藝術といふ世界的な誇りを持つ人形淨瑠璃に對して大阪のお素人衆（斯道の）は餘りに無關心過ぎます「文樂座の太夫で誰を聽きます？」とテンデ問題にしないのは情けない次第です、どんなに詰らなくつても玄人は玄人です、我が鄕土藝術の爲め、文樂座――否人形淨瑠璃を保護してやる好意上、犧牲的に十數萬の素人天狗が每興行交替に見物してやつたならば文樂座も斯うは落ち目にもなりますまい。

尤も後援を吝まない代り一座を嚴格に監視して鋭意向上啓發に努力し以て名人上手をふんだんに作つてやる事です、昔は素人でありながら玄人跣足の名人があつたといひますからネ。

先づ差當つての感想はこんなものです、文樂座の人々はわき目もふらずに我が鄕土藝術の爲めに精進し、これを助長するお素人衆が眞面目に愛撫保護する事によつて新

中村鴈之助、實川延太郎等。越にて大正七年生れの義直、章景があり、お隣りの浪花座關西大歌舞伎では、今度淺尾奧山を襲名した明治二十七年生れの關三郎がある。次に角座の新聲劇では明治十五年生れの鈴木默堂がたつた一人。それから目下京都南座に開演中の第一劇場では、男優では一人もゐないが、女優に、明治二十七年生れの三好榮子、三十九年の香取幸枝がある。同じく京都、京都座に開演中の家庭劇には一座切つての花形澁谷天外が明治三十九年生れを始め十五年生れの曾我廼家胡鳥、二十七年生れの曾我廼家吾斗及び女優側では三笠美代子がある。飛んで神戸松竹劇場に開演中の淡海一派では志賀廼家老松、三十九年生れの宮部千代子同じく吾妻龍子の三人がある。また東京新橋演舞場開演中の曾我廼家五郎一座には十五年生れの曾我廼家二三丸、同じく曾我廼家蝶次がある。尙新派の久保田淸も明治十五年生れの午歲であるが、東京の明治三年の梅幸、幸四郎、十五年の三津五郎などに比して關西には若手連が多數を占めてゐる模樣である。

文樂の『筈』

中井浩水

新文樂が出來た、人形淨るりを何ケ月か使用してその他はいろ〳〵なものをかけるとかいふ噂、その人形淨るりには新作新曲も用ゐると聞いてゐる、新曲が必ずしも詰らないとは云へまい、好いものでさへあれば結構、面白いものさへ見せてくれるなら文句はない筈、處がこの筈といふ奴が中々思ふ通りに行かぬものでこの『筈』が『筈』で通用するなら天下の事易々たるのみ、せめて新文樂だけには『筈』がうまくやつてくれと神樣にお願ひして置かう。

◇

文樂といへば地方客が國への土產に見物その他は大抵年寄「辻番は生きた爺のすてどころ」とやら古川柳にある、文樂と辻番小屋を一緒にするのは松竹の鄕土藝術保存の大悲願に對して甚だ禮を缺いた次第だが有體にいふとこれ迄の文樂は年寄客が多かつた、そんならどうすれば好いか、サア…

◇

玄人臭い人に聞くと今の文樂は三味線が多くつて太夫の少ない時代ださうだ、又昔のある時代には太夫が多くつて三味線の少いこともあつたさうだ、どちらも困るが今日のやうに太夫の乏しいのも亦御難、素人は三味線よりも太夫、位よりも聲に耳傾ける、だから今が最も歩の惡い文樂、そこで太夫の新進を大いに養成すべしといふ叫び

――中座の總配役――

中座の鴈仁合同大歌舞伎は二日初日、その開幕時間は初日、二日目午後二時、三日目より午後三時狂言は、一番目「名馬」中幕「寺小屋」「南部坂」新作「籠の梅」二番目「新口村」大喜利「勇春駒」「海邊の巖」等で、本極り役々は左の如し武部源藏、大石內藏之助、龜屋忠兵衞（鴈治郎）山內猪右衞門一豐、松王女房千代（福助）忠三郎の女房、春駒の男（長三郎）野中主計、御臺園生の前、腰元お梅菊池三郎高國、針立の道庵、參宮の男（吉三郎）參宮の男（八百藏）百姓太郎作、參宮の男（成笑）論長の家臣、百姓麥作（成三郎）百姓十作、平家の郎黨、參宮の男（雀）池田勝三郎、捕手早太、參宮の男（鴈）近侍新十郎、參宮の男（鴈之助）巫子お浦、涎くり與太郎、河越次郎定淸、疱瘡子、參宮の男（成太郎）木下藤吉郎、女房戶浪、戶田局、傾城梅川（魁車）老爺、でつち安松（章景）平家の武士、參宮の女（魁童）粟屋越中守、參宮の男（升藏）山田三左衞門、百姓畦作、捕手の小頭（市昇）瀧川彥左衞門、百姓畑作（右左次）信長の家臣、百姓音作（齋五郎）柴田修理亮、澁川

が起る、年寄りの太夫は「とてもこれからの若い者に本當の修業はでけまへん」といふ、それなら自滅だ。

◇

興行法についてもいろ〳〵とこれ迄から議せられてゐる、安くして時間を短くといふ說が多いやうだ、安いに越したことはなく時間は短いのを第一とする、組もやむを得ないからう、好いと思ふことは出來るだけやるが好い、どうしても衰へるものなら仕方がない一年に六度やるものを三度にするが好からう、又泣いて馬稷を斬らねばなるまいし、手をちゞめてもいくら改善して見てもどうしても時代にそぐはぬもの、人心を離れたものならその時はやむを得まい死中の活を見出すのは新文樂の一大事であらう、座員の覺悟も一と通りや二た通りの腹帶のしめかたではいけない。

◇

人形をやめて素淨るりにといふ人もあるとか聞いてゐるが之れは反對だ、人形は尊重して貴ひ度い、鴈治郎の身振りを眞似た治兵衛などはとかくの論議もあるが後世の爲め鴈治郎の型を移した治兵衛の一つ位はあつても面白からう、外國からお客がくるその外人に文樂の人形を見せてゐる白井さんの寫眞などが折々新聞に出る、文樂の人形はこの意味で大いに國際的の値打ちがある、移る時代の力で人形淨るりの存立が脅かされる時がマア假りに來るとする——願はしいことではないが——その時に淨るりの爲めに人形を棄てるか、もしこんなハメに立ち到つたとしたら、人形も淨るりも共に相對死をしてくれと云ひ度い。

◇

年寄りはすぐに「昔は——」といひ出す年寄りは皆「昔」といふ夢の國をもつてゐると私も若い時分に冷やかに年寄の昔話をきいたものだが頭が禿げてくると私の腦裏にも「昔」が生れて來た。「今の文樂」のことをかいてゐるとフイと私の腦裏に「昔の文樂」の影がさして來た、昔の文樂の影のうちにあの越路太夫の胡麻鹽頭が浮んでくる、燒けた御靈文樂の越路の樂屋、それは狹い部屋だつた、攝津大掾の訃音に接して私は文樂に越路を訪うた、二人が挨拶しようとした、部屋は狹い東側と西側とに相對して座つて頭をさげようとした越路と私との頭がゴツンとかち合うた、越路の頭は石のやうに堅い、バツと眼から火が出たやうな氣がした。

◇

私の頭も堅かつたらしい、越路はニヤリとしながらソツと頭をさすりながら

「どうもとんだことで」

と師匠の死を悲しんでゐるのか、頭をかち合はせたことの斷りをいつてゐるのかわからない不思議の挨拶をしてゐた、その後文樂座の火事の時、逸早くかけつけた私は烟を潛つて燒殘つた本家茶屋の軒下に立ち火氣にほてり乍ら炎を吐く文樂座を眺めた時亡き越路と頭をゴツツリやつた部屋はあの邊かと目をやつたがそこからは渦卷く黑烟を吹き出してゐた、「昔」の夢はやつぱりなつかしいものなる事を知つた。（畢）

賀正

松竹宣傳部

鳥江銕也
田中牛耳郎
成山桂三
大橋照夫
福井賢次郎
住田冬一
田中滿彦
西田宏
松本泰三

播磨（鴈正）百姓李兵衛、同五作後藤盛長、供男與助（九團次）郎黨逸平太、百姓虎作、角力取雲見山（箱登羅）春藤玄蕃、農夫甚五兵衛（市藏）織田信長、清水一角（延若）娘梅ケ枝、春駒の男（扇雀）後室瑤泉院、本三位中將重衡、春駒の男（我童）梶原平次景高、參宮の女（ひとし）一子小太郎（義直）參宮の女（我久之助）平家の武士、參宮の女（我久三郎）松宮玄蕃、源氏の武士（松壽）女房おくろ、參宮の女當若）女房おいね、參宮の女松（太郎）眞海法師、下男三助（長太夫）寺坂吉右衛門、梶原源太景孝（我當）舍人松王丸、梶原平三景時、父親孫右衛門（仁左衛門）

——浪花座の總配役——

關西大歌舞伎は元旦初日、「鎌倉三代記」「三人片輪」「春日局」「慶安太平記」の四種を上場する、初日二日目は午後二時半、三日目より午後三時半開幕となるが、此度の本極り役々はたの如し。

春日局、德川家康、松平伊豆守（福助）三浦之助、壁太郎助（長三郎）酒井雅樂頭、忠彌の女房おせつ（霞仙）大名船岡主馬、稻葉丹後守（政治郎）侍女貴船、稻葉の次男七之亟（延太郎）秀忠、御臺所、仲間仁助（德三郎）北條息女時姫、啞女おまき、御小姓梅の戸（扇雀）百姓藤三郎實は佐々木高綱、盲人半之亟、二代將軍秀忠（右團次）土井大炊頭、仲間逸平（橘三郎）家來要人、靑山伯耆守、仲間三次（駒之助）讃岐局廣敷侍、中老藤浪（卯之助）捕手頭高瀨采女（芦鴈）阿部小平次、和姫君（右若）詫間吉藏實ハ曾根五郎、浪士勝田彌三郎（關三郎改メ奥山）嫡男竹千代（達雄）三浦之助母、老女高圓（延女）阿波局、侍女松尾、ねはしたお辻（福太郎）在所嬶おはた、捕手頭鬼頭主水（美鴈）奥女中安積、松平臣森戸右近（右文次）役手代重兵衛松平臣石川八彌（延郎）石川刑部廣敷侍、浪士駒飼五郎平（右田三郎）藤三女房おくる、本多上野之介、烟酒屋半六（秀郎）富田六郎、弓師藤四郎（大吉）稻葉佐渡守、丸橋忠彌（延若）

× × ×

瀟洒枯淡の裝幀に、燦たる
郷土藝術の精華を蒐輯！

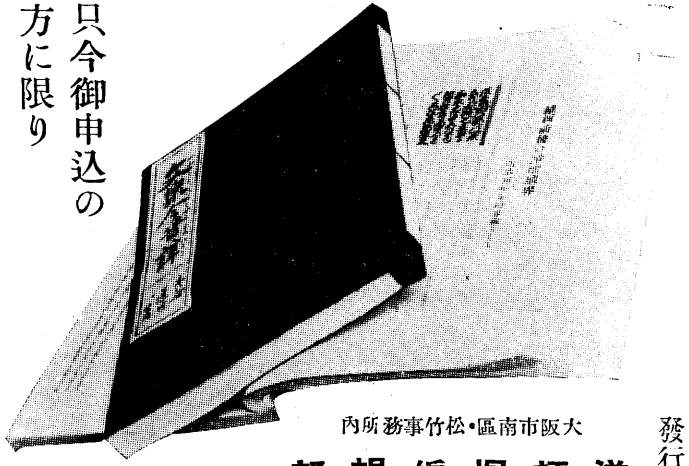
最新版

文樂人形考譜

木谷蓬吟氏著

◇和綴四六倍版 ◇定價金參圓
◇紙數二百五十餘頁 ◇送料金拾錢

只今御申込の方に限り
特價 貳圓五拾錢



發行所 大阪市南區松竹所事務所
道頓堀編輯部

新時代に最も適した

月經閉止の手當法

安全に通經する權威ある流經劑
推奬された副作用なき優秀な藥

正しい月經閉止のお手當

毎月あるべき月經が色んな原因でついぞ經驗しない月經不順、月經困難、又は月經閉止さへ見るのであります。こうした病症に陷入つた婦人は悶えもがく許りで手當を遲れたり、迷ひ勝です。しかしこれは全く恐るべきで重態となつて手術を騒がれても無駄でせう。輕い間に治療しなければ取かへしのつかぬことになります。婦人に最も大切な月經の順調を計るため正しいお手當を一時も早く試みて御安心の出來るやうなさいませ。

注意すべき流經藥の選擇

萬一月經が閉止したならば姙娠でないかぎりは病氣ですから直ちに手當をすべきですが、世間には流經藥の惡用を目當てに賣りつける不道德者があり、常に當局からも監視されてはゐますが心弱い婦人の常としてその穽にかゝる人が澤山あります。誠に寒心に堪えない許りか、副作用などで思はぬ災難に合はないとも限りません。こゝに最も注意を拂ふべき流經藥の嚴密な選擇が肝要であります。

信頼出來る効果著しい藥

茲に推奬出來、從つて充分信頼するに足る斯界の最高權威とまで賞讃されてゐるのは西山研究藥院の流經藥であります。この流經藥は新時代の要求に叶つた新しい服藥で、しかもその效果に至つては他の比較でないほど優秀であります。毎日感謝と歡喜に滿ちた書狀が日々屆けられてゐますもつとも公開こそ出來ませんが、正しい流經を見ることは不思議なほどです。素人が使用しても安全な藥で先づ同藥院の流經藥は他に求め難いと申しても過言ではありません。寢る前の一服朝の滿足といふモットー通り安心して經流の目的が達しますこの藥の優るのは絶對副作用なくしかも効果著しいことです。閉止五六ケ月でも僅かの服用で見事に流經の目的を達します。

特に月經に關する御相談

他藥で効ない方や始めて手當する方は京都市北野天神鳥居前西山研究藥院西山千代宛又は東京市麹町區紀尾井町三(電話麹町六番)(第百銀行横濱川崎)東京西山研究藥院宛、訪問又は通信にてお問合せ下さい送藥をお急ぎの方は送料切手三十錢封入の上閉止期間と年齢を記入申込まればそれに應じた説明書と藥品を直ちにお送り下さいます。

尚西山研究藥院の流經藥が既に紹介されてから日々求める方が多いため最も確實な信用ある支店を左の各地に設置されましたが誠に親切で便利もよろしいので大評判です。御利用遊ばせ。**小樽市**花園町第二大通花ノ湯横西山研究藥院北海道繹太支店。**横濱市**神奈川區幸下電停前西山研究藥院横濱支店。**名古屋市**東區南外堀町)大津町交叉點西南側)西山研究藥院名古屋支店。**大阪市**北區曾根崎新地演藝場西ノ辻西山研究藥院大阪支店。**神戸市**須磨妙法寺川電停西山側西山研究藥院神戸支店。**廣島市**東本川(元柳町)西山研究藥院廣島支店。**福岡市**大名町電停酒入西山研究藥院。最寄になき場合は近い店にお求め下さい

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

桃谷印刷株式會社

電話天王寺(77)一二六七〇番
一二六七一番

新春とともに新人起つ

新興演劇

一月一日發行・創刊號內容

—戲曲—

小石一つ(一幕)……森田信義
放蕩息子(一幕)……田中總一郎
隱れた「馬鹿」(一幕)……豐岡佐一郎
正木奬學賞(二幕)……山上貞一
侘しき人々(一幕)……野淵昶
刺客往來(一幕)……鳥江鉄也

—隨筆・小論文—

久々知村行……(山上)
演技はどうなる?其他……(野淵)
論爭が欲しい……(森田)
曝露形態より容觀的形態へ……(豐岡)
編輯後記……(四人)
表紙繪・カット……森亶次郎

菊版壹百頁・定價金參拾五錢

發行所 大阪市東區船越町二丁目 新興演劇社 電話天王寺(77)一二六七〇番 振替大阪一二二八四四番 東三四四番

◆技術優秀價格低廉
寫眞銅版
亞鉛凸版
プロセス平版
多色刷原版
電氣版
大阪市東成區大今里町五五九
吉谷寫眞工藝所
電話東一五七一番
◆期日迅速正確

文樂のお話

人形淨瑠璃といふ言葉のかわりに「文樂」といふ簡單な言葉で、いつの間にやら云ひ慣はされることになつてゐるわが鄉土藝術、世界にタツタ一つの文樂座、三百年に近い歷史を有つて、而かも其姿を變へずに今に傳はり、科學萬能の現代に、超自然的な面影を彷彿してゐるといふのは、まことに稀世のことゝ云はねばならない。今度佐野屋橋畔に新らしい文樂座が復興した機會に、いつたい人形淨瑠璃が何故に文樂の代名詞をもつて呼ばるゝに至つたか、文樂座とは、いつたい何時の頃からの劇場か、それ等についてすでに人形淨瑠璃の發達史を御承知の御方には用のない話であるが、まだ御存じのない方も澤山にあるであらうと思ふから、あまり遠い昔のことは、さし措いて、文樂座の起源から現代に至るまでの、あらましの要項を、今度出版された木谷蓬吟先生の著「文樂今昔譚」から借用して、お話を進めたいと思ふ。

◇

貞享、寶曆、といふ年代に、竹本義太夫、近松門左衞門、の兩名によつて、義太夫節といふものが確立され、次第にこれが道頓堀に盛んになつて、爾來百餘年、澤山な名人や巨匠によつて、さま〳〵に工夫を積まれ、立派な綜合藝術の形を整へるまでには、それは一年かゝつても話し切れないほどの話があるが、それは暫らくお預りとして置いて、すぐ文樂座の起源へと話を飛ばすことゝする。

◇

やう〳〵完成された人形淨瑠璃が、寬政、享和の頃になると、その時分、道頓堀では、西の芝居、若太夫の芝居、竹田の芝居の三座北の新地の芝居、北堀江市之側の芝居、平野町御靈境内の芝居、などが市中に散在してゐて、完成された藝術の餘澤を受けて繁昌してゐる。そこへ淡路の假屋から、此大坂へひよつこり現はれて來て、同じやうな人形淨瑠璃の興行をした男がある、それが植村文樂軒（本姓は柾木）で、とりも直さず文樂座の元祖である。最初の興行地は、高津入堀

の高津橋（現今高津四番丁）南詰西の濱側である。年月は明和と云ひ天明とも云ふが確かでない。またどんな風な興行狀態であつたか、それも解らないのだが、事實には違ひない。文樂軒といふのは此人の素人淨瑠璃としての雅號であつて、此人の養子である二代目の樂翁といふ人の名に因つても、文樂といふ名が起つたわけである。勿論最初は文樂座などゝは云はず、文樂軒の芝居と號してゐたのである。

◇

この二代目を襲いだ樂翁といふ人が、相當の理解もあり、可なりな腕利きであつた爲めに、此人の經營にかゝる文樂座なるものが次第に隆盛になつて來て、文化九年一月から博勞町稻荷の境内へ移つて、また一層盛んに興行をした。その興行の狀態はどういふ有樣であつたかといふことは、その狀を想像するにあまりある話があるから、それを序に述べて見る市中の多くの淨瑠璃芝居に超越して隆盛を極めてゐる文樂座に取つて、こゝに突如として外敵が現はれたのだ、商賣が繁昌すると商賣敵が現はれるのはよくあることだが、これは少し類が違ふ。恰ど天保八年の頃のことである。而かも文樂の芝居のその同じ境内に（文樂の東の芝居に對して北の芝居）對立して「說教讃語座」といふ異樣不可思議な一派が現はれて、競爭興行を始めたのである。名はこんな變テコな名であるが、内容はやはり同じ人形淨瑠璃なので、而かも當時の名ある太夫や連中が揃つてゐるのだから、文樂に取つては由々しき大敵であるには違ひない。なぜに、かういふ異樣なものが現はれ出したのかといふと、文樂の隆盛を羨んだある策動家の一派が、斯道の盲昧につけ入つて、次のやうな一狂言を書いたのである。

◇

淨瑠璃の濫觴は蟬丸の琵琶に說教節などを取り入れて作つたものであるから、由來淨瑠璃の業に從ふものは、關の清水の蟬丸宮の口宣（許可）を得てゐなければならない。この手續を經て居らないものは、今後一切その業に從ふことを許されぬ、だから當業の太夫三味人形其他一切の所屬者は、わが說教讃語座の配下であつて、讃語座の命令以外の行動を取つてはならぬ。とかういふ風に、なんにも知らずに淨瑠璃道泰平の夢に馴れてゐる一同を威嚇したのである。さうして、何處から手に入れたのか知らぬが、誠しやかに、こんな書付けを振り廻はして、お前達はこんな由緒書を持つてゐるか、持つてゐなければ、それこそ、淨瑠璃を語る資格などは無い、とかういふのである。誰がこんな由緒書を一々持つて商賣をしてゐるものゝあらう筈がない、だから當業者の驚きは大變だつた。その由緒書なるものをちよつと寫し出して見ると

說教者由緒

關清水大明神蟬丸宮

別當近松寺

山城國愛宕郡日暮小太夫名跡　唯重

右以唯重依願繼目所補太夫號仍而如件

正德二壬辰九月二十八日

正滿講師
淨密講師
淨榮講師

說教者日暮小太夫唯重

神や佛のことゝ云へば、醇朴な當事の人々はすぐに驚いてしまふのに、無理のないところはある。そこへ付け込んだのが此一派の人々なのである。蟬丸の琵琶に說教節を取り入れたのが淨瑠璃のそも〳〵であるには違ひない、而し義太夫節といふ大完成を遂げた斯道の恩人がある以上、もしも義太夫神社があるなら、そこからお札が下がるのが當然である。これではテンデ筋違ひである、だが多くの人々は、そんな歷史的な事實を知らなかつたから、驚き慌てゝ、その配下へ馳けつけて行くものが澤山に出來て來た。ところが、文樂座の連中の多くは直ちに、こんな嚇し文句には乘らなかつたのである。といふのは座主の文樂翁が相當に知識もあり、理解のある人であつた上に、長門太夫などゝいふよく事理を辨へた頭株の太夫もあつた爲めに、容易にこんな手には乘らなかつたのである。だから讃語座の方もこゝばかりはちよつと手を燒いた、その揚句が遂に文樂座對抗の威嚇興行といふことにまで立至つたので、傍から見れば面白い對戰であつたに違ひない。

◇

讃語座の方では、文樂以外の手合ひから、うま〳〵と抱き込んだ連中を集めて、兎も角も堂々の陣容をもつて、櫓旗を揚げたのである。その當時の番附を見ると、兩軍の陣容があり〳〵と解る。

「文樂座」軍。

（太　夫）長門。住。重。勢見。以下。
（三味線）仙左衞門。勝右衞門。宗六。
（人　形）金四。辰造。辰五郎。

「讃語座」軍。

（太　夫）三光齋。組。筆。鐘。以下。
（三味線）彌七。燕三。以下。
（人　形）兵佶。千四。文三。以下。

なか〳〵立派な對戰である。そこで取り敢へず寄せ手の讃語座軍が十月十七日を期して初日の火蓋を切つたが、文樂座は態と自重して十一月初旬に初日を出して應戰し、こゝに双方火花を散らして戰つた。さうして戰爭は十二月まで繼續されたが、文樂の方からは、下つ端の連中とか出方などいふ兵

卒どもから、捕虜になるものが出かけたりしたが、すでに早く、此一件を西町奉行所へ訴へてあつたから、十二月初旬に漸やく、その裁決が下つて、當然文樂側の勝となり、讃語座の策士連は、この興行が終ると同時に、まるで妖魔かなんぞのやうに、そのまゝ影をひそめてしまつたのである。正義は遂に勝つた。それも理解ある文樂座の善戰よく効を奏したわけであるが、こんな試練を經て、文樂の方はます〳〵世人の信用が高まつて、次第に繁榮に赴くことになつたのである。

◇

かうして、やれ〳〵一安心といふ間もなく、五年を經た天保十三年になると、こんどは、ゆら〳〵と來た大地震のやうに、せつかく築き上げた信用も地盤も根抵から覆へされねばならぬ、社寺境内興行禁止のお沙汰である。文樂座は早速、お布令によつて櫓旗を捲いて引越しを始めた。(引越し先から其後の狀態は追々に話すことゝして)こゝに、この天保の改革なる、水野越前守の改革令といふものが、どういふ風に藝人社會を驚かしたかといふことをお話しよう。

◇

これは封建制度の昔のことだから、とても現今の濱口内閣の緊縮政策のやうな手緩いものではなく、ずば〳〵と小氣味よく墮眠を破つて行つた。風紀振肅と奢侈を戒めるのが目的であつて、歌舞伎芝居、人形芝居、その他あらゆる藝人社會へ向つて、寧ろ嚴酷苛察な禁令を下したのである。それは無論個人的な日常生活にまで及んでゐるのだから、當業者は一縮みになつてしまつた。

改革令は同年の四五七の三ケ月に別れて、それ〴〵の向きへ發せられてゐる。さて、すこし其事實に立ち入つてお話を進める。歌舞伎芝居の方では、舞臺に使ふ衣裳にも絹物を用ひることを許さぬ、道具にも金をかけては行かない、布令が達したら、すぐ變更せよといふ命令、道頓堀の大西の芝居などは、これを開演中に喰つて、木綿物に摺箔をして、翌日からすぐに取替へたなど、いふ騒ぎが起る。また七月十五日附で出た禁令によつて、太夫、役者等諸藝人は、平日吉凶ともに裃袴を着用し、雪踏下駄の類を禁じ、役者は寒暑ともに往來するには必ず編笠を着用すること、一枚草履を穿つ可し。淨瑠璃太夫の肩衣は麻裃に限り、絹物斷じて罷り成らぬ。又人形遣ひ近來身分を忘れ、出遣ひに白粉を面てに塗り役者同樣婦人に媚び、男娼同樣の振舞ひ嚴重に慎む可し。またこゝまでは當然として、さて次のところが奇拔である。……その他町人同樣の生活をなす可からず……まるで人外扱ひだ。この禁令を用ひずに、うつかり厄難に罹つた東西の俳優など隨分ある。市川海老藏が舞臺で高價な印籠を用つたので江戸追放。米が一石一兩といふ時の相場に、年費三千兩といふ豪奢な生活をした梅玉中村歌右衛門が嚴しく糺明され、その他中

村富十郎の大坂立退き、芝翫、我童等の譴責等がその重なところで、大方の役者はお灸をすへられてゐる。さてこれから即ち、町人同樣の生活なす可からず、の方へ移ると、隨分亂暴な話で、藝人達は、土地家屋田畑等を所有することが出來ない、といふお布令である。そればかりか、住居をするにも道頓堀一圓を限つて、特定の限界以外へ出ることが出來ないといふ規定である。全く人種差別問題だ、とてもお話にならぬ、けれども、泣く子と地頭には勝たれぬといふ諺どほり、幕府の禁令に對して、なんと訴へやうもなかつたのである。

◇

心には不法なこの禁令に對して、慊らずとしてゐるものは無論有つたに違ひなからうが、上のお布令に反對の聲を上げるなど、いふことは當時思ひもよらぬことで、たゞ營業者はこの嚴しい禁令に怖れ戰いて、一縮みになつてしまつてゐたその時、唯一人、ホンの唯一人、この禁令に反抗の氣勢を揚げた快男子がある。それはいつたい何者だらう。

通稱百貫の安兵衛、といふと如何にも町奴か、俠客の親分といふやうに聞えるが實は三代目竹本筆太夫といふ淨瑠璃太夫のうちでも錚々の一人で、骨つ節の强い、可なり學問のある男である。この男は旅から歸つてくると大坂中がこの禁令で慄へあがつてゐるので、一時は吃驚したが、よく考へるとあまりに馬鹿々々しいので、歸るや否や、旅姿のまゝで、町内の年寄(嶋之内岩田町今の東淸水町)綿屋平三郎方へ駈け付けて、この善後策を相談して、總年寄へ陳情して貰ふことを懇請した。筆太夫は古い昔からの淨瑠璃太夫の位置や系統をよく知つてゐて、町人どころか武士も及ばぬ取扱ひを受けて來てゐることや、特に禁裏の保護を得て發達して來た光輝ある歴史によつても、河原乞食と稱さるゝ役者と同じ取扱ひのもとに、たゞの藝人と同格扱ひにされることが、どうしても心外でならなかつたのである。綿屋平三郎は、なる可くは上に逆らはない方が得策だと云はぬばかりに容易に筆太夫の懇願を訊かうとはしなかつたが、筆太夫は已れ一身上のことは兎もあれ、淨瑠璃道の歴史を汚し、而かも多くの太夫が此以後たゞの藝人に成り下がることは如何にしても忍びぬことどうしても普通人と同じやうに家屋田畑の所有權は認められなければならないと思つたので、再三熱心に平三郎を説いて遂に之れを動かし、やがて總年寄へ進達せしめ、果ては西町奉行所へと訴へて出た。今で云へば即ち行政訴訟である。

この訴訟がどういふ風に取扱はれたか、それは知るよしもないが「淨瑠璃大系圖」といふ本をまで出版してゐるほどの筆太夫だから、竹本筑後掾以來の、太夫三味線家持の衆中の覺書(略)やら、安治川新山の再興の時、役者からの冥加金は却下になつたが、太夫衆からの銀十枚の冥加金は納められたことや、その他いろ〳〵事實の證跡をもつて、百方陳情し

たことは疑ひのないことで、それ等の熱心は遂に効を奏して同年七月二十五日、西町奉行阿部遠江守から、太夫役者、その他芝居關係者のこらず出頭すべし、といふ差紙があつて、一同は戰々兢々として出頭した。さうして、遠江守から次の如くに云ひ渡された。

一、歌舞伎役者の者は道頓堀八丁町の内住居に限り、人形遣ひ同樣のこと。

一、淨瑠璃太夫の儀はこれ迄通り、家屋敷、田地田畑等買求め候共差構へ無之事。

筆太夫の意志は見事に貫徹したのである。さうして淨瑠璃太夫の權威は完全に保持されることになつたのである。實に斯道にとつて大變な効績だと云つてよい。

それから、この時の記述を調べると、太夫はかうして普通人並にどうやら認められることになつてゐるが、役者の方は人間並にさへ扱はれてゐないといふ事實がある。

町奉行所へ呼び出された澤山の藝人のうち、淨瑠璃太夫だけは、竹本筆太夫外何人となつてゐるが、役者の方では、中村歌右衞門外何四、といふことになつてゐる。まるで畜生扱ひである。居どころも、太夫は椽側の板間を許されたのに反して、役者その他は、すべて白洲の砂上に下座せしめてゐる讀者諸君は何處の國のことかと疑はれるだらう、正に日本のことである、封建制度の天保年度のことである。さて餘談はこれくらいにして置いて文樂の本題に歸らねばならぬ、博勞町稻荷境内の老舗を追はれた文樂は、その後どうなつて行くだらう。

◇

根據他を奪はれた文樂は、天保……弘化……嘉永年度の間道頓堀若太夫の芝居、堀江市之側の芝居、などを一時借りて轉々の興行を續け、安政元年一月になると、やつと本城の地を見附けることが出來た。その土地こそ讀者諸君には御想像もつかない、西横堀清水町の濱といふ、現今からは思ひも及ばぬところである。そこへ、文樂は假建ちながらも久しぶりで自分の家らしい家へ歸つて來たわけである。今度新築になつた文樂座がその舊跡のつい近くであるのもおもしろい。いつたい此濱地は天保十二年西横堀の川幅を狹めて、その東岸を埋め立てた新築地で、地固めの爲めに興行を許されて、上繫橋（四ッ橋）から南へ道頓堀に至る間數町の部分、可なり賑やかな興行地域になつたわけである。文樂の人形淨瑠璃を始め、說敎、祭文、講釋、新內、歌舞伎芝居、その他金毘羅さんの夜店まで手傳つてなか〳〵繁昌を極めた盛り場になつてゐて、まあ今での千日前といふ狀態である。こんな有樣で文樂は、どうやら此處で三年ばかり居据はつて興行をつゞけてゐたが、そのうち例の禁令といふ奴も次第に弛んで來て、どうやら穩やかな氣分になつてゐたので、文樂の座主植村翁はすかさず願ひを上げて、元の博勞町稻荷の境内へ復歸興行をすることを以てした、ところが、早速に許されて、安政三年九月、再び舊地に櫓を上げる喜びに會したのであつた。かうして都合よく、再び嵐に出遇ふこともなく、明治初年に至るまで、人形淨瑠璃繁盛の跡をのこしてゐる。

◇

さて、幕末から明治初年へかけてのその頃、文樂座と云はず、すべての淨瑠璃仲間に、どうしても忘れることの出來ぬ一人の太夫がある。中興の恩人と云つても然る可き人で、現今の淨瑠璃道にまで、其効績が及んで、明るい路を指導したといふ大變な人である。その名を三世竹本長門太夫といふ。天王寺の東方河堀口に宏大もない邸宅を持つてゐて、斯界の大立物として仰がれてゐたのだから、この邸宅を、世人は……河堀のお城……と呼んでゐたくらいである。この人の斯道に盡した効績は殆んど數限りもないほど澤山あつて、とても一朝一夕には語れないほどだが、普通の太夫さんなどの眞似の出來ない點は、武道……といふ堅い語り物でも、チャリでも或ひは艶物でも、なんでも語れて、而かも、他の太夫が疲れて語り切れないほどの長い丁場のものへまだ〳〵入れ文句をしてまでも長く語つて退けたといふ頗る範圍の汎い人で、諸藝を兼ると云つて諸國藝頭と名乘る俳優の尾上多見藏の如きと伯仲して、まことに得難い名人とされてゐた。直門に、七代咲太夫、五代湊太夫、四代長門太夫、初代長尾太夫、初代古靱太夫、六代綱太夫、四代住太夫、四代彌太夫、五代彌太夫、などの名人が輩出したかと思ふと、直門ではないが、六代染太夫、五代春太夫、三光齊、山城大椽、八代染太夫、攝津大椽、など皆この大樹の露に惠まれざるは無く、太夫以外でも、吉田玉造、桐竹紋十郎の人形、豐澤團平、豐澤廣助の三味線、多くはこの太夫の刺戟によつて太く且つ堅實に磨かれたのである。なんと素晴らしい有樣ではないか、明治から現代へかけての淨瑠璃道がこの大きな光被を受けてゐないと果して誰れが云ひ得るであらう。さてもう一つ沒してならない功績は、普通人としての長門である。これほどの大邸宅を構へ一世の師表と仰がれた達人であるが、日常生活など尤も儉約的で、天王寺から博勞町の稻荷へ出勤する間減多に駕など乘つたことはなく毎日テク〳〵歩いて通つた。日頃逢阪の坂道を歩いてゐると、牛馬の荷車などの喘いで通る有樣を見て、長門はふと道普請のことを考へた。ところが平生の金額では出來さうもない大金だから、心で秘かにこの計劃をめぐらして要用以外の出費を貯へ、且つ文樂座主に向つて、改めて永年通つた自身の駕賃を請求してこれに加え、遂に初一念を達して、日ならず逢阪の通りの道普請は完成したといふ彼が日常人としての美談がある。

◇

こんどは人形の名人吉田玉造の逸話を一つ話すことゝする

而かもその話はいまの名優中村鴈治郎の幼時にからまる趣味の多い話だから、これは是非聽いて貰ひたい。御承知かどうか知らないが、鴈治郎の生家は新町で有名な大茶屋、芝居でする夕霧太夫を出した扇屋、由緒のふかいその大茶屋の奥向きから話が始まる。その扇屋全盛の時代、鴈治郎のお祖父さんに當る三郎兵衛といふ人が當主の頃、天保十三年、玉造はまだ二十歳に足らぬ修業中のことゝ覺えてゐて貰ひたい。

この扇屋の主人三郎兵衛は非常に文樂の人形に趣味をもつてゐて、自身で人形の首も彫れば、遣ふことも可なり研究を積んでゐたものと見えて、文樂の連中なども、たゞ最貧筋として以外、時には三郎兵衛の教へを乞ふたと云はれてゐる。三郎兵衛はよく好んで人形舞臺を設けて、自身で人形を遣つて、多勢の太夫や抱への衆を見物（百二三十人も女がゐたといふ）にして、賑やかな催しをするのが常だつたが、その頃或時、親類縁者や知己を招いて特に花やかな人形淨瑠璃の催しを遣つたことがあつた。三郎兵衛が遣ふ三番叟の人形の左り手を手傳ふ爲めに玉造はその日特に招かれてゐたところがこの催しが始まらうとする時、見物側にゐたこの扇屋の抱へのお職の太夫で若紫といふのが、主人の三郎兵衛に忠告をして曰ク、この頃お上からは嚴しいお布令（前に述べた天保の改革）が出て藝人を内へ入れては、それこそ、どんなお咎めを受けるかも知れない、もしも、そんなことになつたら、この由緒のある扇屋の暖簾に疵がつきませうぞへ、とかなんとか、芝居もどきで異見をしたのである。三郎兵衛はつい自分の好む道にウツカリとしてゐたのだから、若紫の云ふところ至極もつともなので、すぐその催しを中止することになつたそこでせつかく來て貰つた玉造には、誠に御苦勞であつたといふので、日頃可愛がつてゐる男のことでもあるから、此日の記念にとて此日自分が遣はうとした自作の人形の頭を與へた、するとこれを見た、太夫の若紫も、自分が異見立てをした爲めに、中止になつて氣の毒だといふので、これは人形を遣ふのに貸して置いた、緋鹿子の扱き帶を記念にといふので玉造に與へた。玉造の喜び譬ふるにものなしといふ體裁で。彼れは此二品の好意が忘れられず終生床の間へ飾つて死ぬまで保存してゐたといふことである。稀代の名匠と謳はれた彼れが死の刹那の床の間にはこれが飾られてあつたのだが、いまはどうなつたことか……。

さて話はずつと明治八年へ飛ぶ。玉造は文樂の檜下として團平春太夫ともに覇を稱へ斯界に重きを爲してゐる。その頃の文樂座の番附を見ると、常に見慣れぬ名前の人形遣ひの名が突如として現はれる。曰ク吉田玉太郎、玉造の弟子だから玉太郎で不思議はないやうだが、これが誰れあらう、名優中村鴈治郎の幼時のことなのである。鴈治郎の本姓は林玉太郎

而かも突如として現はれて、すでに先代萩の沖の井といふ大役をふられてゐる。なぜだらう、その謎はすぐ解ける。

◇

扇屋は明治五年の遊女解放令といふのを喰つて、他の置屋など、共に百何十人の抱への女を全部解放しなければならぬ破目になつて、商賣をしまひ、遽かに零落をしなければならぬ悲境に陥つた。母なる人は幼ない鴈治郎と共に淋しく逼塞の生活をしてゐたが、幼ない頃から習ひ覺えた人形を遣ひに文樂の樂屋へ出入りをしてゐるうち、玉造は昔の恩義を思つて、幼ない鴈治郎を優遇した。而かし永い習慣から成り立つてゐる樂屋の位置といふものを云ひ立てゝ、鴈治郎優遇の番附などは、猛烈な反對を喰つたそうだが、なんと云つても檜下の權威をもつてする玉造の處置にはどう手の附けやうもなかつたと見える。

そこで鴈治郎は二三回公式に舞臺へ出てゐるが、あとは云ひわけばかりの役をつけて吉田玉太郎の名は三年ばかり續いて載つてゐる。而し、本人はもうすぐ延若の弟子としてその方へ移つてゐるから、空名だけである。玉造と鴈治郎の話はこれで終る。さて、これから、文樂座は松島から御靈境内へ移り、やがて松竹の手に移つて行くまで、まだなか〳〵話の種は盡きない。だがあまりに紙數を妨げてもいけないから、あとは次號へ廻はすことゝする。（つゞく）

「スブギ」固煉齒磨

本品を使用すれば幼時よりも老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。

何故なれば、**ギブス**煉齒磨は刷子がとゞかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ず**ギブス**煉齒磨を御用ひ遊ばせさすれば氣分は爽快になられます。

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢
大形中味　壹個　金六拾錢
小形　壹個　金四拾五錢

日本代理店
ロンドン　パリス
デイ・エンド・ダブリュー
株式會社　**ギブス**株式會社
横山商店
東區豊後町三番地

賀正

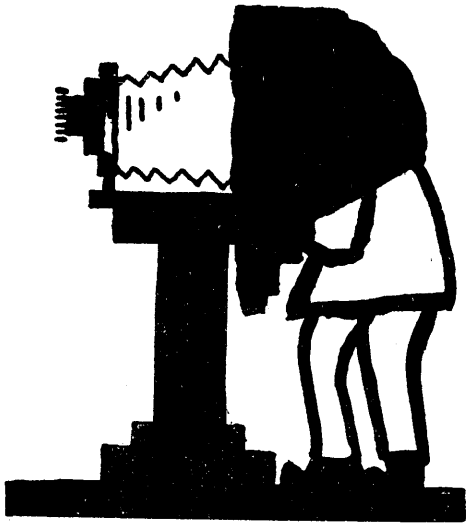
松竹土地建物興業株式會社

常務兼營業部長　多田福太郎
常務兼事業部長兼庶務部長　福井福三郎
常務兼外交部長　岡清三郎
經理部長　兎太靜太郎
幕内部長　田村友之助
映畫部長　千葉吉造
宣傳部長　鳥江銕也

松竹各座主任

大阪松竹座　有本昌平
浪花座　下村清次郎
中座　山口太三郎
角座　山本啓二
朝日座　藤井清治
辨天座　岡崎茂一郎
樂天地（顧問）　庄野元章
中井良之輔
文樂座　大塚良三
春日座　岩瀬利之助
新世界松竹座　宮崎瀧造
京都南座　大橋勇
京都座　古田龜輔
松竹座　山名儉司
夷谷座　爵崎武
歌舞伎座　三好又郎
神戸松竹劇場　吉野榮二郎
松竹座　長良平
聚樂館　山本常郎
名古屋松竹座　佐々木芳治

颯爽たる
初春のお姿を
まづ優秀の技術を誇る
當館で御撮影下さい



賀正

高津郵便局東
山崎寫眞館
電話南四二四四番

編輯後記

松本泰三

新年お目出度う。

顏見世號は普通の定價より五錢も値上げしたから賣れゆきを心配しないでもなかつた。然し豫想外の好成績、第一版賣切れ、第二版も賣切れ、本誌發行以來の賣行きには驚かされた。

◇

さて「新年號」のプランだが、發行は三ケ日を迎へてから、まア七日頃にする豫定でゐたところ、こん度も嚴命一下、三十一日までに出すことになつた。それもめつたに病氣をした事のない自分が胃ケイレンで休んでゐるところへ使ひが來た。適切な言葉ではないが、まア虛をつかれた樣な形がないでもなかつた。それが二十一日の事だから、原稿も思ふやうには集つてゐない。漸やくにして諸彥の前にどうにかこうにか整へてお目見得さす事が出來た。自信のある編輯とはいへないが、前號同樣三十五錢にしたいのを三十錢にした處で御勘辨が願はしい。

◇

四ツ橋に工事中だつた文樂座は一ケ年の工程を經てこの程竣工、十二月二十六日は晴れの開場式が擧行された。新年は開場初の興行にふさはしい人形淨瑠璃が開演されるので本號は「文樂座號」にした。東京から高須芳次郎、岡鬼太郎、安部豐、大阪では加藤亨博士、八木善一、中井浩水の諸氏を煩してその御執筆を願つた。殊に加藤博士は過般帝劇で淨瑠璃の御前演奏を申上げた程の文樂趣味の大家である事を紹介して置く。

◇

土佐太夫を煩して「文樂の竣工と思ひ出の記」の原稿を戴いた事は道頓堀には珍しい。この他「文樂のお話」で文樂人形淨瑠璃の沿革史をも掲載してあるが、これは日比繁次郎氏に御執筆を願つたものである。これは次號にも續載する事になつてゐる。

◇

中座は鴈仁合同、浪花座は福助、延若、左團次等の關西大歌舞伎、道頓堀には久しぶりで歌舞伎の櫓が二つ並んだ。「寺小屋」について森ほのぼ、高谷伸の兩氏から原稿を得た他、椿氏から新口村の執筆を願つた。

とまれ二月號は、諸彥の期待に勝るものを送り出す決心である。

昭和五年十二月一日發行

月刊雜誌『道頓堀』第五年第四十輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。

◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵費壹錢五厘稅）

昭和四年十二月三十日印刷

昭和五年一月一日發行

大阪市南區久左衞門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

編輯兼發行者 鳥江銕也

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

印刷者 松本米藏

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衞門町八番地

發行所 松竹土地建物興業株式會社 道頓堀編輯部

電話〔南一二四〇番 六六八五番〕

新年お目出度うございます……

麗しき御機嫌謹んで御慶申上げます……

昨年中は一方ならぬ御贔負を賜り有難く御禮申上げます

本年も相變らず御引立殊に古典藝術の殿堂文樂座の食堂では氣分本位の洋食堂も御座いますれば心齋橋筋御散策の砌は勿論御結婚御披露洋式御宴會の御便宜も御座います

大阪市四ツ橋

南一溫泉料理

文樂座南一

宮河計之助

電話南一七〇一番 一三二番 西六三〇番 五二九一番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和四年十二月三十日印刷
昭和五年一月一日發行

道頓堀第五年一月號　第四十輯

金參拾錢（郵稅一錢五厘）